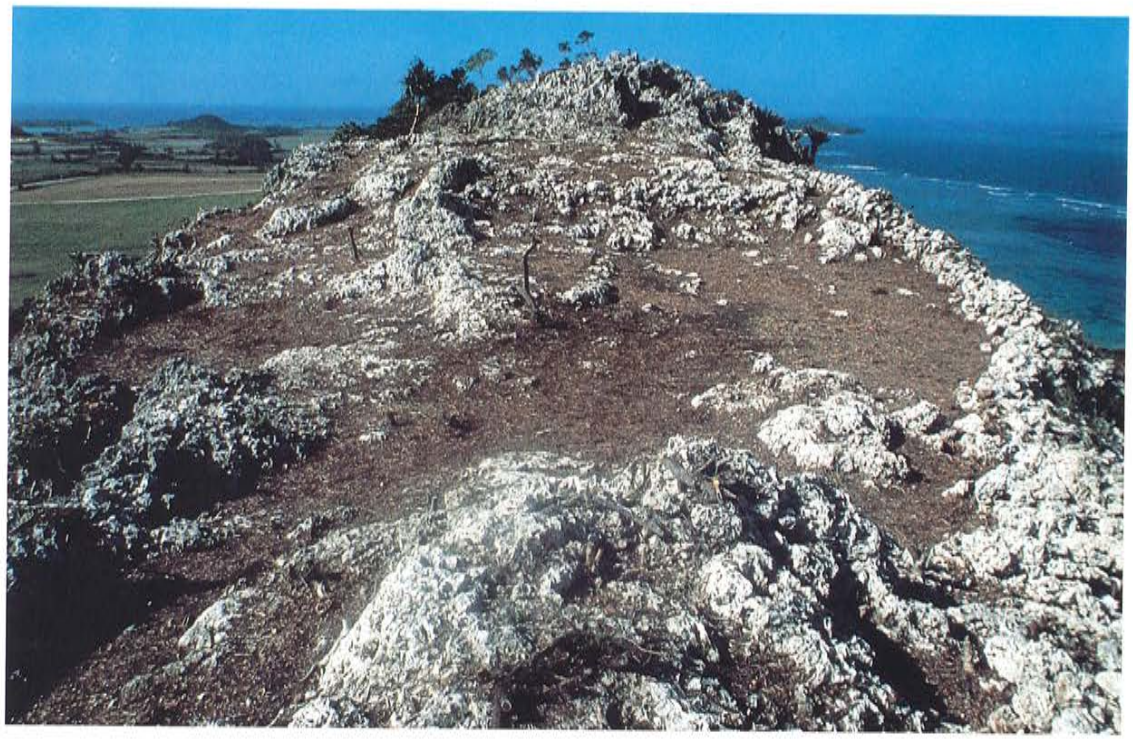
沖縄県文化財調査報告書第94集

ぐすく

グスク分布調査報告書（II）
―宮古諸島―

1990年3月

沖縄県教育委員会



オイオキ原遺跡

箕島（ムイズマ）遺跡

高腰城跡

序

沖縄には、グスクと称される遺跡が本島及びその周辺離島から宮古、八重山の諸島域に至るまで数多く分布しております。その数は200ヶ所以上とも言われております。その特徴として、眺望のきく石灰岩丘陵上の高所や海岸部に突出した小丘上に位置し、野面や切り石の石積みの施設を有しているものであります。

これらのグスク遺跡は沖縄の古代から中世の時期の歴史の流れの中において、きわめて特異な立地形態をとるとともに、貴重な文化遺産であります。ある意味では琉球王国形成の萌芽がグスク遺跡が形成されたグスク時代にまで辿ることが出来るとされています。

グスク分布調査は、このような琉球史上重要な時期の遺跡の分布状況を把握することによって、近年活発になってきた諸開発によって破壊することのないよう事前の十分な協議調整の基礎情報に供するとともに、歴史研究、文化財学習の基礎資料に資することを目的として実施したものである。本調査においても、新事実の発見が相次ぎ、宮古諸島におけるグスクの立地形態を知ることが出来、沖縄本島に位置するグスクとの比較検討など多大な成果をあげることが出来ました。

本報告書は、先に刊行されました『ぐすく－グスク分布調査報告(1)－沖縄本島及び周辺離島－』に次いで、宮古地域における分布状況について報告するものであります。

本報告書が諸開発へ資するとともに、宮古におけるグスク研究に広く活用されることを期待します。

平成２年３月

沖縄県教育委員会
教育長　高 良 清 敏

例　　言

1．本報告書は、国庫補助を得て1988年度、1989年度、1990年度の３ヶ年に亘る継続事業の成果を記録したものである。

2．本調査は、宮古本島と周辺離島及び伊良部島、多良間島を含む、１市、３町、２村を対象区とした。

3．本調査は、城跡と呼ばれる特徴ある遺跡を限定し特に縄張り図と地形測量図を作成し、さらに小範囲の試掘を入れ、それぞれの特徴を把握することに努めた。

4．遺跡の測量図、地形図の作成については、県文化課専門員の調査によった。

5．本報告書のタイトルは、先に刊行された『ぐすく－グスク分布調査報告(1)－沖縄本島及び周辺離島－』の報告書を踏襲した。
　なお、グスクの呼称については、宮古地区でも判然としないながらもグスクと城跡の２通りの使われ方がありそのまま記述した。また、宮古におけるグスクの解釈については第Ⅱ章調査地域の地理的・歴史的環境（総論）の中で触れてある。

6．各遺跡の概要、原稿執筆者分担は第Ⅰ章、第３節のとおりである。

7．各グスク遺跡一覧表の番号と分布図番号及び文中の遺跡ナンバーについては符号している。

8．第１図、第10図、第18図、第22図に示したグスク分布は考古学的調査で確認された遺跡に限定して列記した。

9．本書に使用した国土基本図、５万分の１は国土地理院発行のものを使用した。また１万分の１の地形図は、各市町村役場発行の資料によった。

10．付録中のグスク時代相当期の遺跡については、『宮古の遺跡－詳細分布調査報告書－』沖縄県教育委員会、1983年３月刊行の報告書と『特別展　グスク』沖縄県立博物館、昭和60年11月１日刊行の図録から抜粋して作成した。

本 文 目 次

序
例 言

第Ⅰ章 調査概要 …… 2
第1節 調査に至る経緯 …… 2
第2節 調査方法と調査の経過 …… 2
第3節 調査体制及び成果の記録 …… 3

第Ⅱ章 調査地域の地理的・歴史的環境（総論） …… 6
第Ⅲ章 グスクの分布状況とその概要 …… 13
1．平良市 …… 13
2．城辺町 …… 32
3．上野村 …… 49
4．下地町 …… 56
5．伊良部町 …… 61
6．多良間村 …… 65

第Ⅳ章 グスクに関する伝承及び古文献等 …… 72
第Ⅴ章 宮古の主要グスクの内容 …… 77
1．オイオキ原遺跡 …… 77
2．箕島（ムイズマ）遺跡 …… 85
3．高腰城跡 …… 97
付 録
宮古グスク関係文献一覧 …… 102
索引 …… 104

挿　図　目　次

第１図　宮古諸島の位置図 …… 1
第２図　平良市のグスク及び相当期遺跡の分布図 …… 9
第３図　宮古のグスク分布図 …… 11
第４図　上の頂遺跡位置図 …… 15
第５図　大浦多志（ウプラタティ）遺跡位置図 …… 17
第６図　オイオキ原遺跡位置図 …… 19
第７図　石原城（イサラバリ）遺跡位置図 …… 21
第８図　石原城（イサラバリ）遺跡地形測量図 …… 22
第９図　西銘城跡位置図 …… 24
第10図　西銘城跡見取図 …… 25
第11図　サガーニ遺跡位置図 …… 27
第12図　サガーニ遺跡見取図 …… 28
第13図　飛鳥御嶽遺跡位置図 …… 30
第14図　城辺町のグスク及び相当期遺跡の分布図 …… 31
第15図　牧の頂（マキノツヅ）遺跡位置図 …… 34
第16図　牧の頂遺跡見取図 …… 35
第17図　高腰城跡位置図 …… 36
第18図　野城遺跡位置図 …… 39
第19図　野城遺跡出土遺物 …… 41
第20図　箕島（ムイズマ）遺跡位置図 …… 44
第21図　上比屋森（ウイピャムイ）遺跡位置図 …… 44
第22図　上比屋森遺跡見取図 …… 45
第23図　上比屋森遺跡遠見台 …… 46
第24図　上野村のグスク及び相当期遺跡の分布図 …… 48
第25図　大嶽城跡位置図 …… 50
第26図　大嶽城跡見取図 …… 51
第27図　手真嘉（テマカ）城跡位置図 …… 53
第28図　手真嘉（テマカ）城跡見取図 …… 54
第29図　下地町のグスク及び相当期遺跡の分布図 …… 55
第30図　喜佐真御嶽遺跡位置図 …… 57
第31図　喜佐真御嶽遺跡見取図 …… 58

第32図　伊良部町のグスク時代相当期遺跡の分布図 …… 60
第33図　貝製品 …… 62
第34図　運城御嶽遺跡の縄張り（略図） …… 66
第35図　運城御嶽遺跡位置図 …… 67
第36図　採集遺物 …… 70
第37図　多良間村のグスク及び相当期遺跡の分布図 …… 71
第38図　主な文献上の城（按司）とその配置 …… 76
第39図　オイオキ原遺跡縄張り測量図 …… 78
第40図　オイオキ原遺跡採集遺物 …… 81
第41図　オイオキ原遺跡採集遺物 …… 83
第42図　箕島（ムイズマ）遺跡実測図 …… 89
第43図　箕島（ムイズマ）遺跡出土遺物 …… 91
第44図　石垣内採集遺物 …… 93
第45図　箕島（ムイズマ）遺跡採集遺物 …… 95
第46図　城辺町高腰城縄張り測量図 …… 99

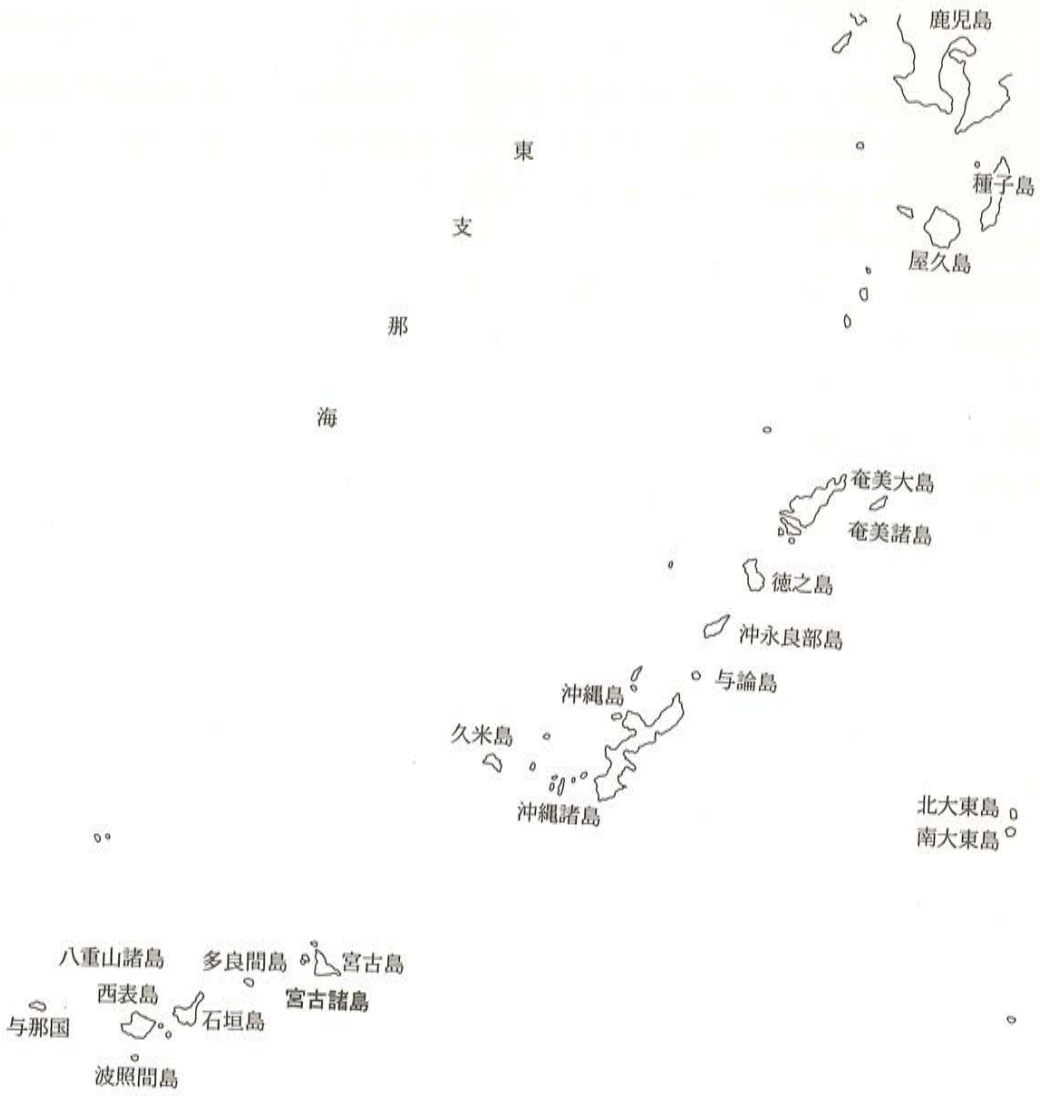
表　目　次

表１　平良市のグスク及びグスク時代相当期の遺跡一覧 …… 10
表２　城辺町のグスク及びグスク時代相当期の遺跡一覧 …… 33
表３　上野村のグスク時代相当期の遺跡一覧 …… 52
表４　下地町のグスク時代相当期の遺跡一覧 …… 59
表５　伊良部町のグスク時代相当期の遺跡一覧 …… 61
表６　多良間村のグスク時代相当期の遺跡一覧 …… 67

図　版　目　次

図版１　上の頂（ウイヌツズ）遺跡（西側より） …… 14
図版２　大浦多志（ウプラタテイ）遺跡（北西側より） …… 16
図版３　オイオキ原遺跡（南側より） …… 18
図版４　石原城（イサラバリ）遺跡（南側より） …… 20
図版５　西銘城跡（南東側より） …… 23
図版６　サガーニ遺跡（南側より） …… 26

図版 7　飛鳥御嶽遺跡（南側より）…… 29
図版 8　遺跡近景 …… 34
図版 9　遺跡近景 …… 37
図版10　遺跡近景（南より）…… 40
図版11　遺跡遠景（東より）…… 42
図版12　遺跡近景 …… 43
図版13　上、遠見台全景（北側より）…… 47
　　上、遠見台近景（南東側より）…… 47
図版14　大嶽城跡遠景 …… 49
図版15　手真嘉（テマカ）城跡遠景 …… 52
図版16　喜佐真御嶽遺跡遠景 …… 56
図版17　上、伊良部東元島遺跡 …… 63
　　下、伊良部西元島遺跡（中央の林内にスサビミャーカー）…… 63
図版18　伊良部町　スサビミャーカー …… 64
図版19　運城御嶽遺跡近景 …… 65
図版20　運城御嶽遺跡遠景 …… 66
図版21　採集遺物 …… 69
図版22　上、最上担の郭 …… 79
　　下、同　　上 …… 79
図版23　上、南側に取り巻く石積み …… 80
　　下、同　　上 …… 80
図版24　オイオキ原遺跡採集遺物 …… 82
図版25　オイオキ原遺跡採集遺物 …… 84
図版26　遺跡遠景 …… 85
図版27　作業風景 …… 86
図版28　遺跡内の状況 …… 87
図版29　遺跡内の状況 …… 88
図版30　箕島（ムイズマ）遺跡 …… 92
図版31　石垣内採集遺物 …… 94
図版32　箕島（ムイズマ）遺跡採集遺物 …… 96
図版33　上、土器 …… 100
　　下、類須恵器 …… 100
図版34　白磁碗 …… 101



第１図　宮古諸島の位置図

第Ⅰ章　調 査 概 要

第１節　調査に至る経緯

昭和52年度から４ヶ年計画で進められてきたグスク分布調査は、沖縄本島及びその周辺離島を対象として勢力的に実施されてきた。本島北部を出発点として調査が進行した。ところが、沖縄本島北部地区、中部地区までの調査が終了した時点で、諸般の事情が重なり昭和54年度、昭和55年度の２ヶ年においては中途調査を中断せざるを得ない状況となった。昭和56年度には、南部地区が終わり沖縄本島全地区が網羅されたことになり、翌昭和57年度にはその成果を出すことができた。実に６年の歳月をかけての長い調査となった。
これらグスク分布調査は、沖縄県が本土へ復帰して以後、今日に至るまで大規模化した諸開発による遺跡の破壊、消滅への歯止めをねらったものである。特に鉱業権との関わりで石灰岩丘陵上の高所に位置するグスク遺跡が消滅の危機に瀕することから、現地踏査を重ねながら、縄張り図や性格等を把握する中に早急なグスクマップを作成していくことが痛感されてきた。

その間、新事実の発見も相次ぎ、考古学からのアプローチによる立地、形態の差異の検討の必要性があることが確認された。
このような成果の中に立って、さらに宮古、八重山地域を含めた先島地区におけるグスク遺跡の展開と様相の実態把握が必要となった。これらは沖縄本島に点在したグスクの立地と先島における同時期に形成されたであろうと判断されるグスクの立地的な相違の比較研究を含めての意味合いがある。さらには諸開発との調整資料の作成である。宮古、八重山地域ともにそれぞれの歴史的環境があり、大きく地区割される。このように空白になっていた先島地区へのグスク分布調査が７年ぶりに入れられることになった。昭和63年度から平成元年度までの３ヶ年計画で、宮古地区に分布するグスク調査を開始することになった。さらに八重山地域に調査を継続していく予定である。

第２節　調査方法と調査の経過

今日までに調査された中に、沖縄本島及び周辺離島においてグスクとして呼称されてきた遺跡の数々やそうでないもの、あるいは海岸部に最も近接した場所、拝所となっている場所とそれぞれに立地形態の選定に相違がある。

あるいは古えから地元の人々によってグスクと呼ばれたところ、さらには古文献の中でのグスクを列記した記事などを対象に調査されてきた。もちろんこれらは考古学的見地からの現地踏査を主体に、1件ずつ確認していく調査方法がとられてきた。
今回の宮古地区における調査においても基本的にはフィールドワークを中心とした方法をとっていった。文献や口碑伝承あるいはこれまでに確認されてきた遺跡をもとに平良市、城辺町、下地町、伊良部町、上野村、多良間村を含めた1市3町2村の広域にまたがった確認調査となった。

また、単に表面踏査のみにとどまらず、特徴的な遺跡については全体の草地の伐採を行い地形図を含んだ縄張り図を作成しながら試掘を入れて遺物の採集や石垣の縄張りについて確認していった。また所在地については聞き取り調査も踏まえながら10,000分の1の国土基本図にプロットしていった。

特に調査項目については名称（呼称）について検討していくとともに所在地の地番の明確化、立地状況、縄張り（石垣）の範囲、遺構（付属の施設）、古文献、口碑伝承、出土遺物、保存状況（開発との関連）等を記載していくことにした。
遺跡全体の状況としては、写真撮影により遠近景から遺構の細部に至るまで記録にとどめることにした。以上のような観点に立って宮古地区のグスク分布のありようを概観していくと大概的には、沖縄本島やその周辺離島において確認されたグスクに類似している感をもった。いわゆる石灰岩丘陵上の高所に位置し野面の石積みをもった施設を有していることである。中には城館的な性格をもったものや拝所的機能が残った施設などが確認される。いずれも内部にフラットな面をもっている。

石積みは野面の場合がほとんどで崖上に沿う形で作られており、自然岩と岩との間を石積みで埋めあわせている技術もみられる。また、表面採集や試掘から得られる遺物を見ると中国製の磁器、陶器片、土器、鉄製の釘、鉄鏃、刀子など共通する資料となっている。

第3節　調査体制及び成果の記録

1．調査体制

調査体制については県文化課の史跡・埋蔵担当専門員が主たる調査員となり、当該の市町村の文化財担当職員へ協力依頼していった。また現地での伐採作業や試掘調査については地元の方々を作業員として雇用し実施していった。聞き取り調査についても地元の古老を中心に進めていった。

調査員（県文化課　史跡・埋蔵文化財担当専門員）

安　里　嗣　淳　（主幹兼係長）
大　城　　慧　（専　門　員）
上　原　　靜　（　　〃　　）
島　袋　　洋　（　　〃　　）
金　城　亀　信　（　　〃　　）
盛　本　　勲　（　　〃　　）
金　城　　透　（臨　　任）
上　地　千賀子　（　　〃　　）
豊見山　　禎　（充指導主事）
島　袋　　洋　（嘱　託　員）

発掘調査作業員

第一次調査（1987年）

宮里金蔵、立津景勇、仲間勇吉、久高徳市、上地清吉

第二次調査（1988年）

砂川信子、藤村久子、上江洲初子、亀浜ルリ子、友利妙子、當真美恵子

第三次調査（1989年）

謝敷キク、謝敷和子、福原栄子、新城喜代、新城里子、砂川信子、池原和子、新城ユキ子

資料整理作業員

実測作業・・・・・池原直美、玉寄千恵子、安次富智子

トレース作業・・・西銘定子、新垣千恵子、石嶺真由美

図版作成・・・・・大城聖子、城間光子、城間悦子、渡慶次ゆかり
当山慶子、大城美智子

2．成果の記録

第Ⅰ章、第Ⅴ章１ …… 大城　慧
第Ⅱ章 …… 安里嗣淳
第Ⅳ章、付録 …… 上原　靜
第Ⅴ章２ …… 島袋　洋
第Ⅴ章３ …… 盛本　勲

各遺跡についての概説は市町村別に次のとおり分担して執筆した。

１、平良市（大城慧）
①上の頂（ウイヌツズ）遺跡、②大浦多志（ウプラタティ）遺跡、③オイオキ原遺跡、④石原城（イサラバリ）遺跡、⑤西銘城跡、⑥サガーニ遺跡、⑦飛鳥御嶽遺跡

２、城辺町（盛本勲）
⑧牧の頂（マキノツヅ）遺跡、⑨高腰城跡、⑩野城（ヌグスク）遺跡、⑪上比屋（ウイピヤ）森遺跡、⑫箕島（ムイズマ）遺跡

３、上野村（島袋洋）
⑬大嵩城跡、⑭手真嘉（テマカ）城跡

４、下地町（島袋洋）
⑮喜佐真御嶽遺跡

５、伊良部町（上原靜）

６、多良間村（金城亀信）
⑯運城（ウングスク）御嶽遺跡

報告書全体の編集は大城があたった。

第Ⅱ章　調査地域の地理的・歴史的環境（総論）

(1)　宮古にグスクはあるか

沖縄本島およびその周辺の島々には、「グスク」あるいは「グシク」と呼ばれる小高い丘に立地する遺跡がある。その多くは琉球石灰岩の石垣をめぐらしている。グスク遺跡の内外からは、グスク土器、陶質土器（須恵器）、中国陶磁器、中国貨銭、鉄器、炭化米麦などが出土する。後半の時期には、大型のグスクは切り石の高い城壁とアーチの門を築き、基壇に館を建てた。一部には瓦葺きの館もあった。

これらの物質文化の諸相は、グスクの時代が新しい社会、経済段階、すなわち生産経済、階級社会に入っていたことを示している。また、この時代に形成された社会と文化の特色ある要素は、今日につながる沖縄の伝統的な生活文化の基層をなしているものもあり、歴史的にはひとつの重要な画期であったと言えよう。

ところで、このような「グスク時代」の物質文化には、グスク（グシク）と称される遺跡にのみ見られるわけではない。沖縄本島一帯では「トゥン（殿）」、アシャギ、ウタキなどの地域の信仰の場となっているところや、古島とよばれる村跡の一部においても、グスク時代と同時期の中国陶磁器やグスク土器などが出土することもある。

このようなグスク（グシク）は宮古諸島にも存在するだろうか。その前にグスク遺跡の概念を明確にする必要がある。一般にグスク（グシク）遺跡は上述のような遺構、遺物を伴うが、グスク（グシク）と称されていても遺構、遺物をほとんど伴わない場合と、グスクとは称されてないが、グスク時代の遺構、遺物を出土する場合がある。さきの沖縄諸島篇のぐすく分布調査においては両方ともその対象とした。名称のみを基準にすると、宮古諸島にはグスク遺跡は一件のみである。「○○城（じょう）」と呼ばれる遺跡はいくつかあるが、それは当時からの名称ではないと考えられる。いくつかの宮古関係の文書に見られる「城」の用語は、すでにその遺跡が本来の機能を停止した後代の呼称である。もっとも、当時の用語が継承されている可能性がまったく否定されるわけでもない。

一方、沖縄諸島のグスクのような立地（小高い丘）、構造（石垣）、内容（中国陶磁器等）との類似という点からみると、「○○城（じょう）」遺跡のほかに「○○頂（つづ）」、「○○御嶽」などの遺跡が宮古諸島にある。しかし出土品の内容だけから見ると、「元島（ムトゥズマ）」も同時代をかなり含む。したがって、宮古においてどれを「グスク」とするかは断定しがたいところもある。今回の分布調査では、グスク（グシク）の呼称の有無にかかわらず主に小高い丘への立地と石垣、さらに宮古式土器や中国陶磁器などを

出土する遺物をグスクとして扱うこととした。これらの遺跡の形成された時代「グスク時代」として把握しうるかは、議論の分かれるところであろう。しかし後に述べるように、その前の時代までは沖縄諸島とは文化的にも政治的にも別の世界として歩んできた宮古・八重山諸島が、この時代に至って共通の文化圏を形成し、やがて政治的統合を経て琉球王国へ組み込まれていく前段の時代となるのである。そういう意味では「グスク時代」の概念に含めてよいと考える。あるいはグスク時代に相当する時代として別の呼称があってもよい。

ところで、宮古の「元島（ムトゥズマ）」遺跡は出土品においてこれらのグスク的様相と、近世の古島（村跡）的様相をもっている。これらの遺跡は明らかに「村跡」であるが、グスク時代の中での位置づけをどうするか、小高い丘の遺跡とどう異なるのかという論議を必要としている。

(2) グスク時代以前の宮古

グスク時代以前の宮古諸島は、原始（先史）時代である。原始時代の琉球諸島は、北琉球圏（奄美・沖縄諸島）と南琉球圏（宮古・八重山諸島）に分かれていた。両地域の交渉はほとんどなく、北琉球圏が九州などの縄文文化や弥生文化との関わりをもっているのに対し、南琉球圏は南方につながる独自の地域色の強い文化を展開させてきた。南琉球圏の原始時代は大きく前期と後期の二つの時期に区分される。現在のところ前期文化は八重山のみに存在する。宮古諸島に人間が住みついたのは後期の頃で、その生活と文化は概ね次のようなものであった。

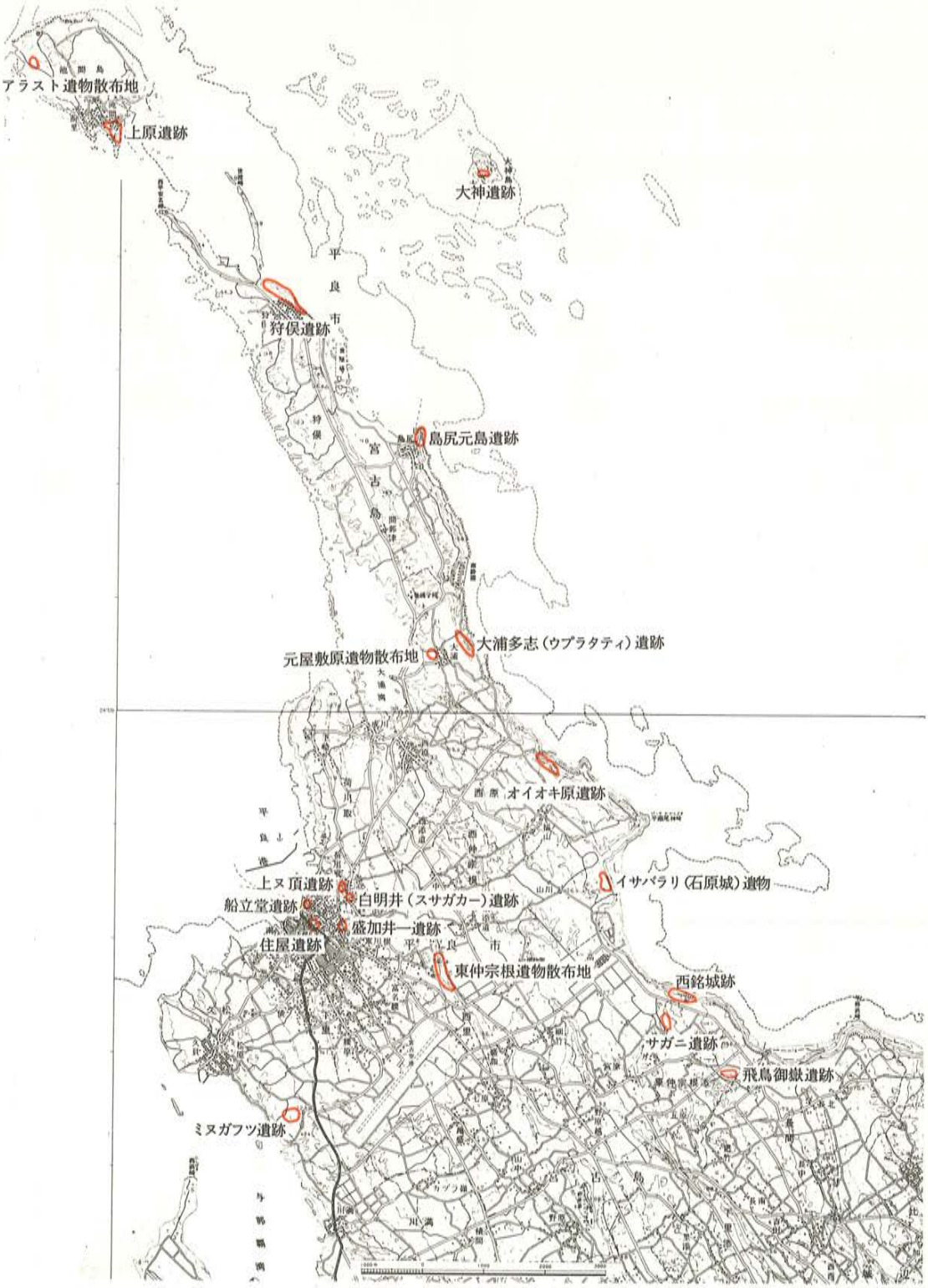
- 海岸の砂丘地に居住し、前面の珊瑚礁を主な生業の場とする採取経済の段階であった。
- 土器を使用せず、調理は石蒸し調理法であった。農業はまだ始まっていない。
- 石器はかなり少ないが、石垣島から入手して作った。その形は主に局部磨製石斧である。
- シャゴガイの貝殻でつくった貝斧を大量に使用していた。これはフィリピンや南大平洋に分布する文化に類似する。特にフィリピンとの関連が強いものと考えられている。

かれら宮古原始人たちがその後どのような経過をたどったかはまだ不明である。すなわち、「グスク時代」相当遺跡あるいは元島遺跡などへ連続的につながるのか、いったん途切れてから新たな移住者が次の時代を担うのか、遺跡・遺物の上からはいずれとも断定しがたい。

(3) 宮古の「グスク時代」

宮古の「グスク時代」はおそらく農耕社会であり、階級社会の段階に入っていた点においてその前の原始（先史）時代と決定的に異なる。この時代は対外交易が行われ、中国陶磁器が大量にもたらされた。鉄器の導入は生産と生活に大きな画期をなしたことであろう。農耕集落の形成、農耕にともなう祭事と御嶽の形成、政治的社会の形成などの重要な歴史的展開はこの時期にみられたのである。これらの動きは、沖縄本島のグスク時代と概ね共通するものと見られる。

原始時代後期には中国の銭貨「開元通寶」の出土、スイジガイ製品分布の共通現象に見られるように、南北琉球諸島間にわずかながら関わりが生じはじめる。それを胎動期として、グスク時代前半には上述のようにさまざまな分野の共通性が見られ、文化的共通圏の形成に至る。その後15世紀末～16世紀初頭に北琉球圏の「琉球王国」に組み込まれることによって、独自の圏域を維持した「みやこ」の世界は終わりを告げることとなる。その間に形成されたのが、小高い丘のいくつかの名で呼ばれる遺跡群である。



第２図　平良市のグスク及び相当期遺跡の分布図

表１　平良市のグスク及びグスク時代相当の遺跡一覧

番号	遺 跡 名	採集及び出土遺物	時　期	備　　考
1	ミヌガフツ遺跡	土器・陶磁器		
2	東仲宗根遺物散布地	土器・須恵器・陶磁器		
3	盛加井一（ムズガー）遺跡	土器・陶磁器		昭和50年12月11日市指定文化財
4	住屋遺跡	土器・陶磁器・貝製品・骨製品	15～16世紀	1980年、1981年～1982年に緊急発掘調査が実施された。
5	船立堂遺跡	土器・陶磁器		口碑伝承では鍛治神との関連で捉えられている。
6	保里遺跡	土器		別称保里グスクと呼ばれている。
7	白明井（スサガカー）遺跡	土器・陶磁器		集落跡
8	上ヌ頂遺跡	土器・陶磁器・石器須恵器・骨製品・鉄滓・フイゴ片	14～15世紀	嵩元政秀・友寄英一郎「上の頂(ウイヌツズ)遺跡調査概報」『琉大史学』四号1973年
9	元屋敷原遺物散布地	土器・陶磁器		集落跡
10	上原遺跡	土器・青磁		集落跡
11	アラスト遺物散布地	土器・青磁		
12	大神遺跡	土器・陶磁器		集落跡
13	狩俣遺跡	土器・陶磁器・鉄滓		
14	島尻元島遺跡	土器・陶磁器		市指定文化財 1978. 2. 7
15	オイオキ原遺跡	土器・陶磁器・鉄製品・貝製品		
16	石原城(イサラバリ)遺跡	土器・陶磁器・石斧		
17	西銘城跡	土器・陶磁器		市指定文化財 1977. 3. 16
18	サガーニ遺跡	土器・青磁		
19	飛鳥御嶽遺跡	土器		別称「西銘城」

第3図　宮古のグスク分布図

第Ⅲ章　グスクの分布状況とその概要

1．平良市（ピィサラ）

平良市はその主要面積を宮古本島に位置しながら北側には狩俣から洋上約2㎞に池間島とさらに東北方洋上約4.5㎞には大神島の離島を含む63.9㎢の広い面積を占めている。東側に城辺町、南側には上野村と下地町が接する。
宮古本島の北側から西側部分の３分の１を占め行政上の境界としている。

平良港、その昔は漲水港として良好な港を有し商港として外界との交流の窓口として栄えてきた。あるいは漁業基地として、さらには伊良部島や多良間島への海上交通の要所として今に活気を呈している。文字どおり政治、経済、産業から交通に至るまでの各種の分野において中心的役割を担ってきた。その活動の兆しは古く歴史時代を辿っていくと豊見親の時代にその祖形を求めることができ『宮古島旧記並史歌解（宮古旧記編）』の記事には、蔵元の増設と周辺の村々の統合がはかられると同時に、現在の宮古支庁が存在するところから北、東方へかけて、次第に発展していったことがわかる。御嶽、港、蔵元を中心に栄えていったとされている。

仲宗根豊見親が政治を納める時期には、一層強力に中央政庁の中心地となってくる。

漲水御嶽を中心として平良五箇字とされてきた仲宗根、南宗根（ぱいそね）、後にスンダテイ（下里）、北方の北宗根（にそね）、後にンキャドラ（荷川取）、さらに後には仲宗根から分割していったとされている。東仲宗根、西仲宗根、西里、下里の行政区を確立していく。この五箇字を平良（ピィサラ）としている。

また『近世に至ると平良・下地・砂川（うるか）三間切の頭（かしら）をはじめ多くの役人が執務し、宮古中から集まる粟、上布などの上納物がここから積み出された。』とされている。

1908年（明治41年）には、平良間切から平良村となり、さらに1924年（大正13年）には町に、1947年（昭和22年）３月には市制を施行している。

現在に至っても宮古全域における政治、経済、文化のあらゆる面における中枢的役割をはたしている。近年はさらに市街地の広がり、港湾の整備や近郊の町村を結ぶ道路網の整備、池間島への架橋工事など急速に変貌をとげつつある。

参考文献

『平良市史第一巻通史編Ⅰ（先史～近代）』平良市史編さん委員会　平良市役所1979年11月30日

仲宗根将二「平良市」『沖縄大百科事典 下ナ～ン』沖縄タイムス社1983年５月30日

平良市で確認されたグスク遺跡は７ヶ所、またグスク時代相当期の遺跡は12ヶ所となっている。現在のところグスク遺跡は池間島、大神島、を除いた地域に大小に点在していることが確認された。特に平良市、城辺町に片寄って形成された感があり、石積みをもった石灰岩丘陵上の高所やあるいは独立した小丘に形成されている。平良市の場合は、北側から北東側よりの海岸線を背景に点在し、その周辺にはグスク時代相当期の遺跡が立地する。

確認されたグスク遺跡のほとんどが、土器や輸入陶磁器が散布する。宮古支庁や北市場付近にも根間城、外間城などと出てくるが、現地での確認が出来なかったことや、聞き取り調査の中でも判然としないことから口碑伝承としてとどめることにした。今回のグスク分布の中からは除外してある。以下、グスクとして確認できた遺跡について概略を記す。

①上の頂（ウイヌツズ）遺跡

上の頂遺跡は現厚生園の北方250m程の小丘上（標高8m）に立地するとされている。嵩元政秀・友寄英一郎の両氏によって1969年に発掘調査が実施されている。その当初においても付近一帯は採石によって潰滅の状況にあり、丘陵地では陶磁器などが採集されている。上の頂御嶽の南東側斜面に２×４mのトレンチを南北に入れ、北側をⅠブロック、南側をⅡブロックとして発掘している。出土遺物は土器、陶磁器、南蛮、須恵器、フィゴ片、鉄滓、石器、骨製品、魚・貝類の自然遺物となっている。

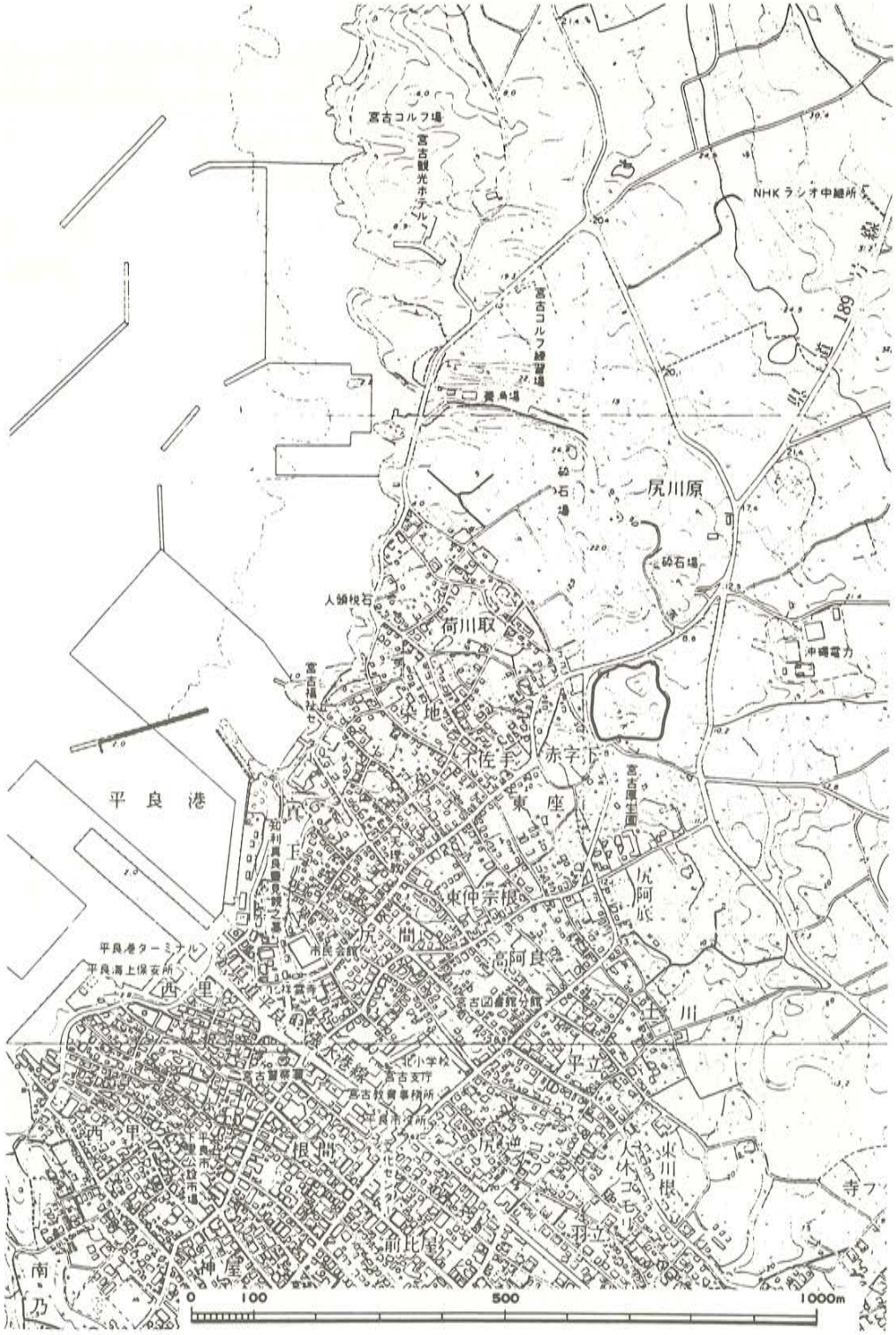
稲村賢敷氏によれば、上の頂遺跡に存在する゛上のツヅ゛御嶽の祭神「アガリナリカニ神」が倭冠遺跡に関与するものと指摘している。

参考文献

嵩元政秀・友寄英一郎『上の頂（ウイヌツズ）遺跡調査概報』琉大史学第４号。琉大史学会 1973年

平良市の文化財『昭和５８年度文化財要覧』平良市教育委員会 昭和59年３月３１日

図版１　上の頂（ウイヌツズ）遺跡　　（西側より）



第４図　上の頂遺跡位置図

②大浦多志（ウプラタテイ）遺跡

大浦部落の公民館より東側へ約400m後方に北西～南東に細長く延びる標高約46.8mを高所とする丘陵地に形成されている。丘陵地約150m付近にはイザー井があり丘陵南東端よりには上の御願（テラ）と呼ぶ拝所がある。以前に土器が採集されたということであるが、現在はアダンや雑木で中への立ち入り調査が困難である。

下地馨氏によって大浦多志城からの遺物の採集が行われたとされている。石積みの確認は出来てない。『擁正旧記』の大浦村の項に大浦多志豊見親による「當嶋も戦之折節にて右村戦負落去為」とあり、与那原軍団によって攻め滅ぼされたとされている。

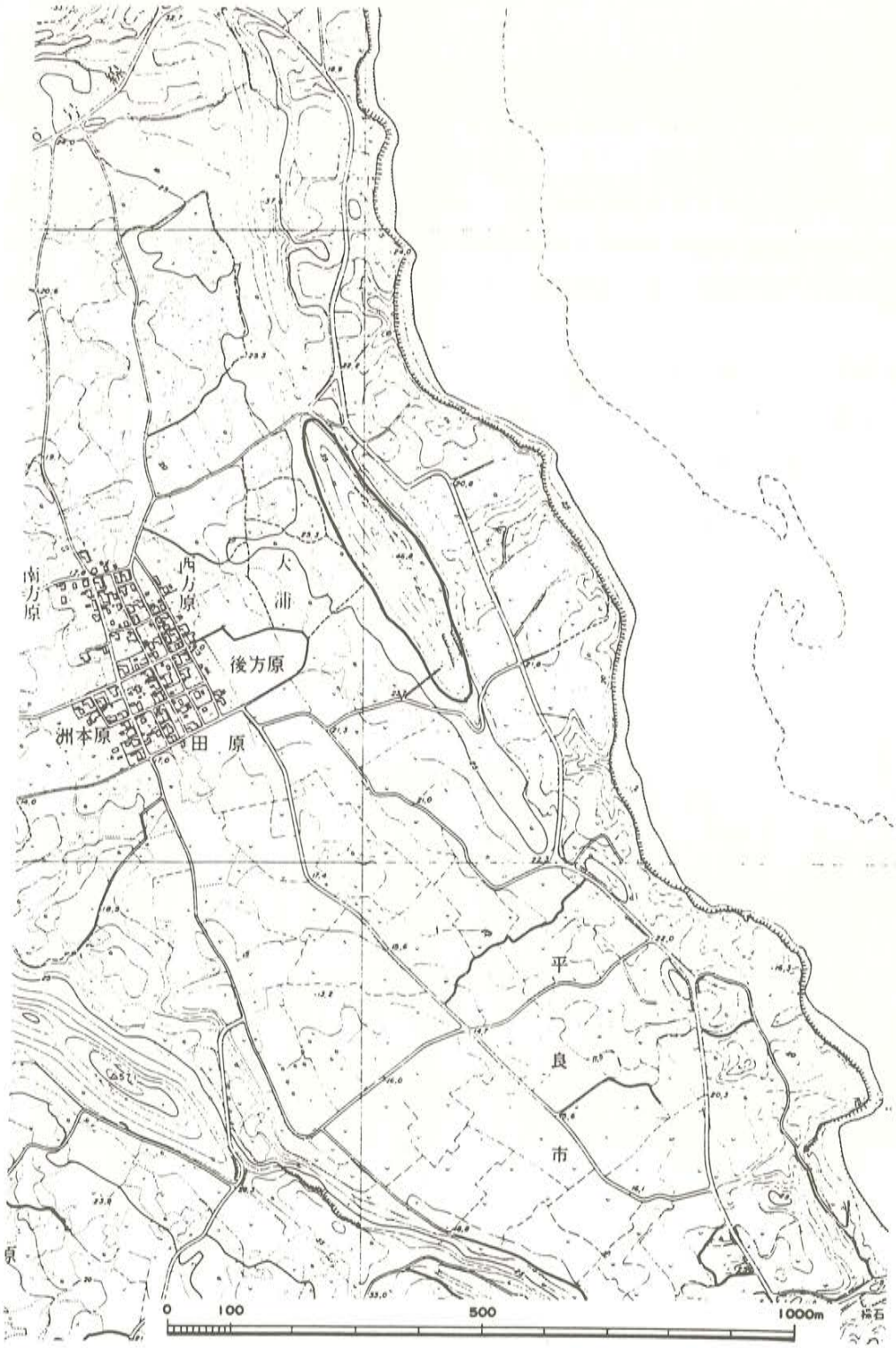
参考文献

『宮古の遺跡－詳細分布調査報告書－』沖縄県教育委員会　1983年３月

下地和宏「古代社会　与那原軍について」『文化財要覧』平良市教育委員会　1981年

（北西側より）

図版２　大浦多志（ウプラタテイ）遺跡



第5図　大浦多志（ウプラタティ）遺跡位置図

③オイオキ原遺跡

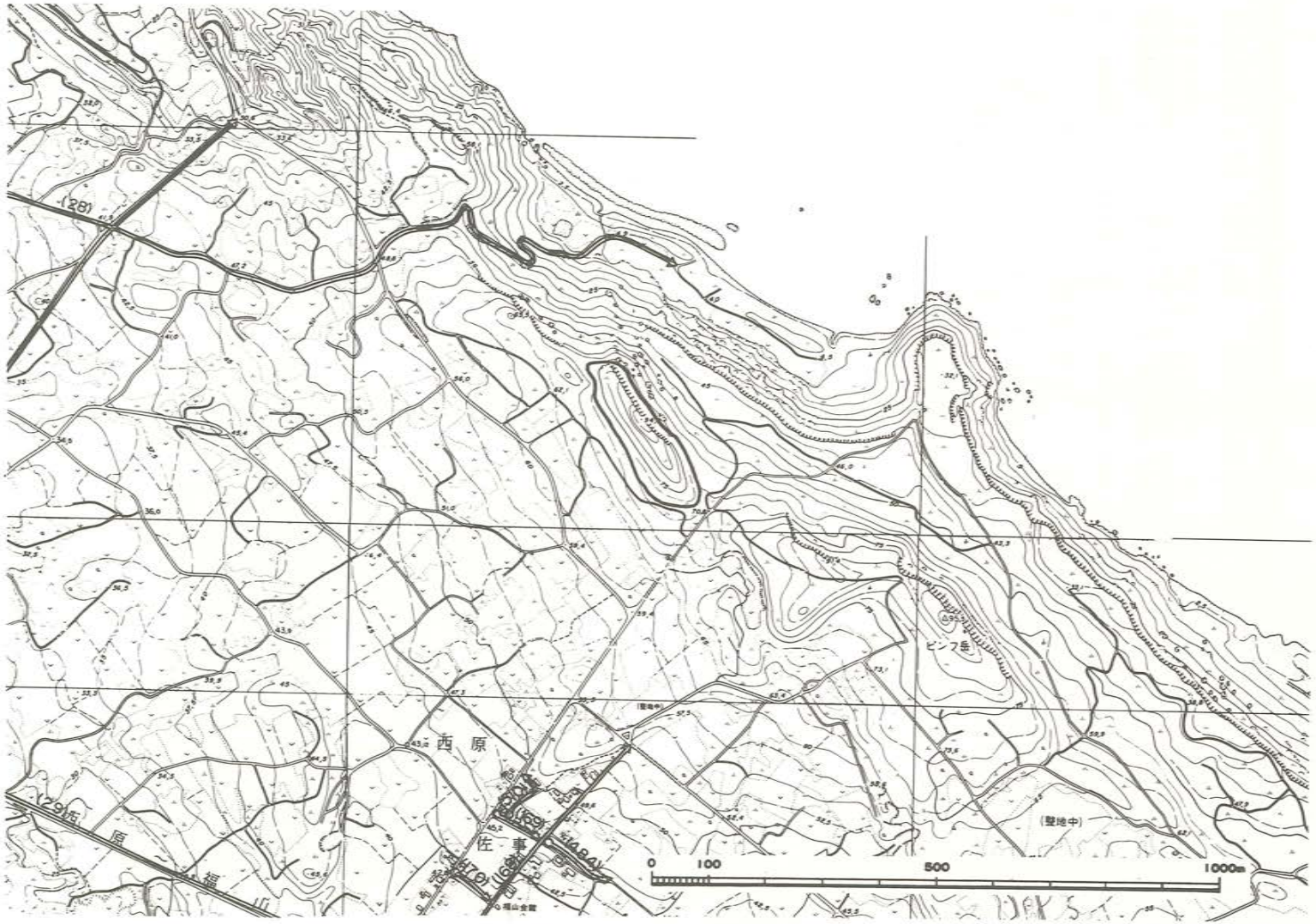
オイオキ原遺跡は平良市字福山の集落から北側に位置する。

北側に急峻な崖をなす琉球石灰岩丘陵上を中心として、上、下段に石積みをもった遺跡である。標高94ｍを最高所としフラットな面を形成している。東西にやや三角形状に長く延びた地形で周縁はいずれも傾斜面があり、一段高くなった状態にある。1987年の第一次調査の際に表面踏査で初めて確認された遺跡である。石積みは野面で丘陵上を東側一部から西側にかけて取り囲んでおり場所によっては３段ぐらいの囲みが残っているところもある。

城内外から土器や陶磁器が採集される。また、城内には円形状に石を積みあげた所がある。この地を島尻に古くから残っているウヤガン祭との関連があると口碑伝承で指摘する人もいるが石積みや遺跡の性格については判然としない。

（南側より）

図版３　オイオキ原遺跡



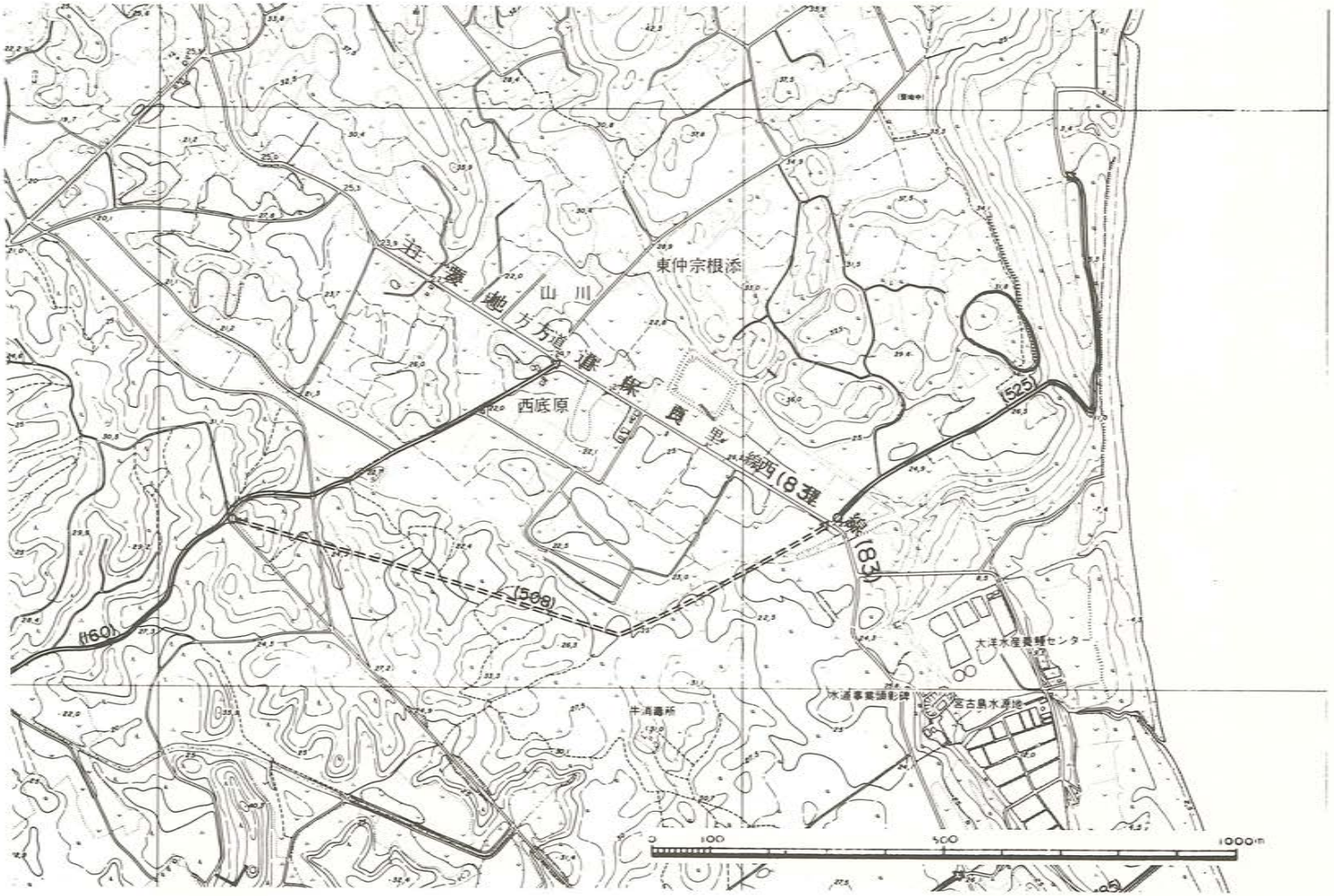
第6図　オイオキ原遺跡位置図

④石原城（イサラバリ）遺跡

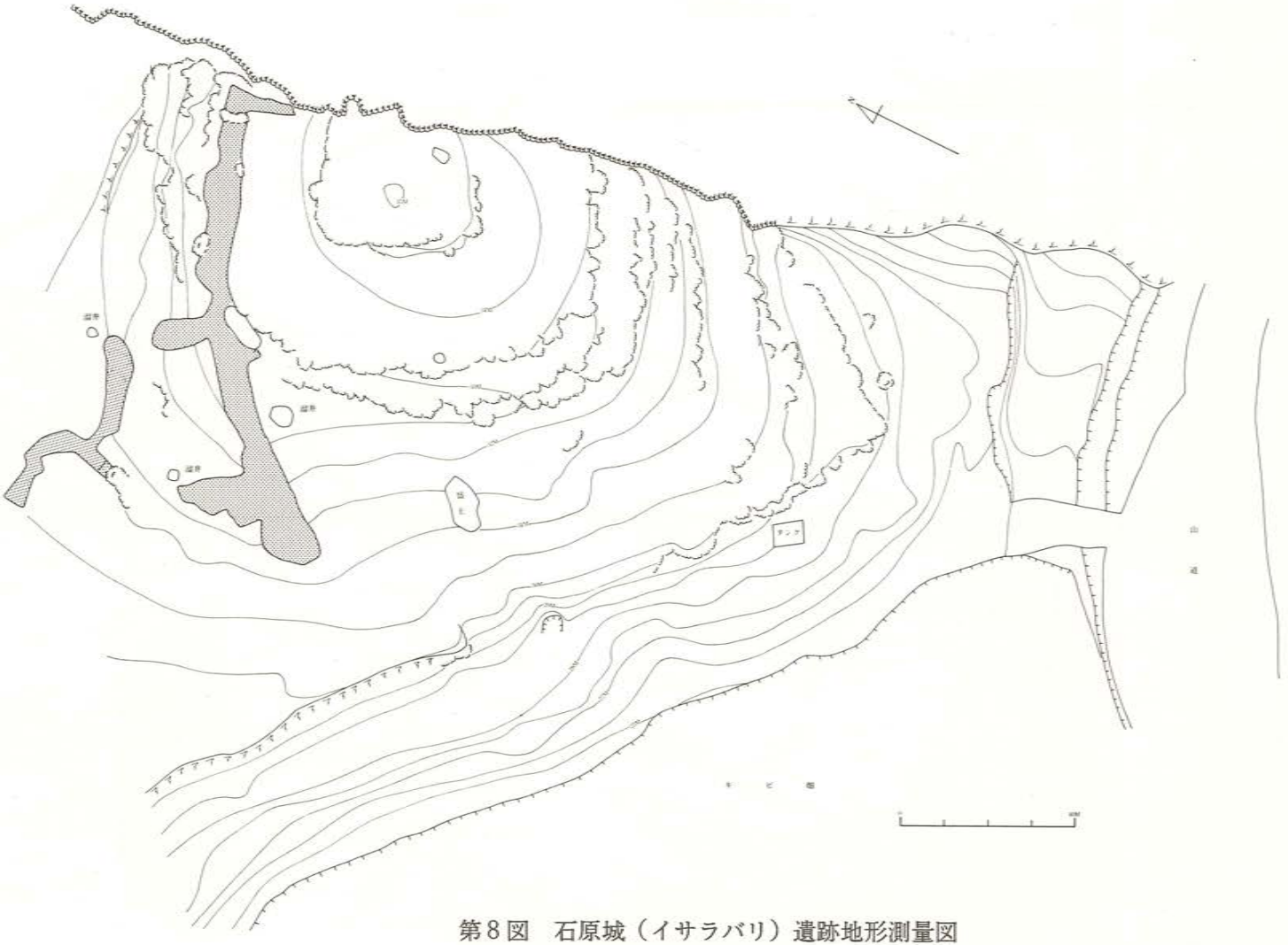
イサラバリ遺跡は平良市字東仲宗根に所在する。宮古アスファルト工場から東側に約250m離れた小丘上に位置する。琉球石灰岩が広がるところで、城内と思われるところが数段かのフラット面を形成している。最高所が35mで地形は東南方向になだらかな傾斜面をなし西側には一段低く段差がつく。北側は急崖をなし深いブッシュを作っている。石積みは野面で北側の角の部分から西側と南側の一部において残っている。北西側は急な崖状になっていることから石積みを必要としなっかたものか、東側にかけてはほとんど残ってなく段状に石灰岩が取りまく。石積みの高さは、現存しているもので高い所で約1m前後で低い所では50cm前後となっている。内部は暗褐色の土があり、土器片、磁器片、が散布している。1983年の宮古所在の遺跡確認調査の際にも白磁碗、石斧、シャコガイ製貝斧の未製品が採集されている。

（南側より）

図版4　石原城（イサラバリ）遺跡



第７図　石原城（イサラバリ）遺跡位置図



第8図　石原城（イサラバリ）遺跡地形測量図

⑤西銘城跡

西銘城跡は平良市字北増原集落の北方側に位置する。小高いマンジュウ状になった地形で標高63mの地点に西銘神社がある。北側がやや段状になっており傾斜面をなす。北側に積まれた石積みの一部が崩落している。内部もフラットな面が残っているが拝所となっている為詳細な立ち入り調査が出来ない。北側崖下にはサガイ井と呼ばれる湧き泉がある。土器片や陶磁器片が周辺の畑地から採集されるが、南西面において多く見られる。

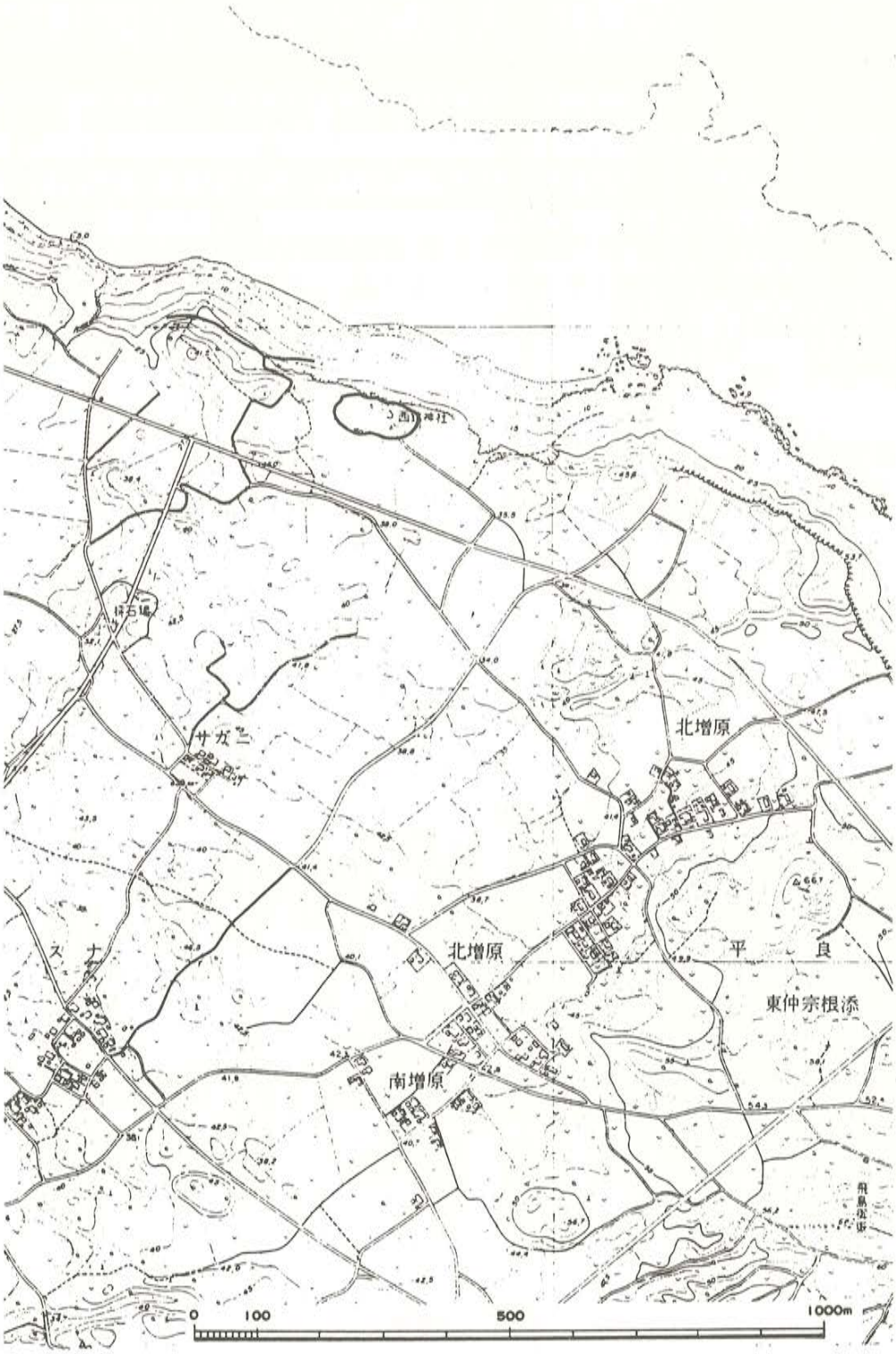
城主は西銘按司で後に飛鳥翁を養子にむかえて城を構えたとされている。宮古史伝の中でも第一の大剛勇として残っている。飛鳥翁は後に南増原の現飛鳥御嶽に移り飛鳥城を築いたとされている。

参考文献

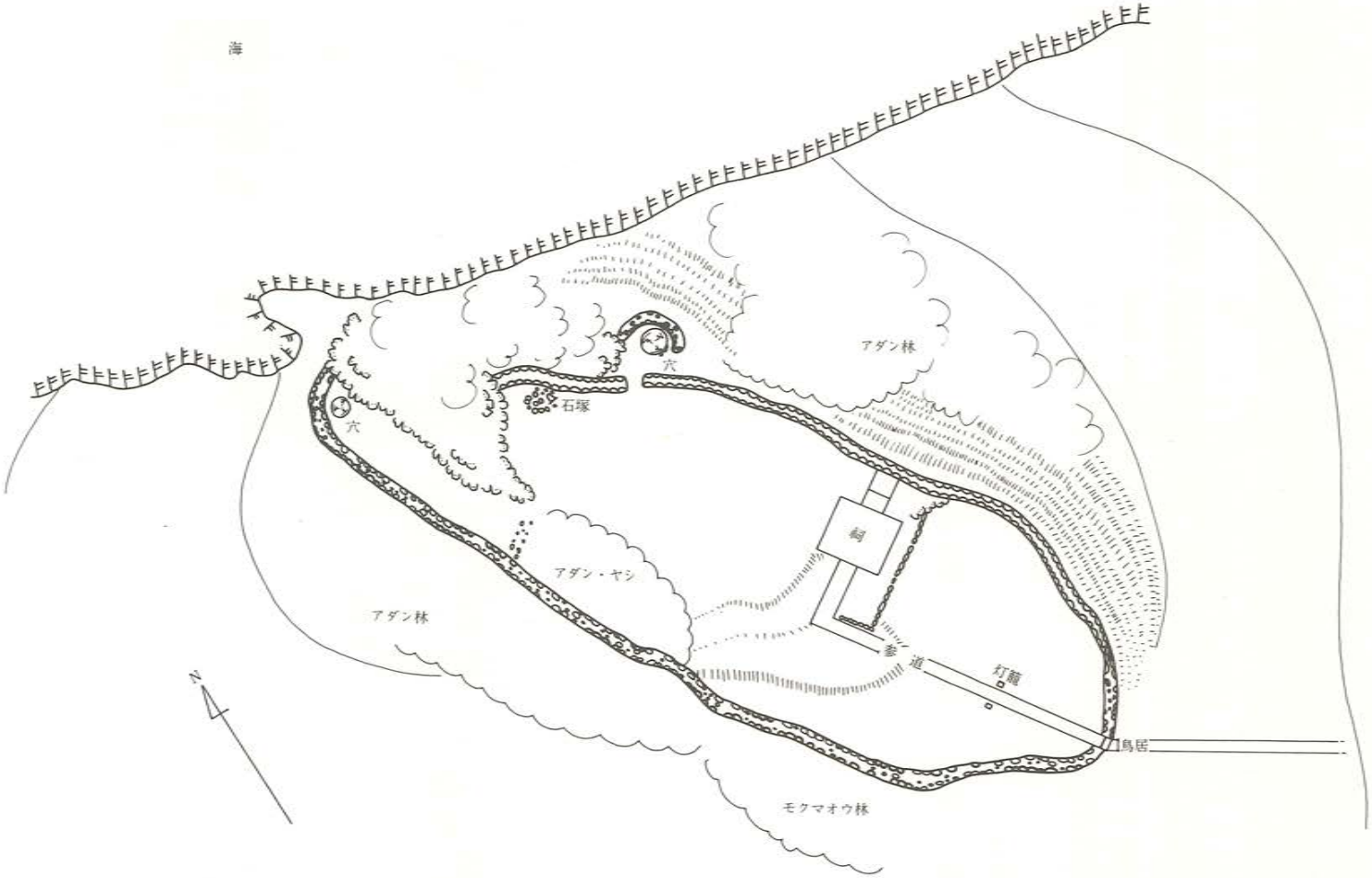
『宮古島庶民史』稲村賢敷　1972年8月31日刊　三一書房

（南東側より）

図版5　西銘城跡



第９図　西銘城跡位置図



第10図　西銘城跡見取図

⑥サガーニ遺跡

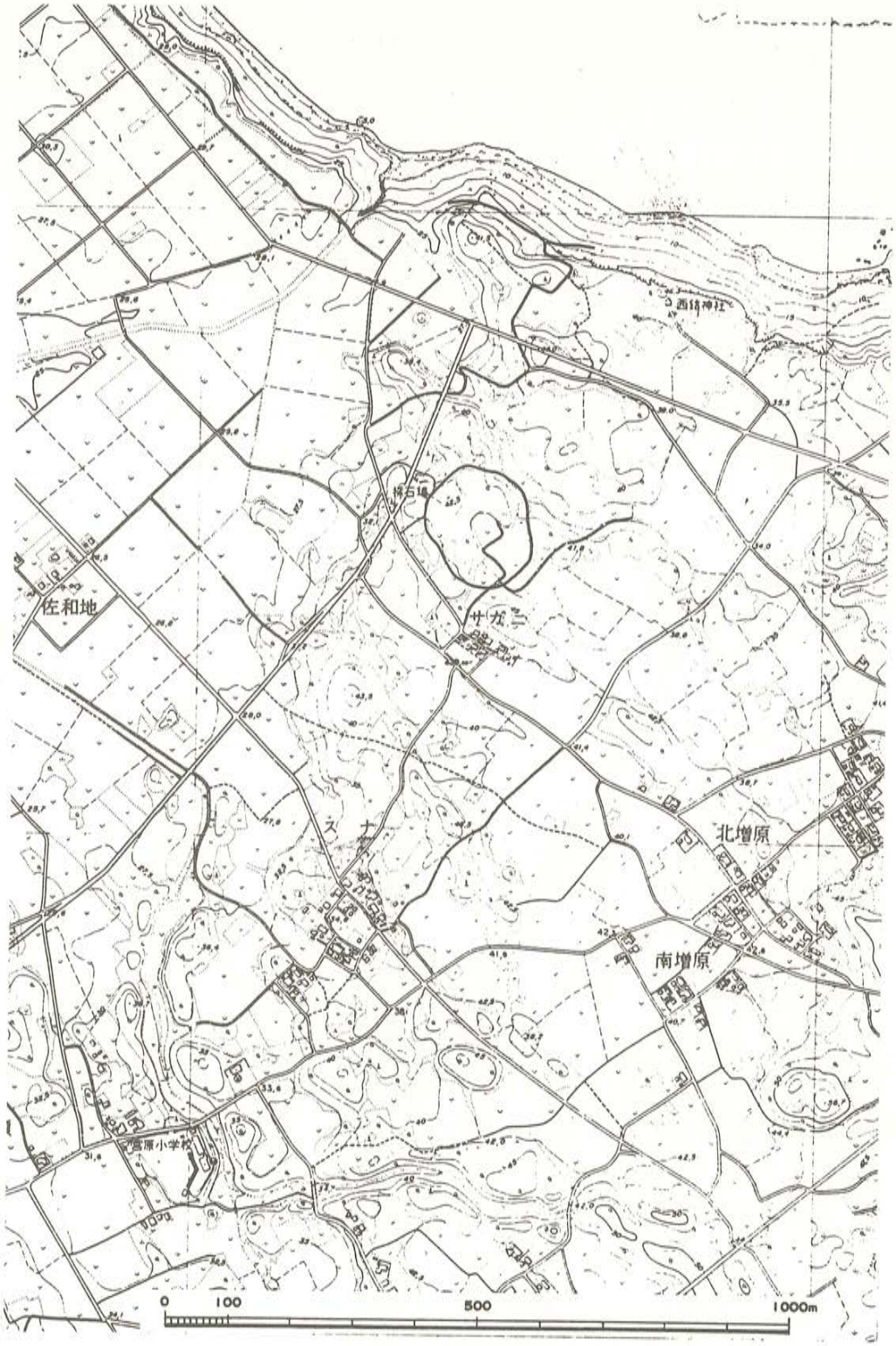
サガニ集落の北西方向に広がる小丘地を中心として周辺に畑地が広がる。北～北東側に1.80m～1.90mの高さの野面の石積みが残されている。東～南側にかけては100m前後の石積みが残されている。石積み内は部分的に畑地やアダン、ギンネム林が繁茂しているが茶褐色土壌の中に土器片が散布している。北側の高所42mには拝所がある。現在南西側から出入りが出来る。遺物の広がりは石積み内において最も散布しているのが確認出来る。周辺部からは石垣内にフラットな面があり一段高くなった地形をなす。

参考文献

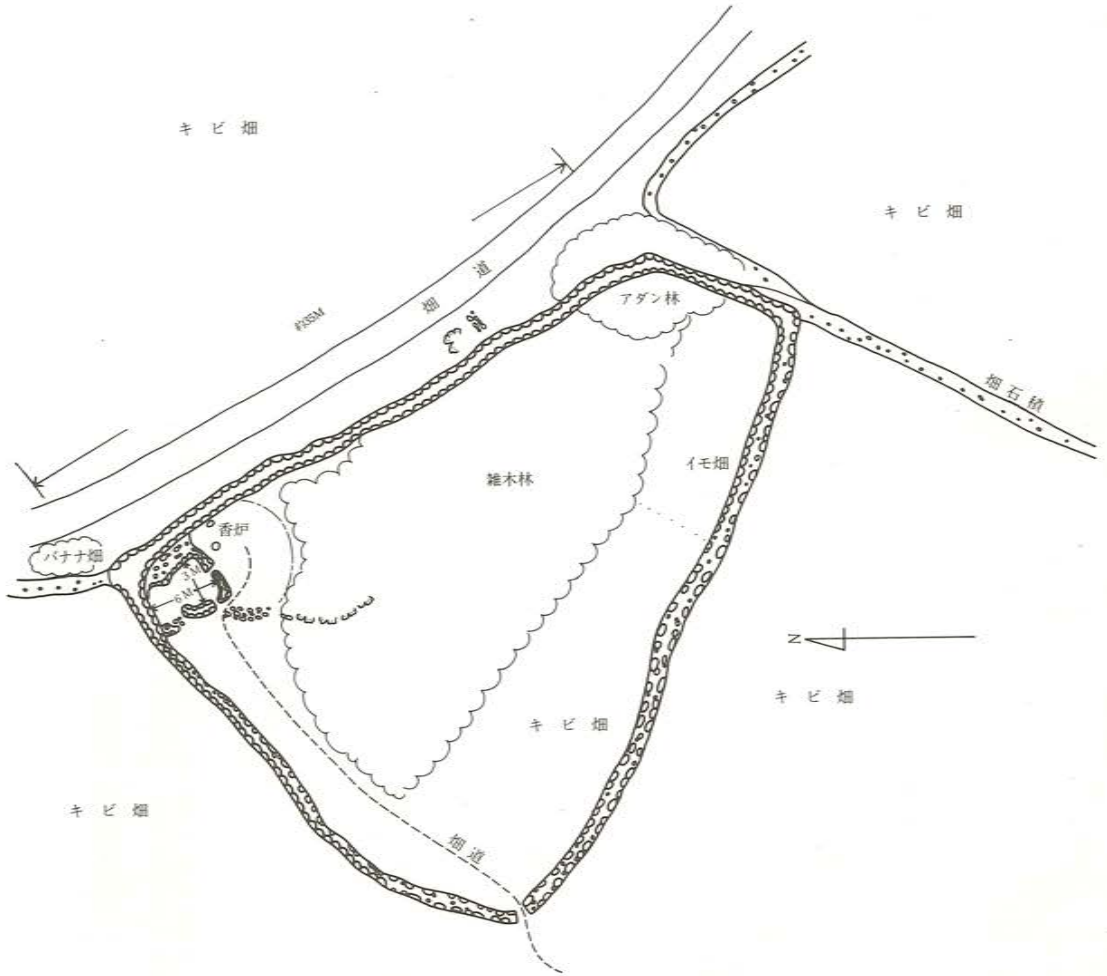
『宮古の遺跡－詳細分布調査報告書－』沖縄県教育委員会　　1983年３月

（南側より）

図版６　サガーニ遺跡



第11図　サガーニ遺跡位置図



第12図　サガーニ遺跡見取図

⑦飛鳥御嶽遺跡

山川集落より西側へ約600m程離れた地点に標高68.7mを最高所とする石灰岩丘陵の小丘がある。御嶽内には長い参道があり、拝所の中心部には野面の低い石積みが円形状に形成されている。別称、西銘城とも言われているが、御嶽内からの遺物の採集は出来ない。平良市の文化財の報告では、「御嶽の外側から1片の土器を採集した」とされている。
また、城の規模としては「東西70間ばかり、南北30間ばかり、周囲には高さ3尺程の石垣が残っている。南方一帯は渓谷をなし、北東方は緩やかな傾斜をなしている。未申方に向かって大手門を開き、良卯の方は搦手になっている。規模雄大な城趾である」と記述している。現況では周辺の畑耕作との関連で大きく変貌しており、当時の立地景観を残しているところは少ない。

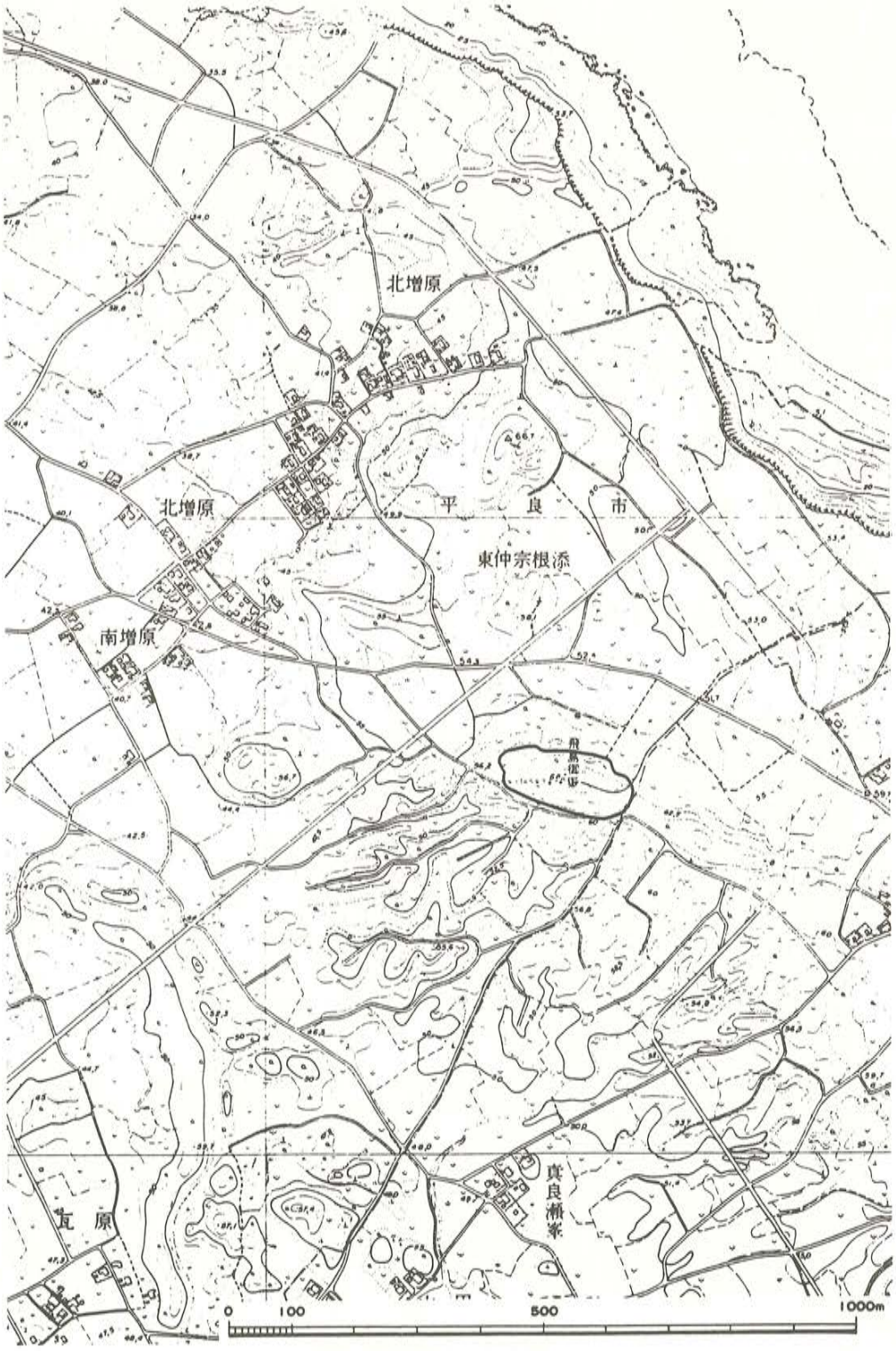
参考文献

『平良市の文化財』平良市教育員会　1980年3月31日

稲村賢敷『宮古島庶民史』1972年8月31日刊行　三一書房

（南側より）

図版7　飛鳥御嶽遺跡



第13図　飛鳥御嶽遺跡位置図

第14図　城辺町のグスク及び相当期遺跡の分布図

2．城辺町

城辺町は、宮古島の南東部に位置し略台形状をなす。町の北西は平良市に、西は上野村に隣接し、北東および南は太平洋に面している。

地勢は概ね平担で、町の南西部を東西に走る野原岳（107m）が上野村との境界をなし、町全域に低平な丘陵台地が稿状に北西から東南方向に数条連なり、海岸地帯ではやや小高くなった地形がみられる。

沿革をみると、仲宗根豊見親（ナカソネトウユミャ：15世紀末〜16世紀初頭にかけて宮古の支配者として君臨した人物）の宮古全域を平定後、その管轄下に置かれていたが、1609年砂川大首里大屋子が置かれ、平良・下地・砂川の3間切りに分かれて統治されていた。その後、部落の間切変遷を経て、明治41年に沖縄県特別町村制が施行され、それまでの間切から村に改められ，城辺村となった。1947年には人口増などに伴い町制を施行し、城辺町となる。

城辺の呼称については、浦底御嶽由来記に「城ヨリニ里北方海端ニ有」とあることから、この御嶽は福里にあって砂川から2里ほどにあたる。このことより、砂川を城と唱えていたと推され、平良、下地の4ケ村の例にならって友利、新里、砂川、宮国の4ケ村をさして城4ケ村、あるいは城の方、そしてその周辺に形成された集落を総称して城辺と呼んでいたようである。

町内の遺跡のほとんどは、小高い丘陵台地（標高40〜60m前後）の頂部か、その斜面部に立地している。それらは、内陸部では希薄で、海岸寄りに濃密であることが特徴と言える。このことは、石灰岩丘陵周辺では湧水が求めやすいことや、漁撈活動や海上交通、あるいはグスク時代以降にみられる集落間の利害抗争において、外敵からの防備ということなども、このような石灰岩丘陵への立地要因としてあげられよう。これらの遺跡は、規模も比較的広大であり、出土および採集遺物からして、時期的には14〜16世紀を主体とするようである。多くの輸入陶磁器や、在地土器（大別して、3タイプに分類される）、鉄製品、家畜獣骨等が得られる。また、拝所や井戸をも伴っていることもある。

＜参考文献＞

城辺町役場、1985：『城辺町史－第1巻　資料編－』。城辺町史編纂委員会。城辺町役場総務課。沖縄県城辺町。

城間勇雄・他、1975：今帰仁村今泊・第4次宮古島調査報告。郷土。第12号。沖縄大学学生文化協会。沖縄大学。那覇。

安里嗣淳・上原静・下地達男、1980：城辺町保良地区の遺跡分布。城辺町文化財調査報告書第1集。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。

表2　城辺町のグスク及びグスク時代相当期の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	採集および出土遺物	時　期	備　　考
1	牧の頂遺跡	野城式土器、青磁、褐釉陶器。		
2	山川遺物散布地	土器、類須恵器、陶器。		散布地
3	ムトウ御嶽遺物散布地	土器。		散布地
4	クマザ上方台地遺跡	土器、類須恵器、褐釉陶器。		
5	高腰城跡	野城式土器、青磁、白磁、青白磁、類須恵器、鉄製品、古銭	13～14世紀	・城辺町教員委員会によって3次にわたって範囲確認調査（盛本編1988, 89） ・城主・高腰按司の居城
6	野城遺跡	野城式土器、青磁、白磁、青白磁、褐釉陶器、類須恵器。	13～14世紀	・城辺町教育委員会によって2次にわたって範囲確認調査（盛本編1987） ・野城按司・崎山村の坊の居城
7	牧中御嶽遺跡	野城式土器、青磁、白磁、褐釉陶器、類須恵器、骨斧。	13～14世紀	
8	大牧遺跡	野城式土器、青磁、白磁、褐釉陶器、類須恵器。	13～14世紀	
9	保良元島遺跡	土器、輸入陶磁器。	14～15世紀	・1965年にメリヒャール、金子エリカ氏によって発掘調査（Kaneko・Melichar1972）
10	箕島遺跡	土器、輸入陶磁器。		
11	箕の済村跡			
12	友利遺跡	土器、輸入陶磁器。		
13	友利元島遺跡	土器、輸入陶磁器。		
14	上比屋山遺跡	土器、輸入陶磁器。	14～15世紀	・稲村賢敷氏によって試掘調査 ・倭寇の根拠他 ・海外貿易で栄えた町 ・中継貿易的な自由貿易地域の諸説あり
15	砂川元島遺跡	土器、輸入陶磁器、類須恵器、瓦、沖縄産陶器、石製キセルの雁首、鉄鍋、刀子様製品、玉類、貝製漁網錘・他。	13～18世紀	・沖縄大学学生文化協会によって4ヶ所の地点にて試掘調査（城間他1973）。 ・青山学院大学が二次にわたって発掘調査（三上他1975、76）。調査によって屋敷の整地作業跡や製鉄遺構を検出。 ・個人畑地の土地改良に伴う緊急調査によって城辺町教育委員会が発掘調査（島袋他1989）

＜参考文献＞
金子エリカ、 1985: 保良遺跡発掘二〇年後。沖縄文化。第21巻2号。64。沖縄文化協会。東京。
城間勇雄・他、 1973: 砂川村落の構造と変遷・補遺。郷土。第12号。今帰仁村今泊、第4次宮古島調査報告。P69～86。沖縄大学学生分化協会。那覇。
三上次男・他、1975: 沖縄・宮古島砂川元島遺跡発掘概報。青山学院大学。東京。
宮古郷土史研究会、1989: 『宮古の史跡をたずねて』。平良。
Erika kaneko and Herbert Melichar, 1972
Pura Mutuzuma Archacological Work on Miyako Island, Ryukyus
aisian and Pacific archaeolgy series No. 4
Sosial scienes research institute university of hawaii

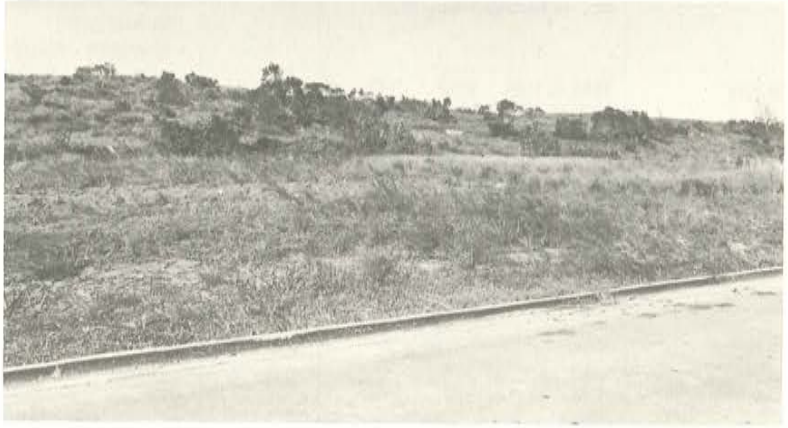
⑧牧の頂（マキノツヅ）遺跡

牧の頂遺跡は、城辺町南根間地集落の西方約150mに所在する北西から南東方向へ延びた標高88.8m前後の独立丘陵（通称：ザラツキ嶺）上に形成されている。

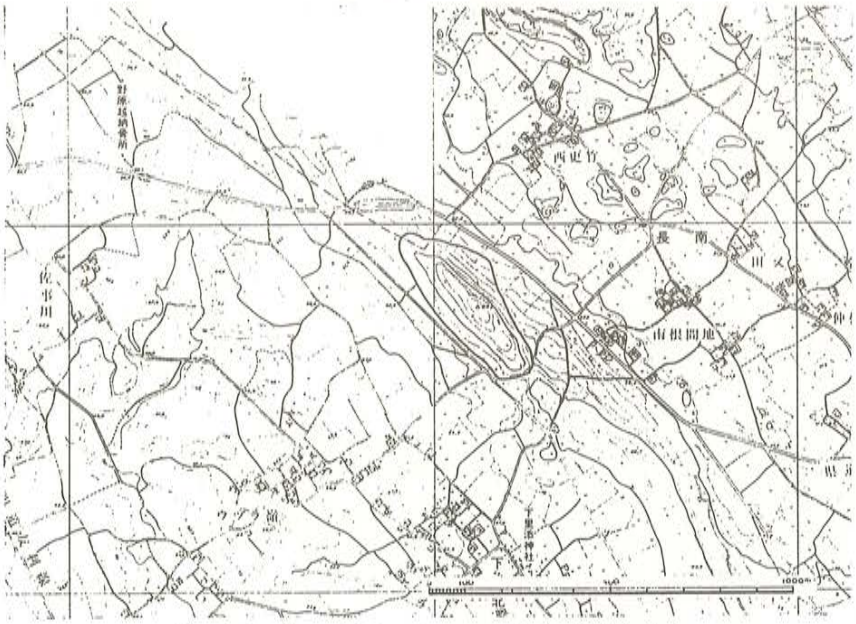
本遺跡は、宮古島では数少ない内陸部に立地する遺跡の一つである。

遺跡の立地する丘陵は、植林などの造成によって、著しく景観を損ねており往時の状態をとどめていない。

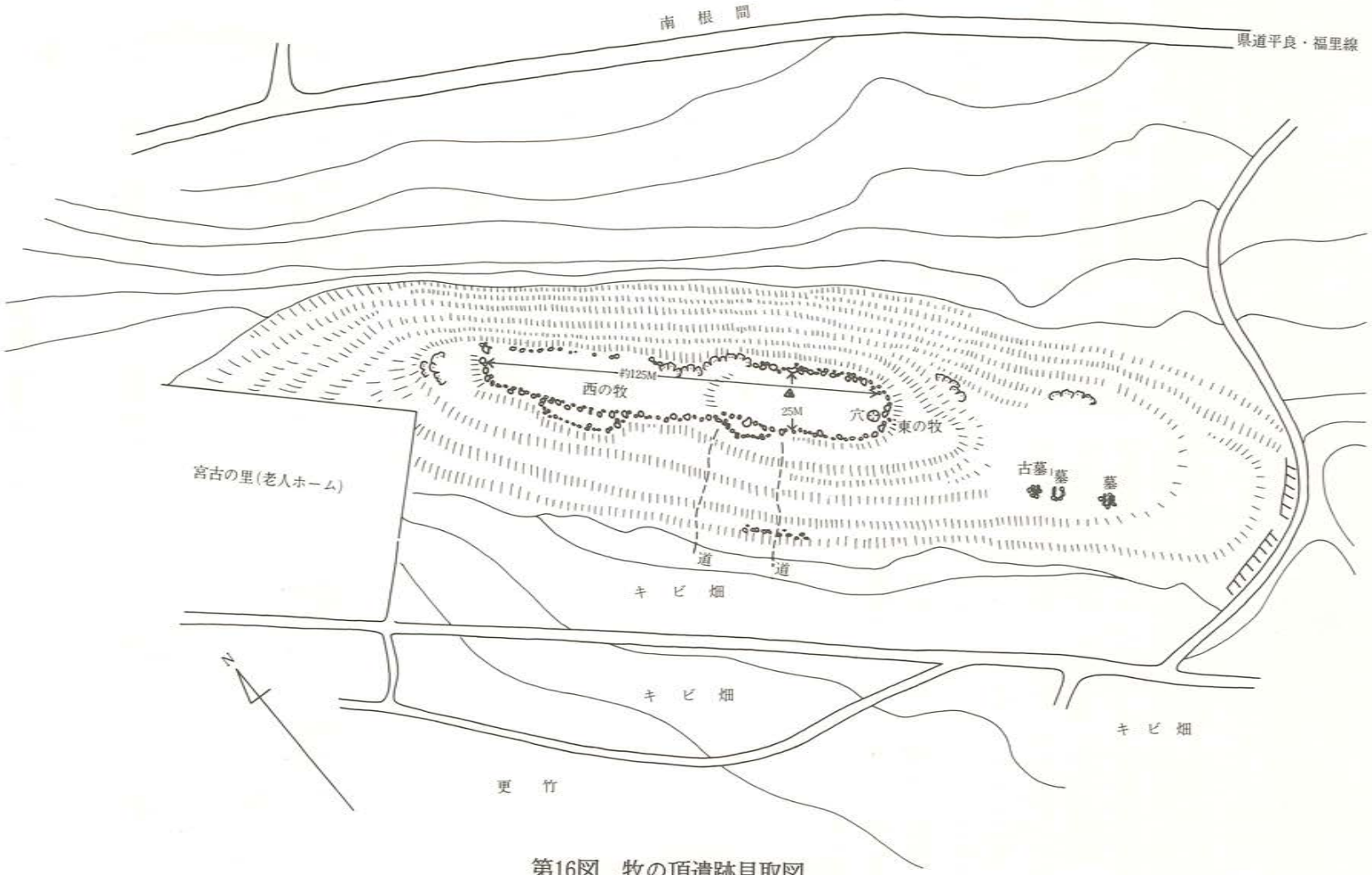
丘陵上および斜面地一帯からは、口縁部直下に外耳を付し、平底の鉢若しくは鍋形器形の所謂「野城式土器」や陶磁器、類須恵器などが採集される。



図版８　遺跡近景



第15図　牧の頂（マキノツヅ）遺跡位置図



第16図　牧の頂遺跡見取図

⑨高腰（タカコシ・タカウス）城跡

高腰城跡は、城辺町比嘉部落北方の丘陵上（標高108～113m）に形成されている。

本城跡は、高い山の少ない宮古島の中でも最高所にあり、城跡の上に立つと北に大神島、西に伊良部島、南に野原岳丘陵が眺望できる要所の位置にある。また、城跡の北東部には城主・高腰按司が使用したと伝承される按司ノ泉（アズヌガー）（湧泉）が在り、南方約2.2 kmには城主・高腰按司を祀ったと伝えられる高腰神社（御嶽：城跡への遙拝所）がある。

城跡の立地する丘陵は、南東から北北西にかけて舌状に延びており、南東部では馬背状をなして緩やかになっているものの、北側から南西部にかけては急崖をなしている。この丘陵の西側部に城跡としての石積みを有している。石積みは概ね隅丸長方形状をなし、その中に3～4の郭（間仕切り）があり、南側部には城門を持っている（第46図参照）。

遺跡の正確な範囲とその性格を把握する目的で、1985～1987年度の三次にわたって、城辺町教育委員会によって発掘調査が実施された（盛本編1988, 1989）。その詳細については、第5章で述べる。

第17図　高腰城跡位置図

伝承によると（稲村1977）、本城跡の城主であった高腰按司は強力無双・武勇絶倫の人で、周辺の部落を広域に統括するほどの強力な勢力をもつ武将であったこともあって、近隣の豪族達から恐れられていたという。また、部落民の生活安定のために産業奨励を実施するとともに、水田の開発に大きく力を注いだと伝えられる。ところが、平良の川根一帯に根拠地をもっていたと伝えられる与那覇原軍の首領・佐多大人の島内統一事業の中で滅ぼされてしまう。

そのいきさつには、次のような話がある。佐多大人は、高腰按司と同盟を結んでいた中喜屋泊村の内立の按司に目をつけた。内立の按司という人は、高腰按司と盟友にありながらも高腰按司のことを鬼神のように恐れ、いつかは自分も攻め入られるかも？と擬心の念を抱いていたとともに、欲深き人でもあった。このような内立按司の心中を見抜いていた佐多大人は、高腰按司を討ち滅ぼした暁には、高腰間切の田畠の半分を与える約束をして、策略を練った。その策略とは、高腰按司を招待して一昼一夜の宴を催し、その間に高腰城を攻め落としていく計画である。

策略は、ものの見事に成功し、ついに高腰按司は自害したということである。

＜参考文献＞

稲村賢敷、1977：第一篇　宮古島旧記　二三　高腰の按司、与那覇原軍に亡ぼされし事。『宮古島旧記並史歌集解』。P44～46。至言社。東京。

盛本勲・編, 1988：高腰城跡範囲確認調査概報。城辺町文化財調査報告書第３集。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。

――――、1989：高腰城跡－範囲確認調査報告書－。城辺町文化財調査報告書第５集。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。

図版９　遺跡近景

⑩野城（ヌグスク）遺跡

野城遺跡は、城辺町福北集落の北方海岸に沿って東西に延びる標高65m前後の丘陵上に形成されている。遺跡の立地する丘陵は、北側は急崖となって海岸に接し、西側では舌状をなすものの、東に行くに従ってその傾斜は緩やかになっていき、やがては平担地となる。丘陵の南裾部には狭小ではあるが、湿地帯が存在する。また、丘陵の南西部は道路を隔てて低平な石灰岩台地をなし、台地北東端部には湧泉（野城泉（ヌグスクガー））がある。

遺跡の性格と所謂「野城式土器」の帰属時期を明確にする目的で、1984年と翌85年度の二次にわたって城辺町教育委員会によって発掘調査が実施された（盛本編1987）。

調査地点は、丘陵頂部の平担地部分が保安林のモクマオウ等が植栽・繁茂し不可能であったため、二度とも丘陵西寄りの南斜面部を選定せざるを得なかった。

1984年の第一次調査では、斜面地の南北に4×14m（56m²）、翌85年の第二次調査では、東西に4×16（64m²）の面積を発掘した。

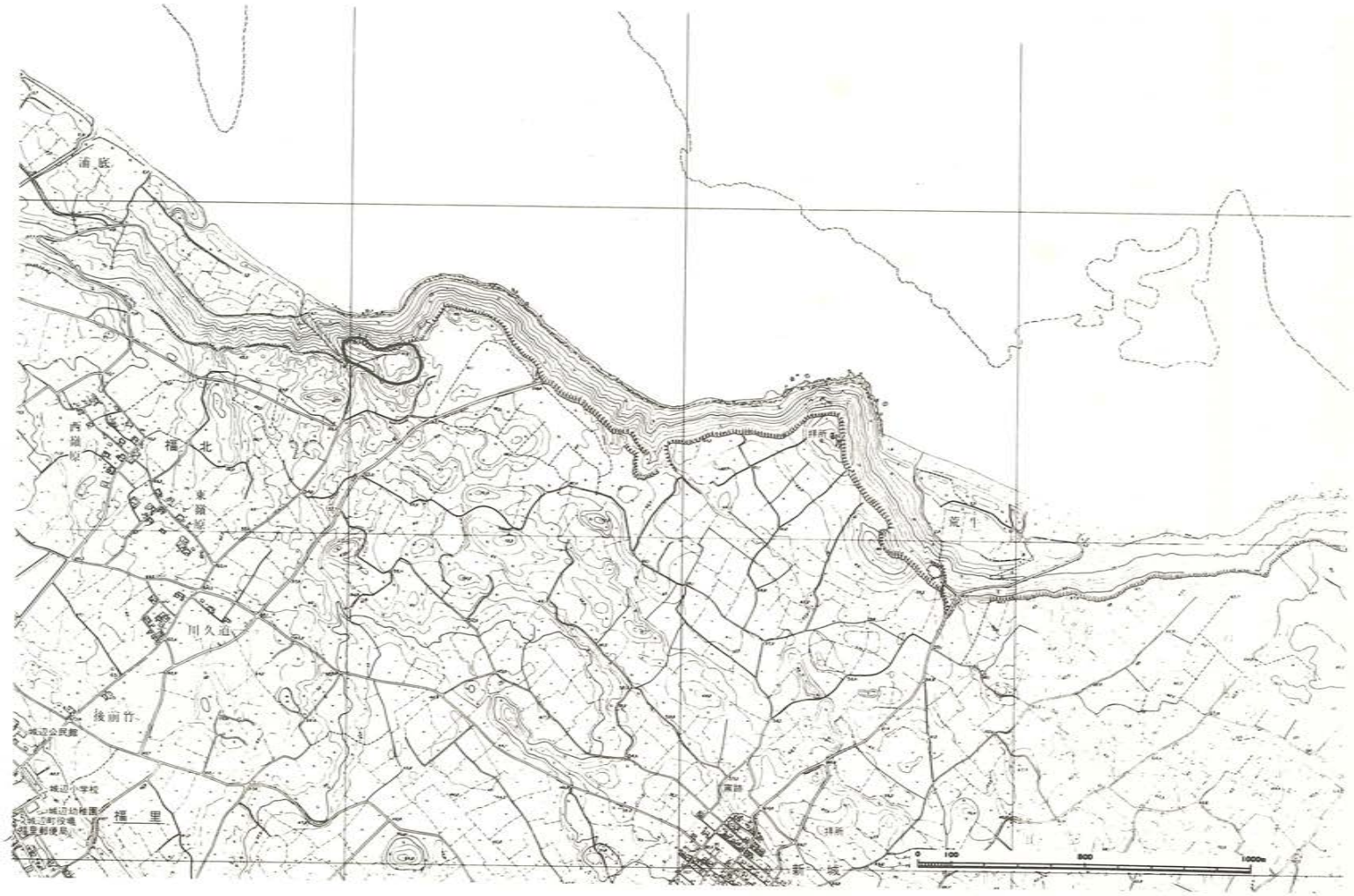
調査の結果、二地点とも層序は三つに区分された。Ⅰ層は表土腐食土層で、Ⅱ層が遺物包含層となりⅢ層は地山（マージ土）となる。発掘面積が小範囲であったことや、調査地点が斜面地部分であったこともあってか、遺構等の検出はできなかった。

出土遺物は、人工遺物と動物遺体に大別される。人工遺物では土器が最も多く主体を占めるものの、少量ながら類須恵器、青磁、白磁、青白磁、褐釉陶器、石器等も検出されている。

土器にはいくつかのタイプが含まれるものの、圧倒的主体を占めるのは直口口縁下に外耳を付し、底部は平底で下膨れをなす鉢若しくは鍋形器形である。このタイプは所謂「野城式土器」と称されている（下地1978）。青磁には碗、皿、盤の三器種がある。碗では鎬蓮弁文碗、内器面に櫛描文や劃花文（所謂珠光青磁）、弦文等を配するものがある。皿は見込み部にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文を配する所謂同安窯系の劃花櫛描文と口折れ皿がある。盤は、その全てが鰐縁盤に属するものである。白磁には碗、皿の二器種が含まれるものの、量的には僅少である。碗では、内灣器形をなす所謂ビロースクタイプが主である。青白磁は一点のみの出土である。平型合子の蓋で、頂部に型押しの文様を施しているが、その構図等については判然としない。褐釉陶器は玉縁口縁をなす壺形のみである。類須恵器は壺形の口縁部および頸部〜肩部片等がある。肩部片には波状沈線文を配しているものがある。石器は、調理・加工具としての磨石や叩石、石皿がある。

これらの人工遺物のほかに、食料残滓として家畜獣のウシやハリセンボン、ブダイ等の魚類、マガキガイやチョウセンサザエを主体とする貝類が出土している。

以上、遺跡の立地環境や主要遺物について簡述してきたが、それらからして本遺跡は沖縄諸島にみられるグスクや八重山諸島のスクのような性格を有している。が、しかし丘陵頂部の平担地を取り囲む石垣等のような構築物はみられない。



第18図　野城遺跡位置図

その年代的な位置づけは、少量ながらの劃花櫛描文や鎬蓮弁文碗等の輸入陶磁器や共伴遺物等からして13〜14世紀頃である。そして、この時期は琉球列島のグスクのなかでも比較的古い段階に位置づけられる。

本遺跡に伝承される話に、城主・野城按司と美女・マムヤの悲恋説話がある。参考までに記しておきたい。なお、この話の骨子は前城辺町教育長小川勲氏から伺ったところが大きい。記して謝意を述べる。

崎山村の生まれで、野城の按司・崎山の坊と言われる人は妻子ある身でありながら、保良の平安村に生を受けた美女・マムヤに恋の情熱を燃やし、政を怠りマムヤとの恋中に酔いしれていた。そのうち、野城按司に妻子があることを知ったマムヤは、このような不浄な恋をいつまでも続けていたら自分自身がダメになると察知し、按司の目から逃れるために東平安名崎の北方断崖の中腹にある洞窟に隠れこもり、機を織って気をまぎらわしたという。しかし、野城按司はマムヤを忘れることができず、探し求めて東平安名崎の北側の浜辺までやってきた。浜辺に降りてさまよい歩いているうちに、機を織るオサの音が上方に聞こえ、断崖を上がってみれば下方に聞こえた。このようなことを繰り返しているうちに、断崖中腹の洞窟に隠れていることが判り探し当て無理やり連れだす。しかし、マムヤは宮古民謡の「マムヤのアヤグ」に謡われているように＜今のことを思えば美女が良い、後のことを思えば子の母が良い＞という按司の打算的な愛情に嘆き、平安名崎北崖から身をおどらせて自殺を遂げたということである。

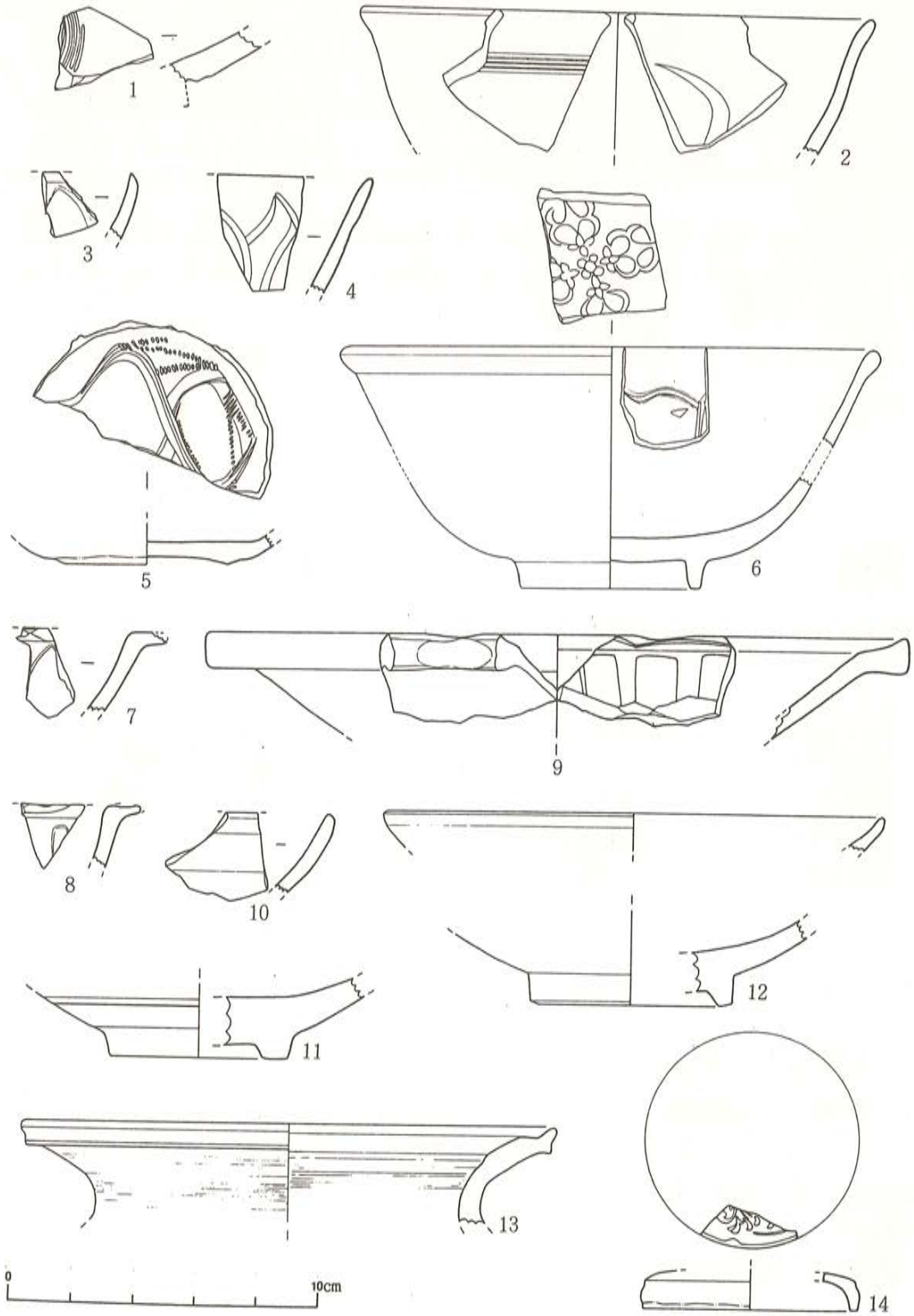
その後、幾年か過ぎて、平安名村の人たちによってマムヤの遺骨は拾われ、隠れこもった洞窟の東の岩下に埋めて、永くその霊を祭ることにしたという。

＜参考文献＞

下地和宏、1978：野城（ぬぐすく）式土器について。琉大史学。第10号。P34〜49。琉大史学会。那覇。

盛本勲・編、1987：大牧遺跡・野城遺跡－範囲確認調査報告書－。城辺町文化財調査報告書第2集。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。

図版10　遺跡近景　（南より）



第19図　野城遺跡出土遺物（青磁１～９・白磁10～12・類須恵器13・青白磁14）

⑪箕島（ムイズマ）遺跡

箕島遺跡は、城辺町仲原部落南東に所在する南北に延びた舌状の丘陵上（標高63m前後）に形成されている。遺跡の立地する丘陵は南西側において緩傾斜をなすものの、東北側では断崖をなす。

今回の調査で、丘陵の延びに沿って頂部に約17箇所の石積みによる郭が在することが判明し、ほぼ全域を伐開し測量実測調査と一部の試掘調査を実施した。その詳細については、第５章で述べているためここでは割愛する。

丘陵頂部の石積みによる郭の周辺と南西斜面の畑地において、土器や陶磁器などの遺物の散布がみられる。

（東より）

図版11　遺跡遠景

⑫上比屋山（ウイピヤーヤマ）遺跡

上比屋山遺跡は、城辺町砂川部落南西方向の南北に延びる上比屋山と称される琉球石灰岩丘陵上（標高60m前後）、および丘陵斜面に形成された遺跡である。1956年に、県指定史跡となっている。

遺跡の規模は広大でかなりの範囲におよび、一部道路工事で破壊されているものの、丘陵のほぼ全域が聖地となっていることもあって保存状態は良好のようである。丘陵上、その斜面地と山のほぼ全域で土器や輸入陶磁器が採集されるとともに、集落に関与するとみ

られる石垣の一部も確認される。丘陵裾部には、砂川元島遺跡が隣接して形成されている。

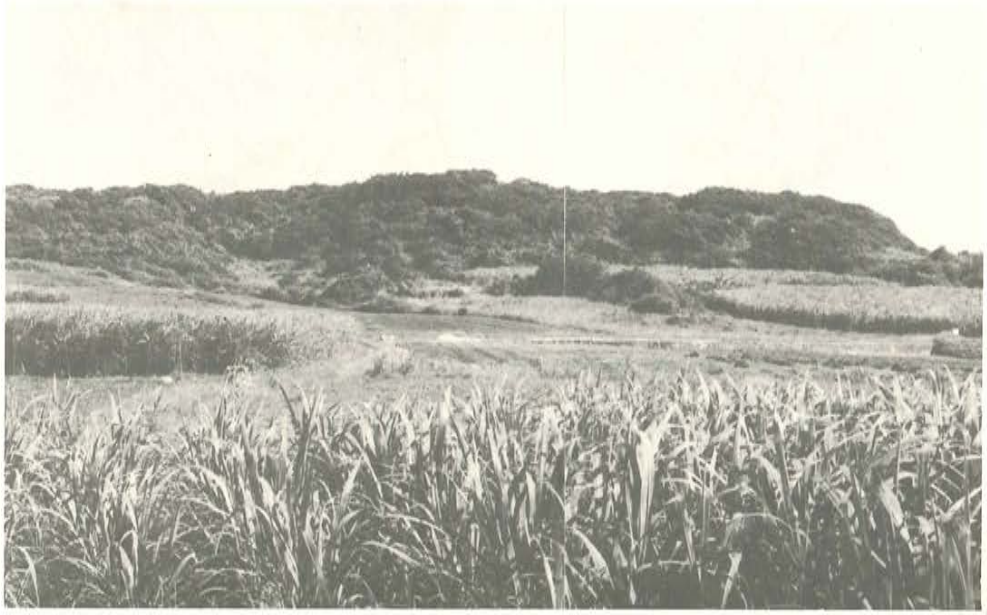
また、遺跡内（上比屋山）には9カ所に拝所（マイウイピャー、クシウイピャー、ウイウス、マイキサマ、クシキサマ、マイヌヤー、クスヌタブンミャー、ウイダテイ,パナタ）があり、砂川部落の尊崇の対象となっている。とりわけ、マイウイピャー、クシウイピャー、ウイウスは神事の籠もりの儀礼に使用されるマイヌヤー御嶽の三棟の建物（構造は丸太棒を柱にして屋根を葺き、壁は琉球石灰岩の石積みで、屋内には炉を設けている）は、祭場内の石垣などとともに良く保存されており、宮古の村落祭祀を理解するうえで、極めて貴重だということで、1956年に有形民俗文化財として県の指定を受けている。

また、遺跡南方部にはトーンカイ岩（トウンカイフッイス）と称されている、上面観が方形状をなした切り石積みの遺構があり、遠見台跡とも推されている（第23図・図版13参照)。 1954年に稲村賢敷氏によって、遺跡の一部において試掘調査がなされている（稲村1957)。それによると、土器をはじめ青磁、白磁、褐釉陶器、染付などの輸入陶磁器等の出土報告がある。

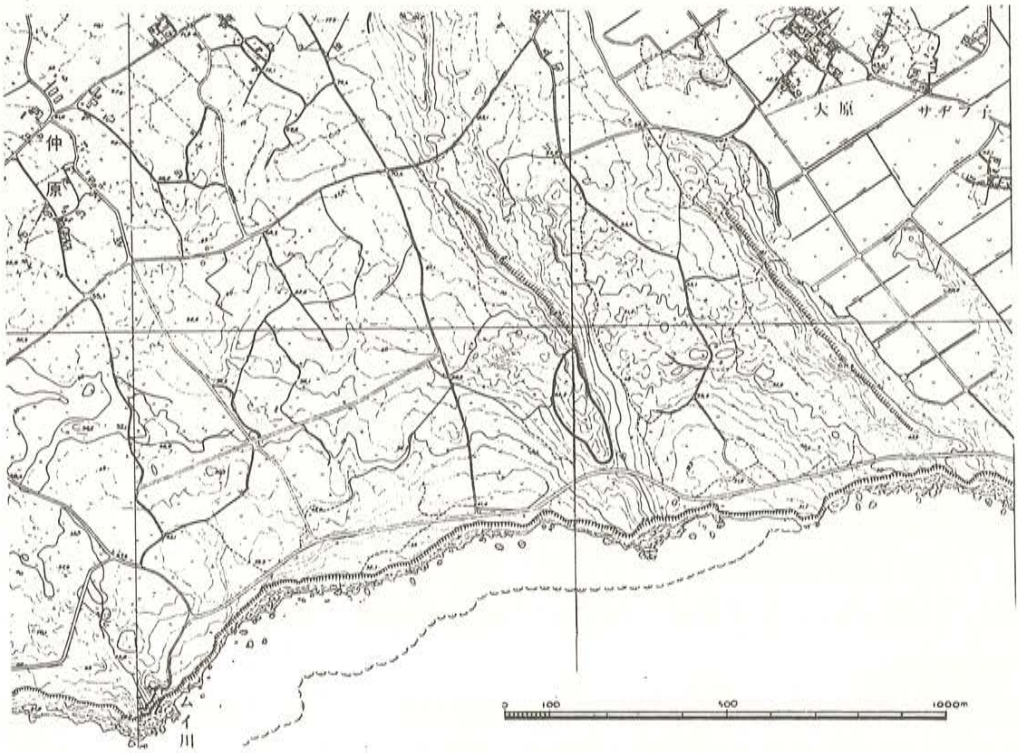
なお、本遺跡をめぐって、①倭寇の根拠地（稲村賢敷氏)、②海外貿易で栄えた町③中継貿易的な自由貿易地域（下地馨氏）などの諸説があって、論争が起こったことがある。

＜参考文献＞

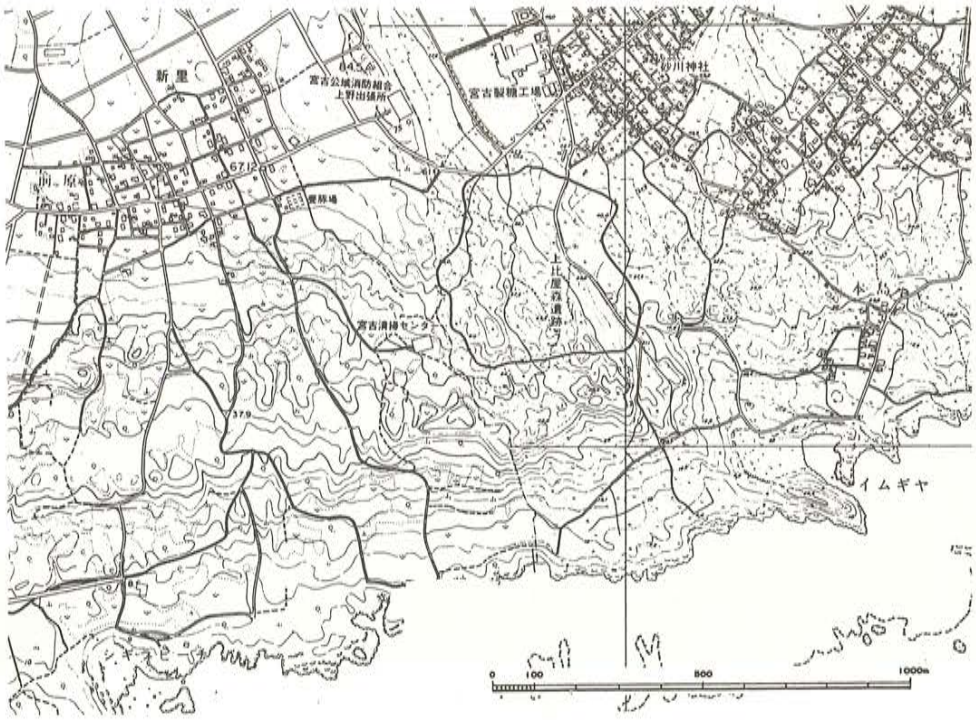
稲村賢敷、1957：「琉球諸島における倭寇史跡の研究」。吉川弘文館。東京。



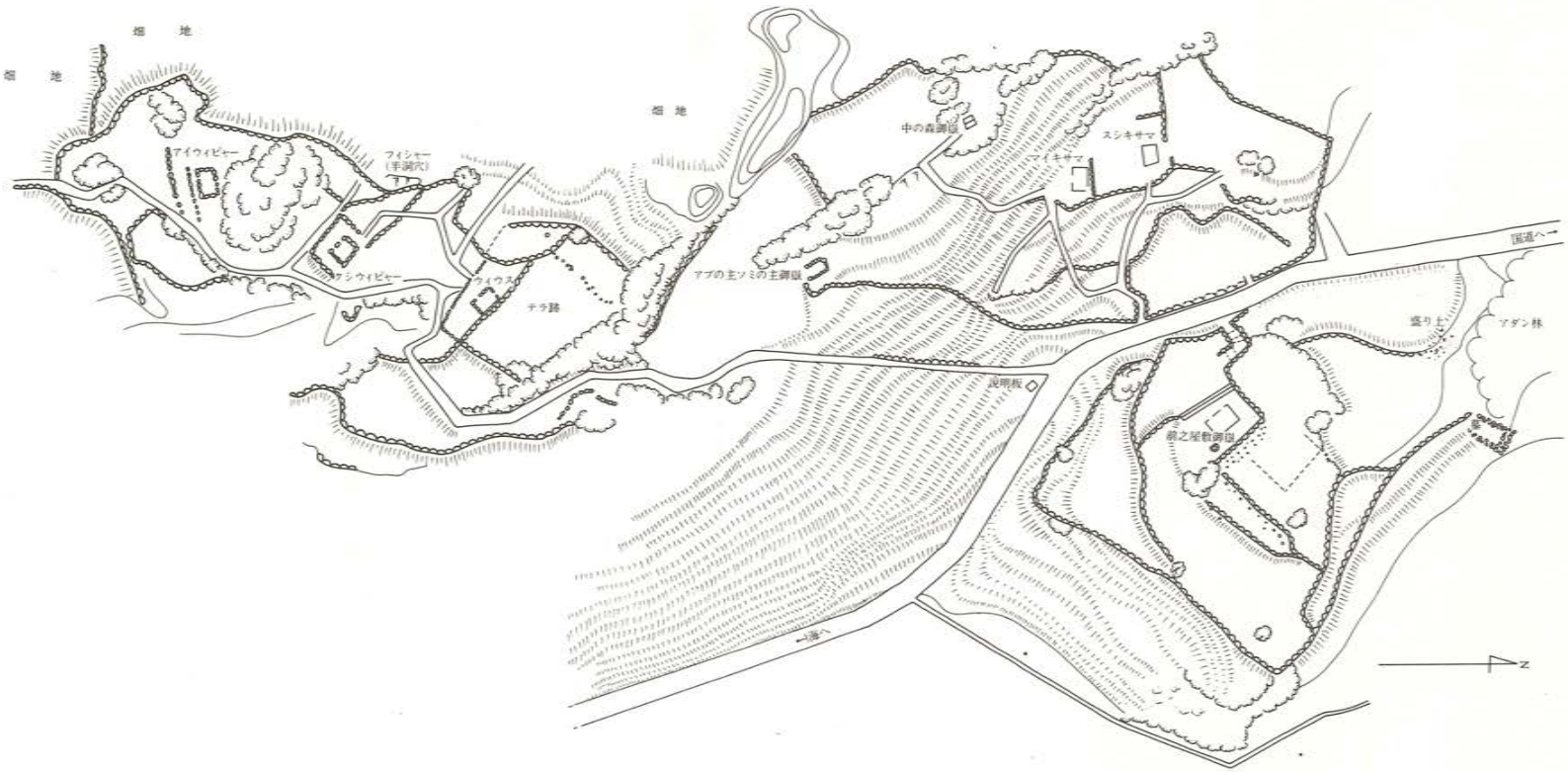
図版12　遺跡近景



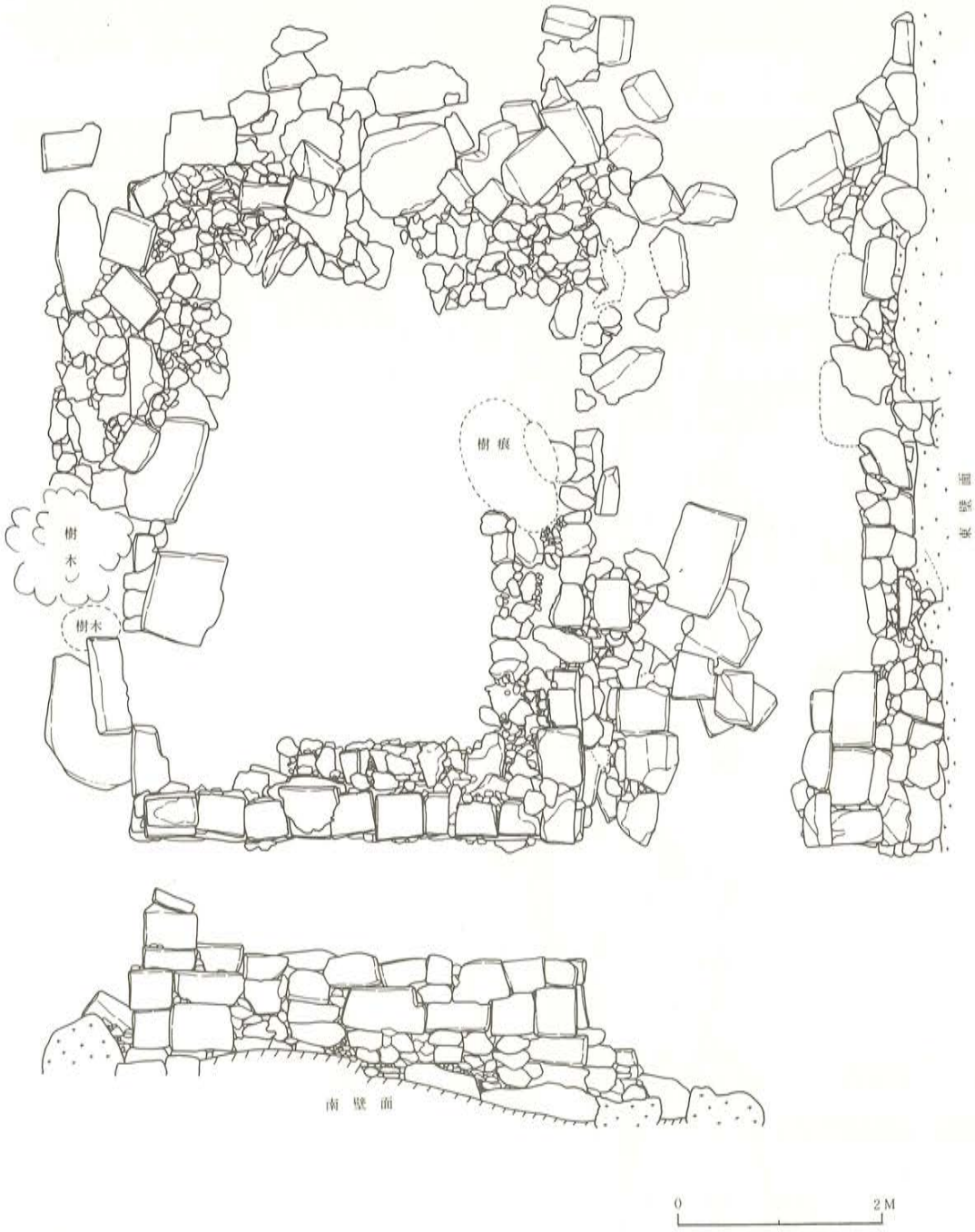
第20図　箕島（ムイズマ）遺跡位置図



第21図　上比屋森（ウイピャムイ）遺跡位置図

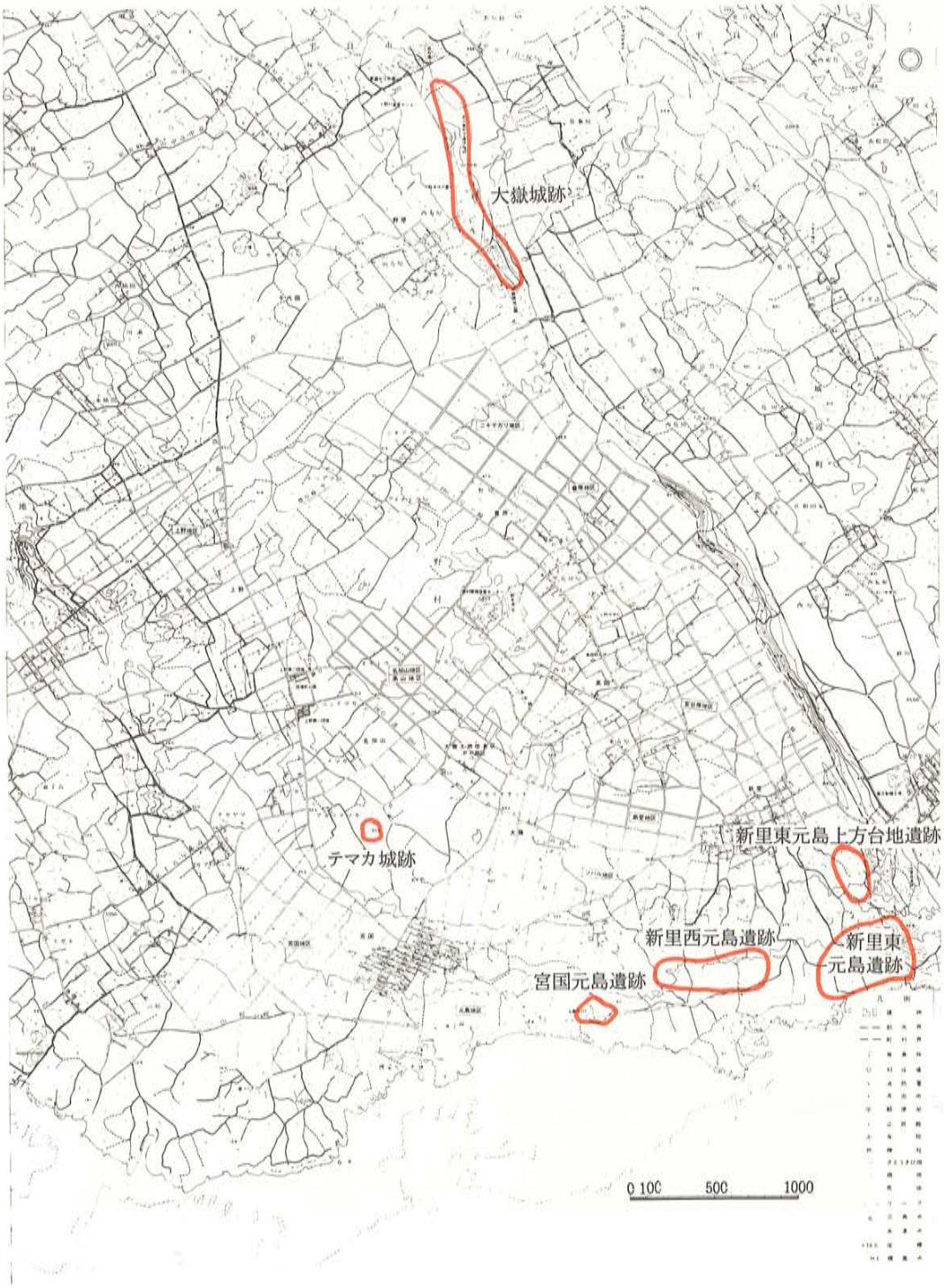


第22図　上比屋森遺跡見取図



第23図　上比屋森遺跡遠見台

図版13　上、遠見台全景（北側より）
下、遠見台近景（南東側より）



第24図　上野村のグスク及び相当期遺跡の分布図

3．上野村

宮古本島の南側ほぼ中央付近に位置している。村の北側（陸側）に標高80mの丘陵が東西方向に延びる。その丘陵を背に村内のほとんどが標高40m前後の台地状の平坦地となっている。海岸側は一段下がり、標高10m前後の低地を形成する。平坦地はほとんどが農地としての整備が進み、現在の集落もこの台地の上に展開している。

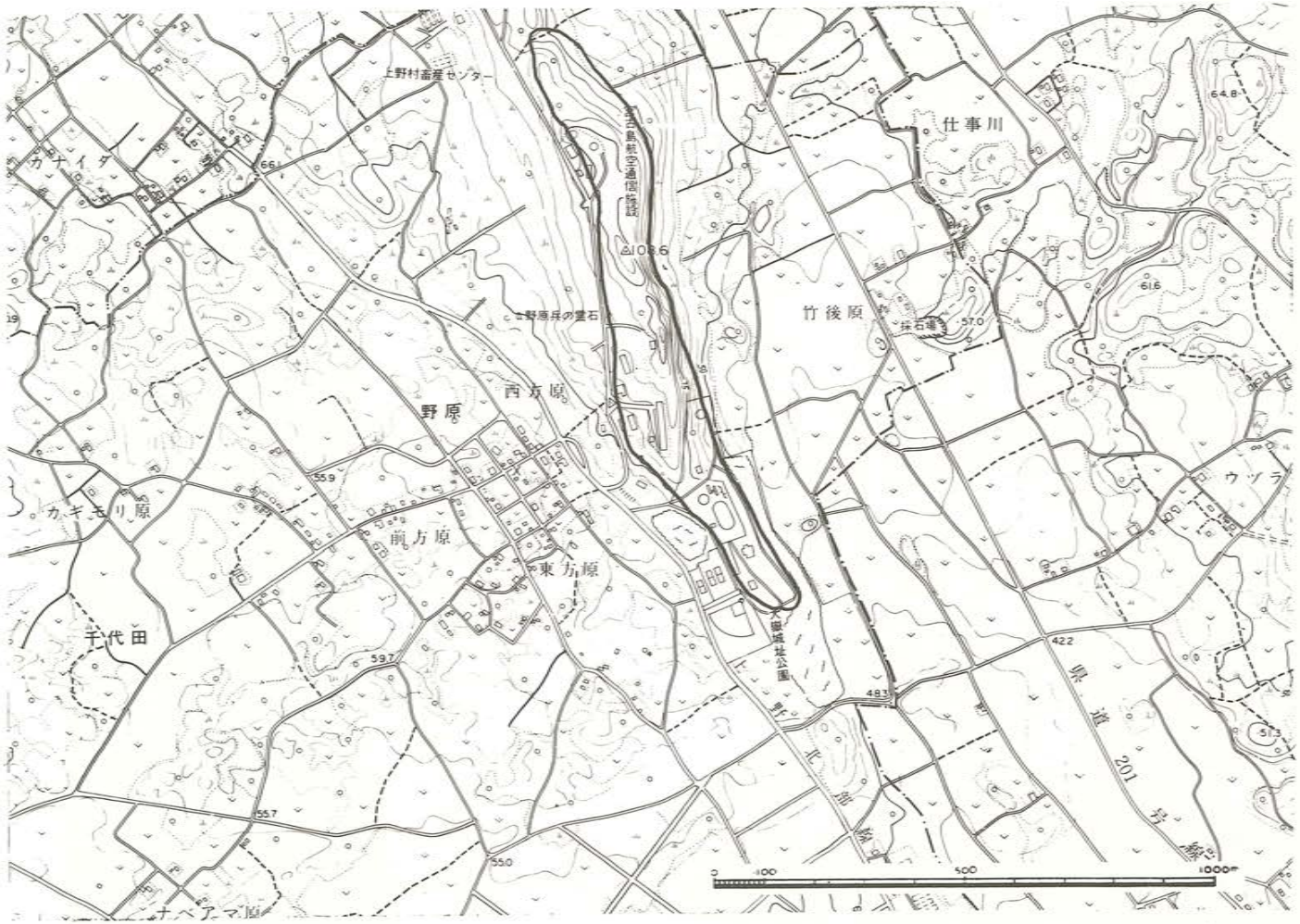
現在確認されている遺跡は７ヶ所で、海岸側の低地には元島遺跡が広い範囲で知られている。石垣の確認できるのは大嶽城跡とテマカ城跡の２ヶ所である。

⑬大嶽城跡

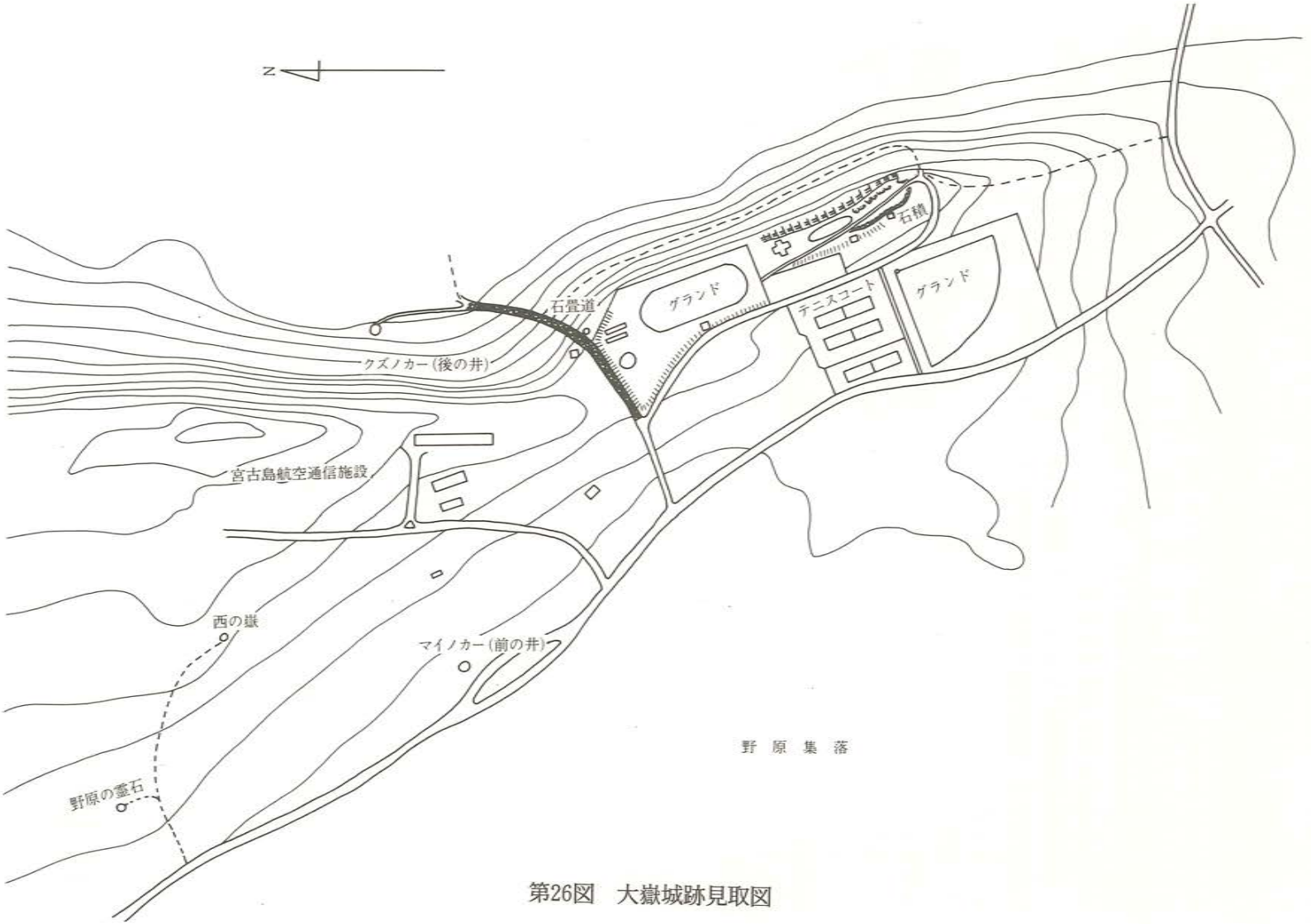
字野原に所在し、本村の北側を東西に延びる丘陵（標高約80m）上にある。北東側が急傾斜をなし、南西側は比較的ゆるやかで標高40m前後の平坦地が広がる。村全体を見渡せる所に位置しており、大嶽按司の居城と伝えられ、東西の長さ58間、南北54間を有していたようである。14世紀中頃に与那覇原軍によりほろぼされたが、野原村として再興したとされる。

現在は自衛隊の基地として利用され、一般の人々の出入りは禁じられている。また、周辺部は公園として整備されている。今回の調査でも石垣や石畳道が一部に確認できただけで、当時の面影はほとんど残っていない。

図版14　　大嶽城跡遠景



第25図　大嶽城跡位置図



第26図　大嶽城跡見取図

⑭手真嘉（テマカ）城跡

字宮国に所在し、テマカ部落の公民館より南東側へ約400m離れた所にある標高約60mの小丘がそれである。拝所をほぼ中央にして略方形状に石垣がまわる。75m前後の長さであるが東側の石垣は90m前後とやや長く積まれている。野面積みで１m前後の高さを有す。大正年間までは２m前後の高さであったが、道路整備や補強工事のたびに石が持ちさられて現在の高さになったようである。

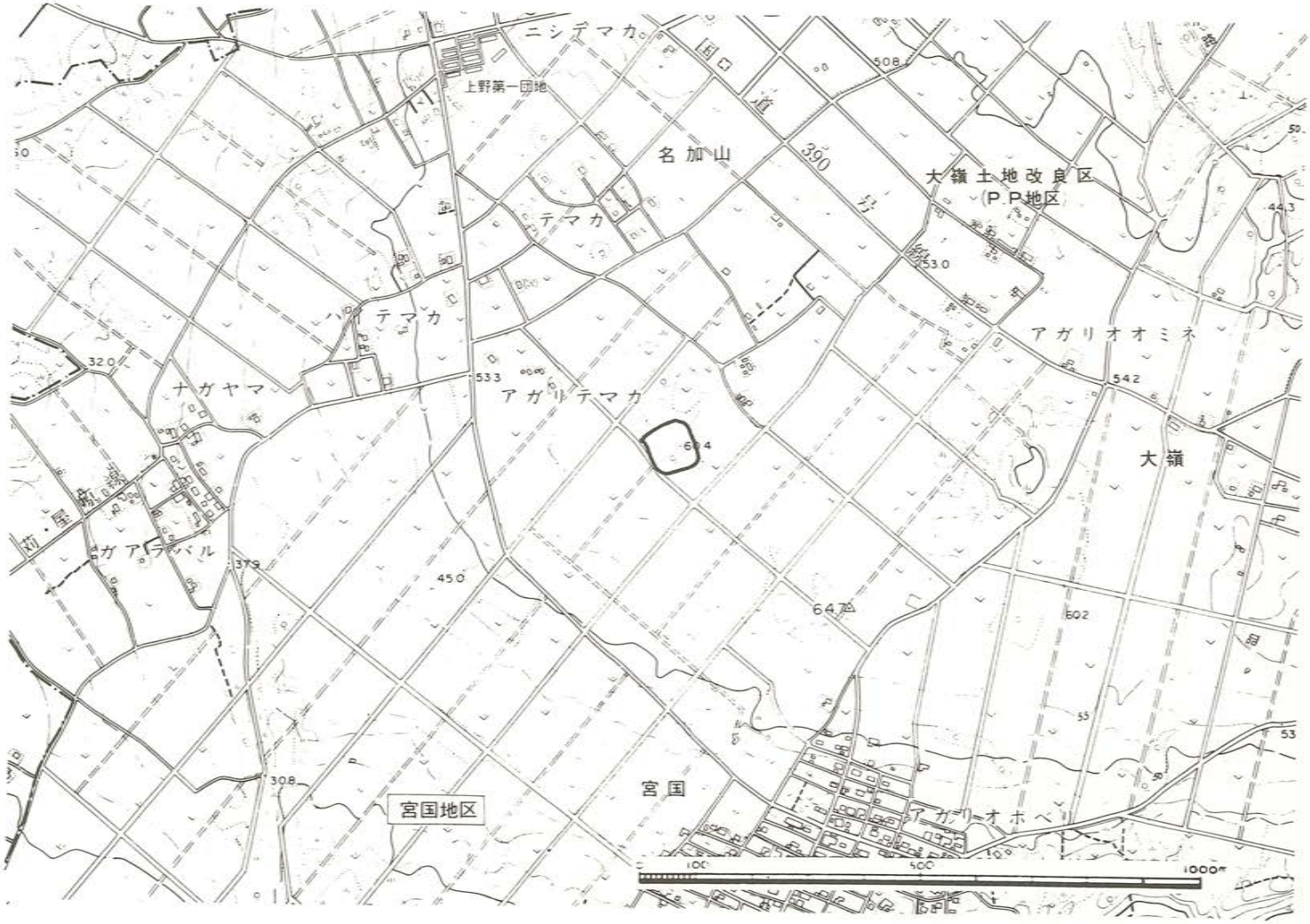
城門の位置は明確にできない。石垣内の拝所への出入りは、西側石垣の崩れた部分を利用している。石垣内はフラットな面で、現在は雑木林に覆われている。伝承では「城辺保良の平安名崎からトユミヤ が石を投げて一夜の中に石垣が築かれた」とされる。また、ここに祭られているヤマトガムギリウヌスと呼ばれる神は、久場嘉按司とたびたび合戦し、敗死したとの伝えもある。昭和54年３月９日に村指定文化財（史跡）になっている。

図版15　手真嘉（テマカ）城跡遠景

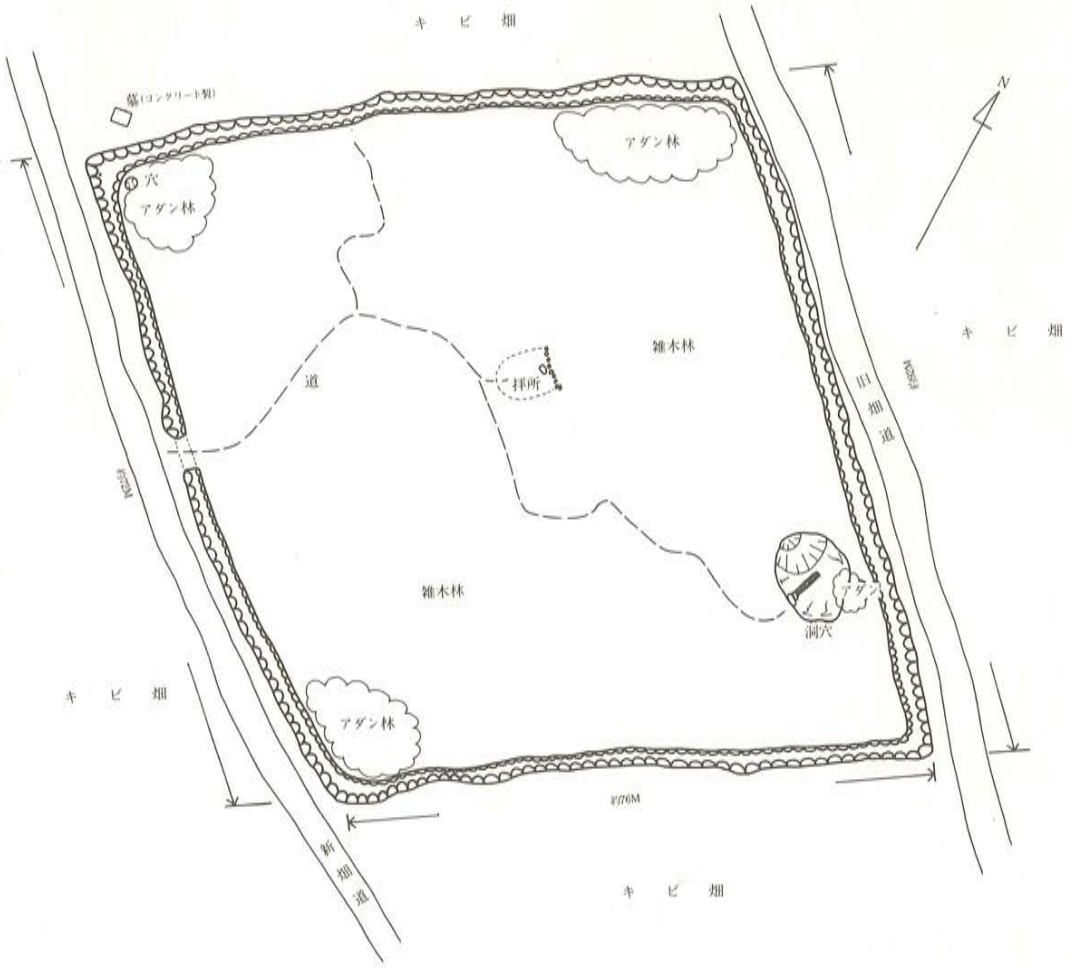
本村においては前記の２遺跡以外に、輸入陶磁器が採集されている遺跡が四ヵ所ある。

表３　上野村のグスク時代相当期の遺跡一覧

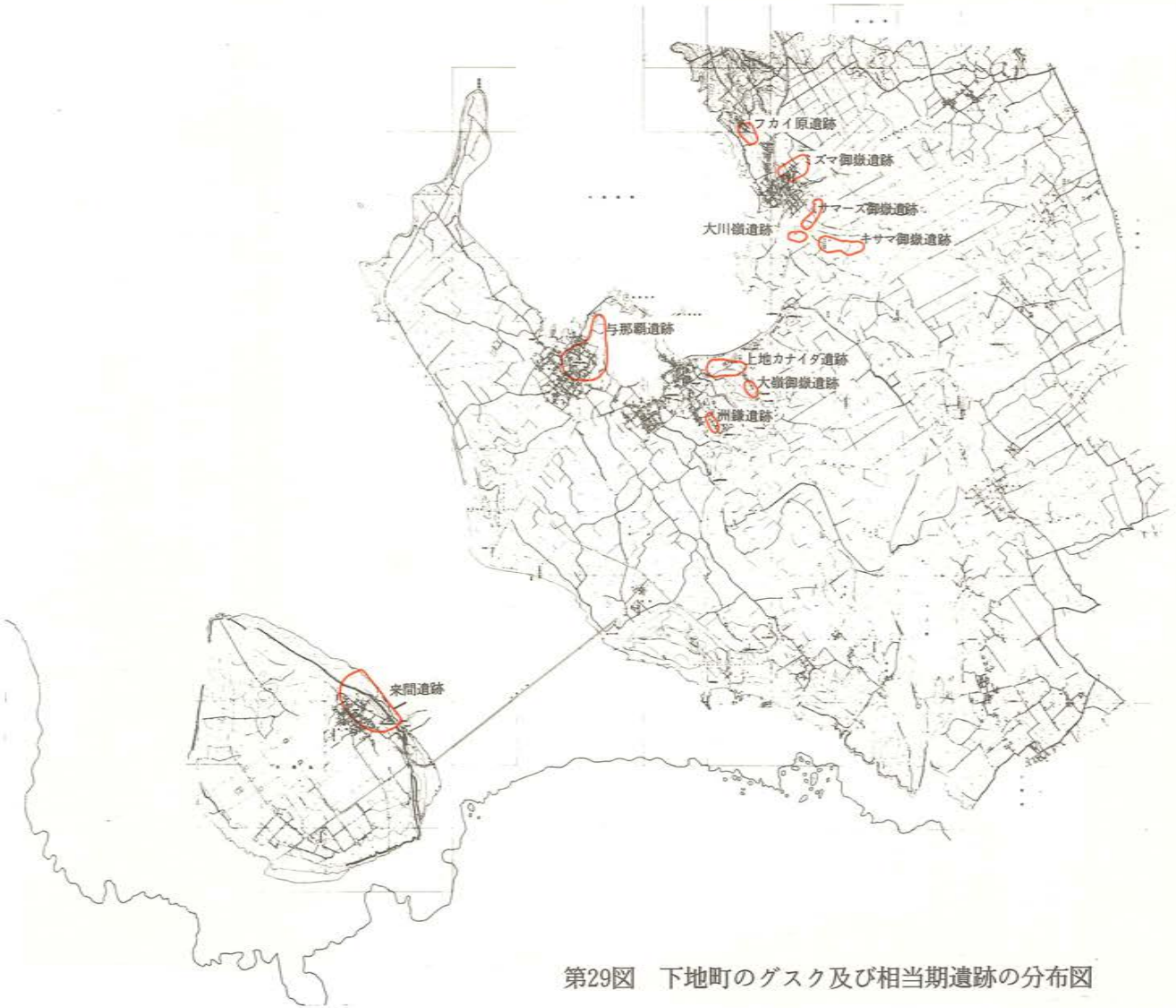
番号	遺 跡 名	採集及び出土遺物	時　期	備　　考
1	新里東元島上方台地遺跡	土器・輸入陶磁器	14〜17・18世紀	
2	新里東元島遺跡	土器・輸入陶磁器・鉄製品・貝製品・玉など	14〜17・18世紀	ナガイ・プッダ御嶽
3	新里西元島遺跡	土器・輸入陶磁器 貝製品など	14〜17・18世紀	キャーザガー
4	宮国元島遺跡	土器・輸入陶磁器 鉄製品・玉など	14〜17世紀	スカプヤー御嶽など アマカーなど



第27図　手真嘉（テマカ）城跡位置図



第28図　手真嘉（テマカ）城跡見取図



第29図　下地町のグスク及び相当期遺跡の分布図

4．下地町

宮古本島の南西側に位置し、来間島も含む。ほとんど平坦な地形で、あまり変化は見られない。集落のほとんどが北側の海岸寄りに展開し、町の中央付近から南側へは畑地がひろがる。海岸線は比較的変化に富み、北西海岸には宮古東急リゾートがある。また、宮古トライアスロンの水泳競技も行われる。

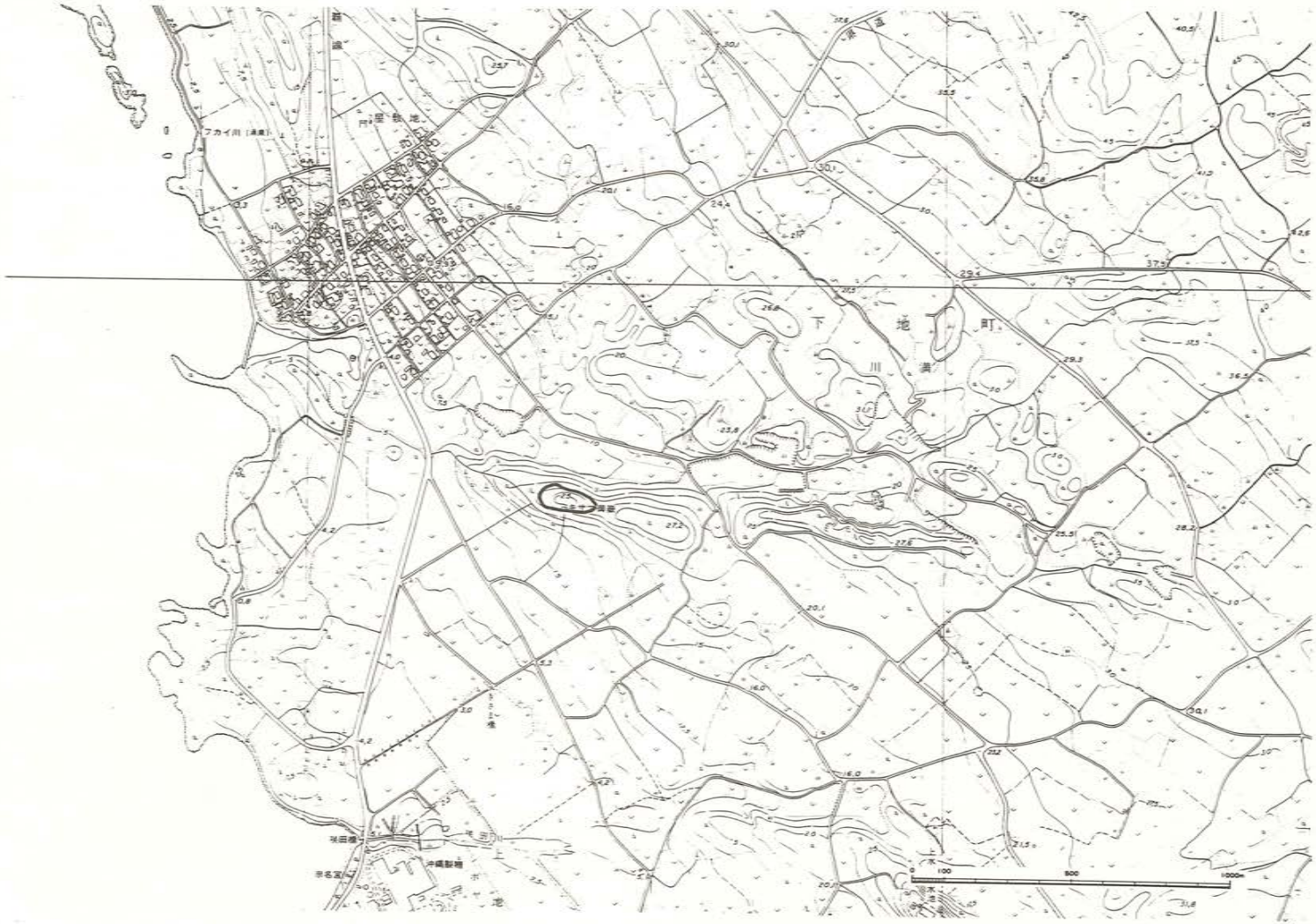
現在、12ヶ所の遺跡が確認されており、輸入陶磁器が採集されている遺跡も多い。石垣が確認されている遺跡は喜佐真御嶽遺跡だけである。

⑮喜佐真御嶽遺跡（喜佐真城跡）

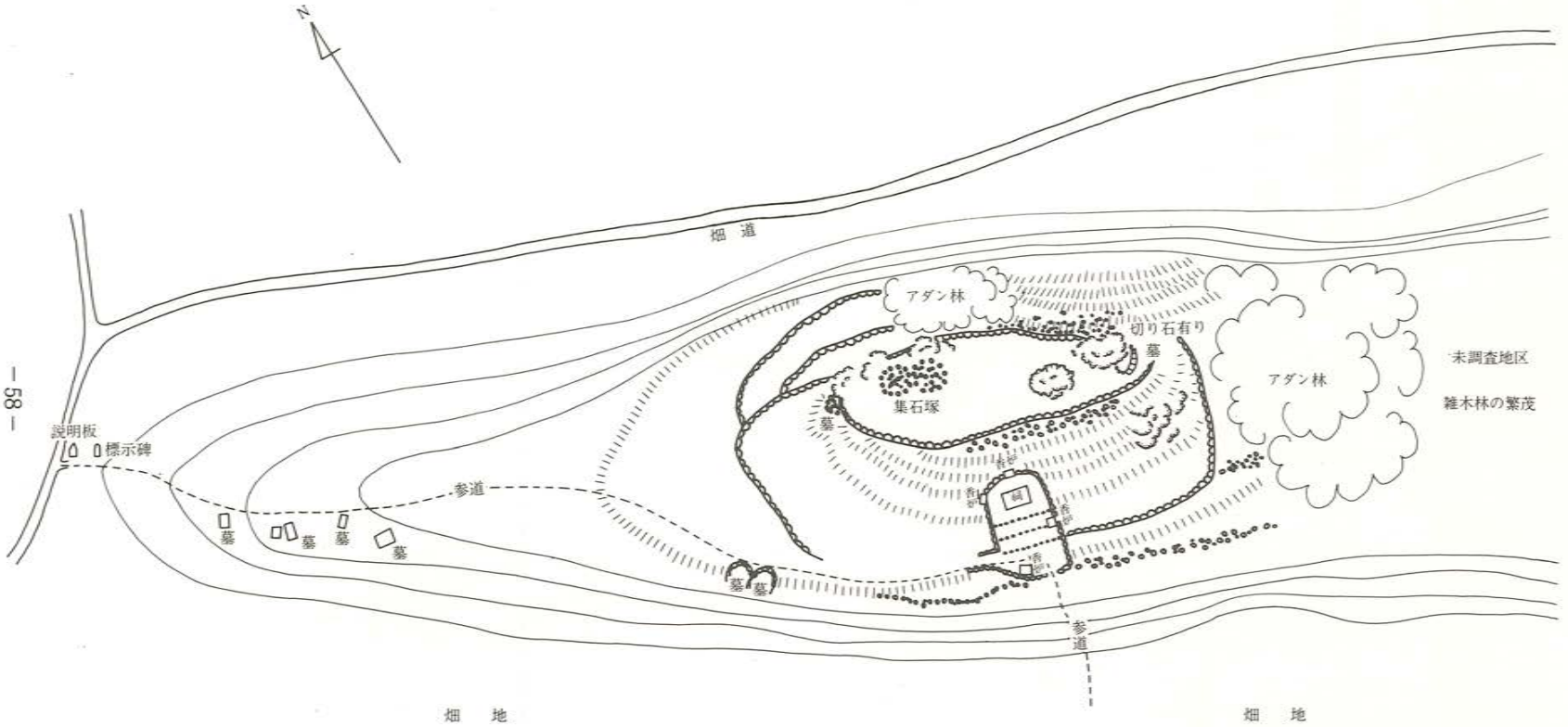
字川満に所在し、県道309号から東側へ約60m入った所に位置する。一帯は畑地であるが、標高約20mの琉球石灰岩小丘があり、その小丘にある喜佐真御嶽の周辺に石垣が確認できる。一帯は樹木が生い茂り、現在も信仰が生きづいている。

拝所の北側に一段高くなった場所があり、比較的フラットな面を形成している。石垣は高くなった部分と南側の緩斜面及び北側に廻らされており、北側は２重に廻る。石垣は比較的良く残っている。ほとんど野面積みであるが、上段の東側石垣には切り石も見受けられる。上段石垣内の西側には石灰岩の集積部がみられ、石垣下方には墓も確認できる。昭和51年11月１日付で史跡として町指定されている。

図版16　　喜佐真御嶽遺跡遠景



第30図　喜佐真御嶽遺跡位置図

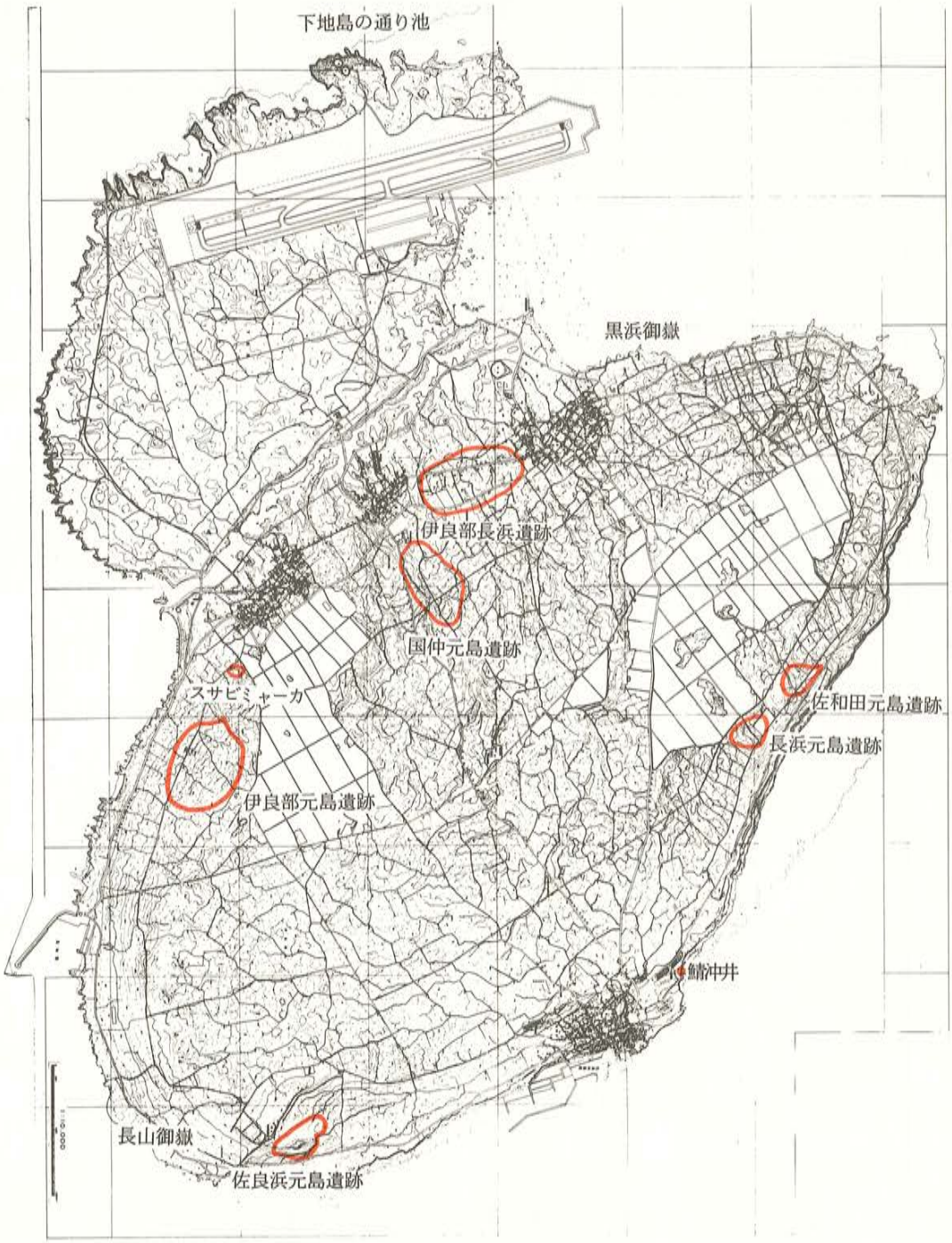


第31図　喜佐真御嶽遺跡見取図

本町において石垣は確認されていないもの、輸入陶磁器の採集されている遺跡が８ヶ所あり、以下に示した。

表４　下地町のグスク時代相当期の遺跡一覧

番号	遺跡名	遺　物	時　期	備　考
1	洲鎌遺跡	土器・輸入陶磁器	15～17世紀	拝所と円形井石が残る。
2	与那覇遺跡	土器・輸入陶磁器	14～18世紀	部落内がほぼ遺跡の範囲　井戸あり
3	上地カナイダ遺跡	土器・輸入陶磁器	15～18世紀	集落跡
4	大嶺御嶽遺跡	土器・輸入陶磁器		集落跡　拝所あり
5	大川嶺遺跡	土器・輸入陶磁器		
6	サマーズ御嶽遺跡	土器・輸入陶磁器	15世紀～	サマーズ御嶽を中心
7	ミズマ御嶽遺跡	土器・輸入陶磁器 鉄滓		
8	フカイ原遺跡	土器・輸入陶磁器		
9	来間遺跡	土器・輸入陶磁器	15～17・18世紀	アガリウス・ウリヌ御嶽、来間ガー



第32図　伊良部町のグスク時代相当期遺跡の分布図

5．伊良部町

伊良部町は宮古島の南西約８㎞の洋上に位置する島で、伊良部島と下地島の二島からなっている。

両島は東西に長さ約3.5㎞、幅30〜100ｍの入江水道を隔て所在する。東側の伊良部島は面積が30.48㎢の概ね楕円状の島で、全体が第四期更新世の琉球石灰岩からなる。地勢は島の東南にある牧山（標高88.8ｍ）を最高にするが、島全体に北東側から南西側に緩やかに傾斜し、おおむね台地状をなしている。島の北東海岸は断層海岸になり、一方南西側は砂丘や泥質の海岸が展開している。多孔質の石灰岩のため、河川の発達はみられない。

下地島は9.65㎢の低平島で、伊良部島との境の南の海岸には砂丘の発達がみられる。地形をそのまま利用して東洋一とされる旅客機パイロット飛行訓練場（滑走路）が島の大半を覆うかたちでつくられている。

現在の集落は伊良部島に７つあり、東海岸に、近世に池間島から移住者によって形成された佐良浜集落（池間添、前里添）、下地島側の西海岸側には北から佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部の各集落が集中している。記録によれば長浜、仲地は近世に形成され、他は古くからのものとされている。

踏査の結果、伊良部島には沖縄本島の様な山頂や丘陵頂部に石積みをもって郭を形成した、いわゆるグスクは現在のところ見られない。ただし、立地上、比較的眺望の利く斜面地ないし平地にあり、グスク時期（12ｃ〜16ｃ）に概ねかさなるものや関連するものと考えられる遺跡は総数７ヵ所確認される。該遺跡群を性格別にみると６ヵ所が集落跡とされる元島遺跡、残りの１ヵ所がミヤーカ（巨石墓）からなる。遺跡の概要については当教育委員会編『宮古の遺跡』にゆだねるとして、本文では次の通り、遺跡の位置と所在、標高、遺物、時期（表面採集資料による判断）の項目で表にする。

表５　伊良部町のグスク時代相当期の遺跡一覧表

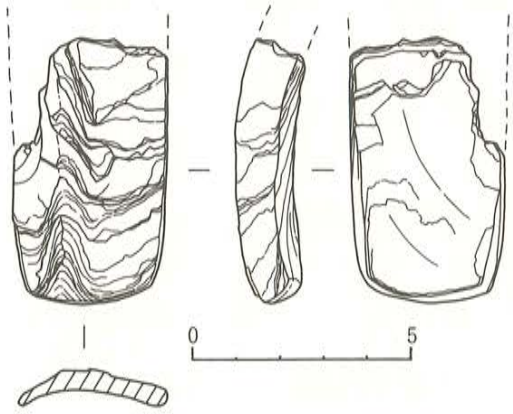
No.	遺　跡　名	所 在	標高ｍ.	出 土 遺　物	時　期
1	伊良部長浜遺跡	字長浜	約7.5	須恵器、青磁器 外耳土器、黒褐釉陶器 白磁碗、夜光貝製品	14〜16世紀
2	国仲元島遺跡	字国仲	約20〜35	青磁器、土器、染付 黒褐釉陶器	16〜18世紀
3	伊良部元島	字伊良部	約25〜47	青磁器、外耳土器、 白磁碗、黒褐釉陶器、 染付、石斧、貝皿	14〜17世紀

4	佐良浜元島	字牧山	約25〜47	青磁器、土器 黒褐釉陶器	資料微細片のため時期不明
5	長浜元島遺跡	屋原（ヤーバル）	約47	フク木並木が確認されるが遺物は未発見	—
6	佐和田元島遺跡		約47	フク木並木が確認されるが遺物は未発見	—
7	スサビミヤーカ	字伊良部	約12	町教育委員会により、平成２年度調査予定	—

注）No.１．遺跡内にある伊良部小学校門近くに20年までミヤーカーが確認されている。
No.２．遺跡に国仲御嶽周辺も含まれる。遺跡近隣で土地改良が進行している。
No.４．遺跡内に野面の石積み有り、口碑伝承では近代に平良から税を逃れ移り住んだ人々の居住跡とされている。
No.５、６の二遺跡周辺は土地改良が完了し、地形の変貌がみられる。

出土資料紹介

伊良部長浜遺跡の断面に露呈した包含層中から採取。素材は夜光貝。やや略方形を残して破損した製品で、全形はうかがえないものの、残存部のカーブの状況から貝匙の取っ手の可能性がある。
研磨は良好で、自然貝の突起は消され、偏平に仕上げてある。裏面は特に真珠層が露出し光沢がある。長軸の最長6cm、短軸の最長3、5cm、最大厚0、4cm

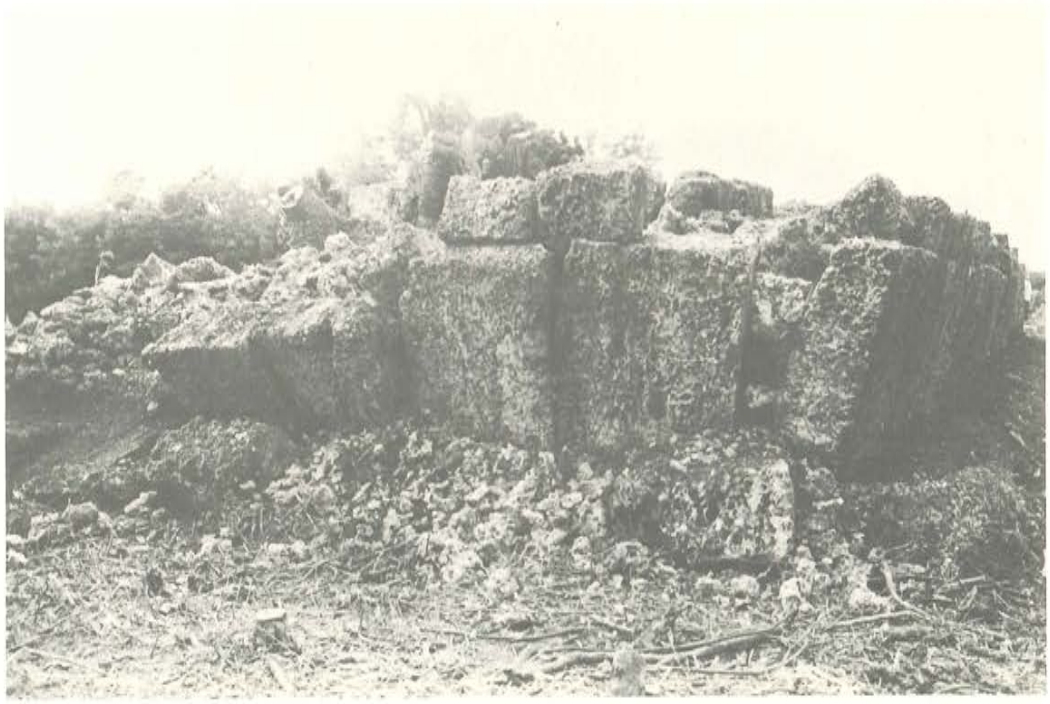


第33図 貝製品

〔参考文献〕

角川書店 沖縄県地名大辞典 1986年
沖縄タイムス社『沖縄大百科辞典』1983年
沖縄県教育委員会『沖縄県の遺跡分布図』1977年
沖縄県教育委員会『宮古の遺跡』1983年

図版17　上、伊良部東元島遺跡
下、伊良部西元島遺跡（中央の林内にスサビミャーカー）



図版18　伊良部町　スサビミャーカー

6．多良間村

多良間村 は主島の多良間島（方名;タラマズマ)と水納島を含める二島一村からなる。宮古島から約55km、石垣島からは約35kmに位置し、緯度は北緯24°39´、東経124°42´である。面積は19.9km²、周囲16.64kmである。島の形は楕円形状に近い。年間平均気温は23度、年間平均湿度80％である。総人口1,283人、帯数480世帯（平成元年12月現在)。島の標高は32.8mを最高に10〜15mの平坦な地形が目立つ。島の周囲には砂丘があり、リーフも発達する。地質は琉球石灰岩とそれを覆う赤土（島尻マージ）で形成される。島の産業はサトウキビが主である。島への交通は週２往復のフェリー多良間と19人乗り小型飛行機（DHC－６）が飛んでいる。この島の考古学に依る本格的な発掘調査は実施されていない。沖縄本島にある城壁を持ったグスクはないが、これに相当する遺跡はある。これは、「雍正旧記」・「琉球国由来記」等に登載された運城御嶽と称された御嶽である運城御嶽は「宮古島の遺跡」で運城御嶽遺跡と報告された遺跡でもある。また、グスク時代相当期の集落が７件確認できた。遺跡の時期は表面資料に依るものである。なお、多良間でも小高い丘のことを「ツズ」と呼んでいる。

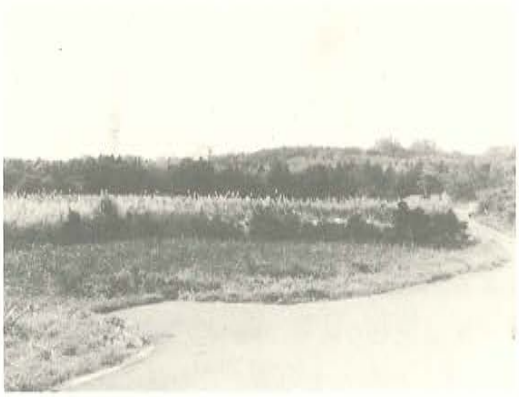
⑯運城御嶽遺跡（ウングスク）

運城御嶽遺跡は集落の北側にある標高約35mの丘陵上に形成されたグスク相当の遺跡である。運城御嶽（神名;オトラフセライ神ノンフセライ)・泊御嶽の両御嶽は島でも古い御嶽であり前者が島守の神、後者は海守の神を祭った御嶽である。また、この運城御嶽・泊御嶽は島の英雄土原（ンタバル）豊見親によって1523年頃に御嶽を創設されたと伝えられている。

運城御嶽の後方の丘陵がグスク本体である。御嶽の方向などから本来、御嶽は丘陵地内に存在していた可能性が大きい。グスクの規模は長さ約95m、幅（約15m〜約55m）で、頂上から北側に向かって平場が６ヶ所確認された。石積み等の遺構は確認出来なかった。グスクの縄張りの配置は宮古本島にある牧の頂遺跡に近似する。遺物は頂上の平場及び各平場や

図版19　運城御嶽遺跡近景

東西の斜面地で採集でき、特に斜面地に多い。土器、褐釉陶器、須恵器、白磁等が採集できる。採集した白磁はビロースクタイプⅡである。これらの状況から推定される時期は、石積み等の遺構が存在しない点や白磁のビロースクタイプⅡ等の資料等から13世紀中頃以降の遺跡として位置付けられるのではないだろうか、例えば石垣市のビロースク遺跡、城辺町の野城遺跡相当の時期である。いづれにせよ今後の発掘調査に期待される遺跡であろう。



図版20　運城御嶽遺跡遠景

参　考　文　献

多良間村誌編集委員会『村誌たらま島』1973年。

多良間村役場村勢要覧『たらま』1987年。

多良間村役場『多良間村史（第二巻資料編１）』1986年。

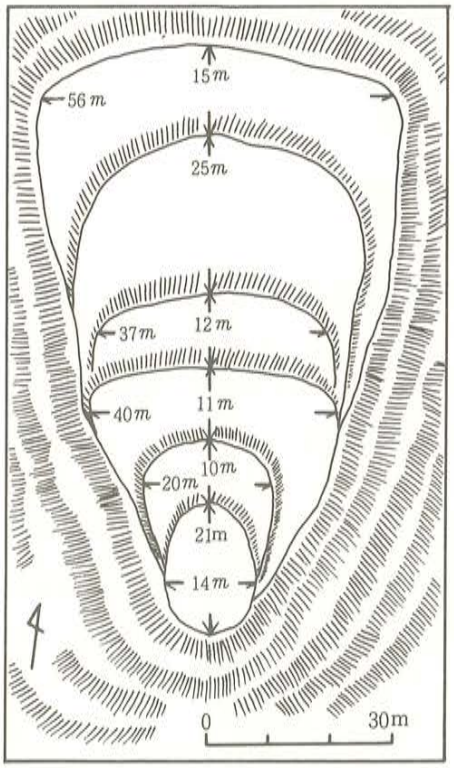
宮古郷土史研究会『宮古の史跡をたずねて』1989年。

石垣市教育委員会『ビロースク遺跡』1983年。

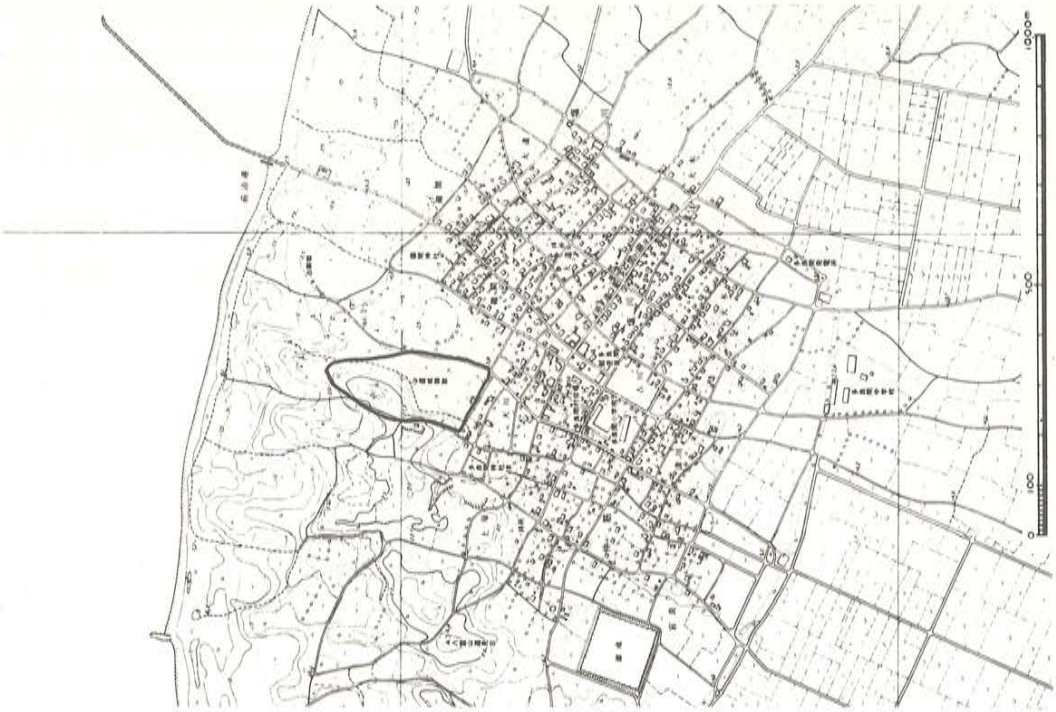
沖縄県教育委員会『宮古の遺跡』1983年。

金武正紀「ビロースクタイプの白磁について」『貿易陶磁研究』No.8　日本貿易陶磁研究会　1988年。

盛本　勲『大牧遺跡・野城遺跡』城辺町教員委員会　1987年。



第34図　運城御嶽遺跡の縄張り（略図）



第35図　運城御嶽遺跡位置図

グスク相当期の集落

グスク相当期の集落は７ヶ所確認できた。以下、表化した。

表６　多良間村のグスク時代相当期の遺跡一覧

番号	遺跡名	遺物	時期	備考
1	嶺間遺跡	土器、須恵器、褐釉陶器、青磁、近世の陶器等。	13世紀～17･18世紀。	嶺間按司を祀る神社。
2	塩川井遺跡	外耳土器、褐釉陶器、青磁、白磁等。	13･14世紀。	井泉あり。『シュガーガー』。
3	天川遺跡	外耳土器、青磁、染付等。	14～17･18世紀。	近くに井泉あり。『アマガー』。
4	土原遺跡	土器、褐釉陶器、青磁、染付、白磁等。	14～17･18世紀。	土原豊見親の父母を祀る神社あり。
5	波利真遺跡（塩川村跡）	外耳土器、褐釉陶器、青磁、染付、白磁等。	15世紀前後～17･18世紀。	張間大殿・世泰大殿・波利真大殿が村主。井泉あり。『ハリマガー』。
6	フシャトウガー遺跡	土器、褐釉陶器、青磁、染付、近世の陶器・擂鉢等。	15世紀前後～17･18世紀。	井泉あり。『フシャトゥガー』。
7	水納遺跡	土器、青磁、陶磁器。	15世紀前後～17･18世紀。	水納島世農主。

以上が多良間村に於けるグスクおよびグスク相当期の集落である。グスクとして取り扱っても差し支えないのは運城御嶽遺跡である。グスク相当期の集落を調査した結果、八重山諸島で普遍的に見られる外耳土器[註1]が濃厚に入っていることが分かった。この外耳土器が宮古島まで北上して、いわゆる野城式土器[註2]と称されるひとつのタイプが派生したことを裏付けるものであろう。嶺間遺跡採集の土器は最近、発掘調査が実施された竹富島新里村遺跡[註3]で得られている。この手の土器は、新里村遺跡や沖縄本島のグスク発生時期に登場し、広義には12世紀前半〜14世紀初頭まで見られる。

土原遺跡採集の褐釉陶器は与那国町与那原遺跡[註4]・竹富島新里村遺跡[註5]で出土した龍文の壺と特徴が一致する。今回の調査で嶺間遺跡に隣接して無土器の貝塚が確認でき、遺跡名は小字名から白嶺貝塚[註6]とした（金城・上原が確認）。また、遺跡の範囲も広がったので新しく図面を作成した。

今回、採集した 遺物を図化し記述する。遺物を採集した遺跡は運城御嶽遺跡、嶺間遺跡、塩川遺跡、天川遺跡、土原遺跡、波利真遺跡、白嶺貝塚の７遺跡である（第　図１〜11）。

第　図１は白磁碗でビロースクタイプⅡ[註7]と呼称されるものである。外面に顕著な轆轤痕がみられる。釉は灰白色。素地は灰白色で、微粒子。推算口径13.8㎝。

同図２は須恵器の破片で口縁を欠く、外面の仕上げは雑で叩きがナデ消されていない。内面も雑である。器色は灰褐色で、石灰質の微砂粒と石英を多量に含む。

同図３は土器の口縁破片で、直口気味の器形とみられる。２㎜前後の貝殻片が多量に混入する。外面は篦削りをナデ消す。内面はナデが主で部分的に刷毛目状の調整。器色は茶色。 同図４は縦耳状の把手を貼り付けた土器片で、口縁を欠く。胎土に石灰質の微砂粒等を混入させる。内外面は器面の保持が悪く、調整がはっきりしない。器色は内外面とも淡黄色。 同図5は白磁碗でビロースクタイプⅠ[註8]の範疇に入いる資料である。口唇は尖り、外面に轆轤痕がみられる。内面に線を廻らす。素地と釉は白色である。釉は透明。

同図６も白磁碗でビロースクタイプⅡ[註9]と呼称されるものである。特徴や釉色等は同図１と類似する。推算口縁は15.4㎝。

同図７は外耳土器の口縁破片で若干、外側に開く。外面はナデ仕上げ。内面は篦削り後にナデ施すが徹底しない。胎土に石灰質の細砂粒・ 貝殻片を混入させる。器色は黄褐色。

同図８も外耳土器の破片で、口縁が欠落する。両面ともナデで仕上げる。胎土に石灰質の細砂粒・貝殻片を混入させる。器色は外面が淡黄色、内面は黄褐色を帯びる。

同図９は褐釉陶器の口縁破片で、推算口径18.2㎝を測る。肥厚口縁で縦断面は逆「L」字状となり、縦耳を貼り付ける。圏線を二本廻らす。釉は黄緑色。素地は淡橙色。

同図10も褐釉陶器の口縁破片である。推算口径12.6㎝を測る。肥厚口縁で頸部から下を欠く、新里村遺跡[註10]の例から口頸部の縦断面は「く」字状に折れ、肩が張るタイプと考えられる。釉は暗褐色。素地は灰褐色、細粒子。

同図11は海獣骨（ジュゴンか）の肋骨を用いた製品である。肋骨の先端を丸く、ヘラ状に加工したものであるが、先端は純角である。全体的に器面の保持が悪い。重量約30ｇ。

註

註１．鳥居龍蔵「沖縄諸島に居住せし先住民に就いて」人類学雑誌　第20巻227号　日本人類学会　1905年。

註２．下地和宏「野城（ぬぐすく）式土器について」琉大史学第10号　琉大史学会　1981年。

註３．金武正紀「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」沖縄県立博物館紀要　第15号　1989年。

註４．与那国町教育委員会『与那原（どなんばら）遺跡』1988年。

註５．新里村遺跡の資料整理中に確認。

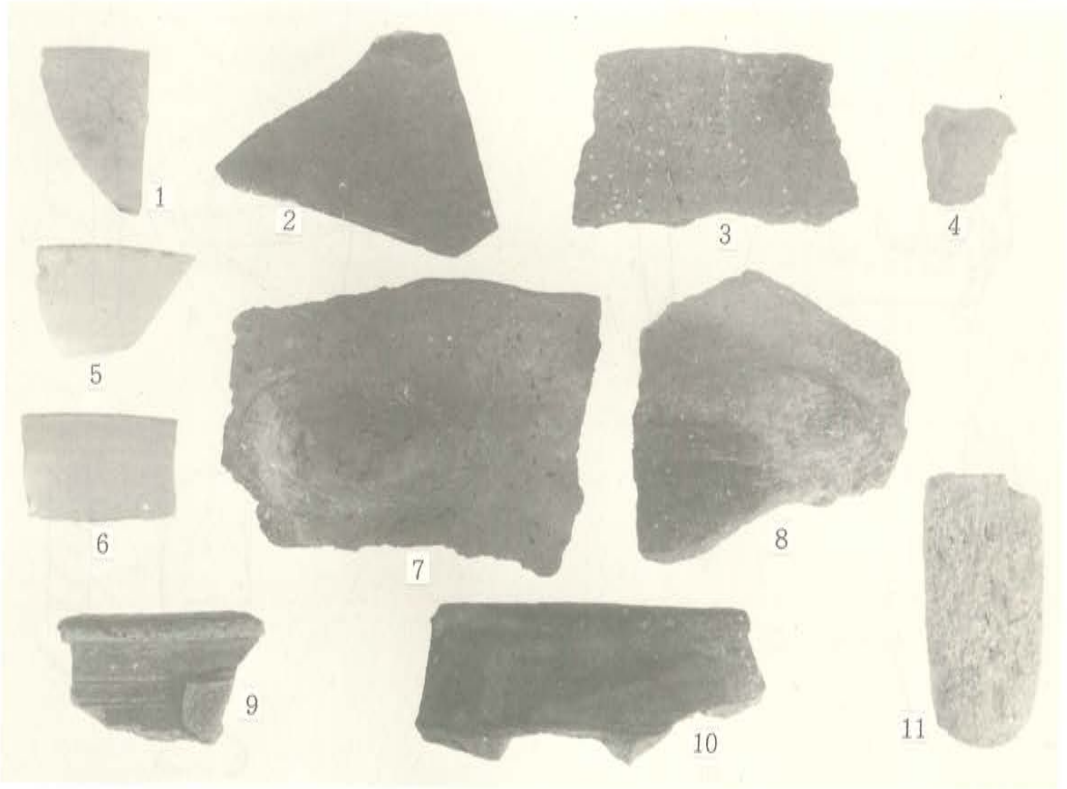
註６．1990年１月９・10日に確認。海獣骨の肋骨は採砂された土砂から金城が採集した。

註７．金武正紀「ビロースクタイプの白磁碗について」貿易陶磁研究№８　日本貿易陶磁研究会　1988年。

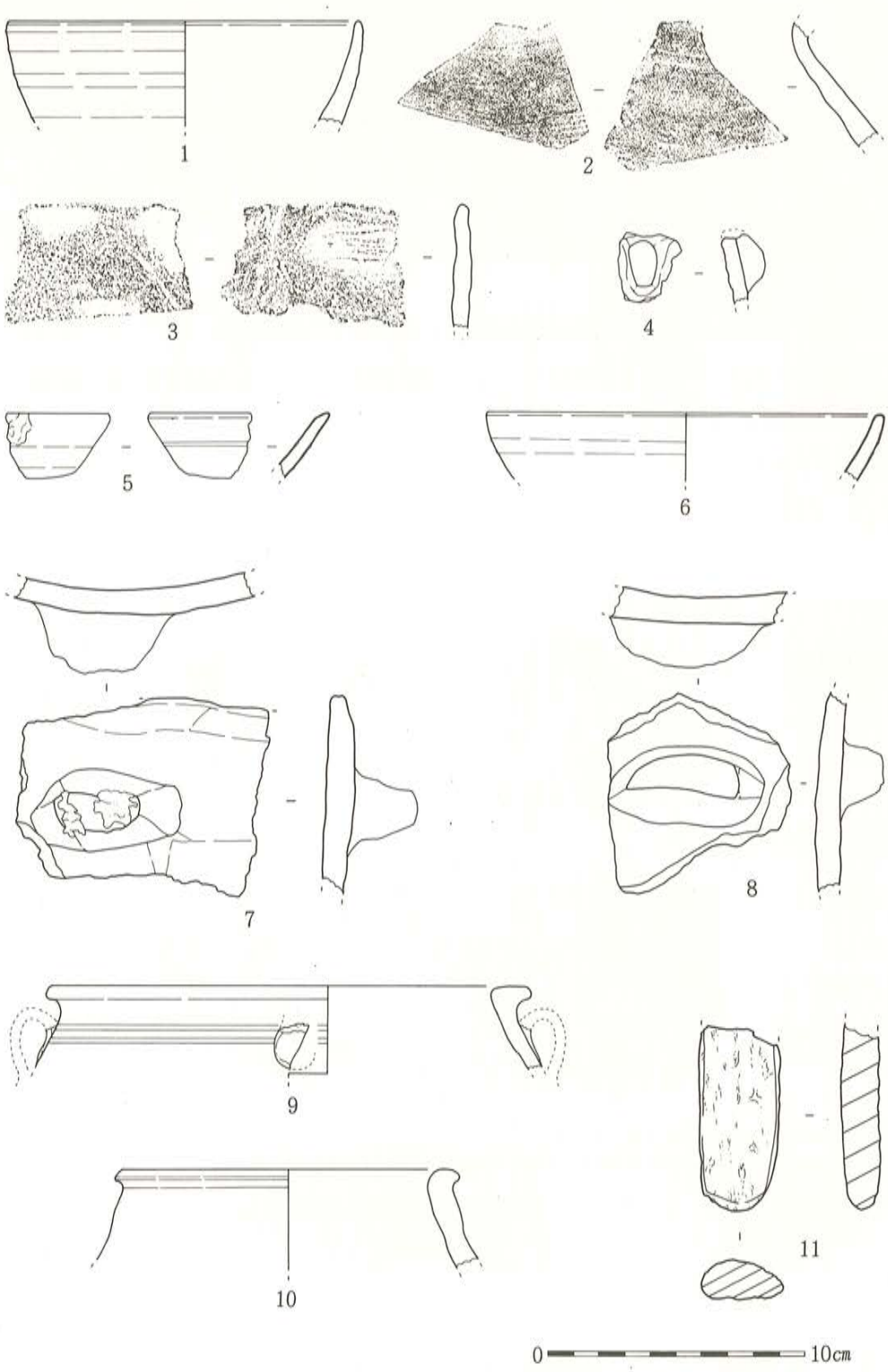
註８．註．７と同じ。

註９．註．７と同じ。

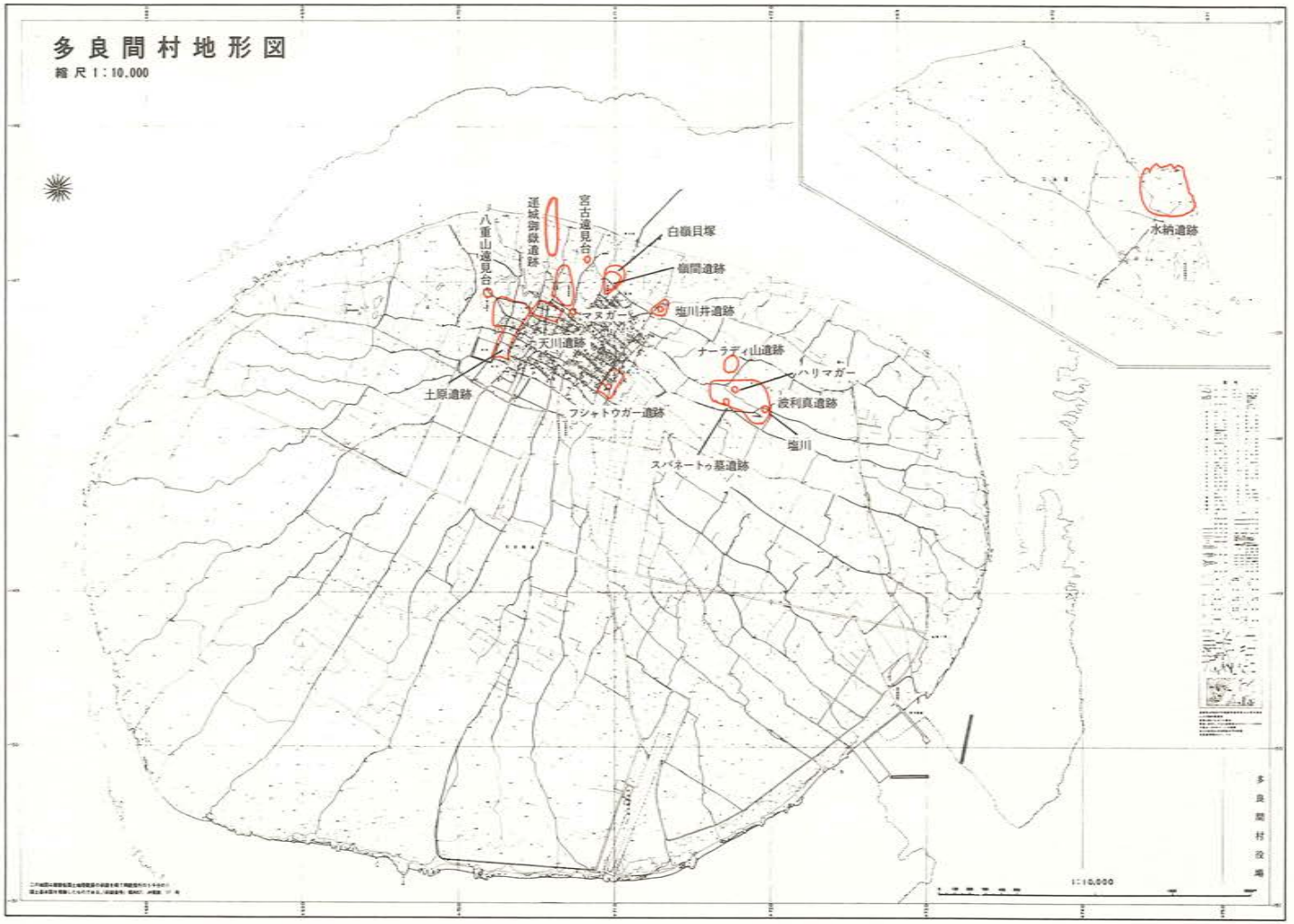
註10．註．５と同じ。



図版21　採集遺物　１～３．運城御嶽遺跡、　４．嶺間遺跡、　５・６．塩川井遺跡、
７・８．天川遺跡、９．土原遺跡、10．波利真遺跡、11．白嶺貝塚



第36図　採集遺物　1～3．運城御嶽遺跡、　4．嶺間遺跡、　5・6．塩川井遺跡、
7・8．天川遺跡、9．土原遺跡、10．波利真遺跡、11．白嶺貝塚



第37図　多良間村のグスク及び相当期遺跡の分布図

第Ⅳ章　グスクに関する伝承及び古文献等

宮古島の古文献で城名がみられるものでは、『雍正旧記』『宮古記事仕次』があげられる。いずれも18世紀前半頃に著されたものである。本章では両旧記に記載された城を検索し、その名称と旧記の記載頁（平良市史　第三巻　資料編Ⅰ）を表にして収録した。また古文献ではないが、宮古島の歴史研究の初期のもので、さけてはとおれない入門書的文献としても位置づけられる、『宮古史伝』『宮古島庶民史』の二書がある。これら書は、宮古旧記や伝承記録等を援用しながら独自に調査研究されたもので平易な文章で記されている。両書については城名のみ収録するにとめた。

雍正旧記

首里大府の修史事業（中山世譜）の一環で、1727（雍正五・享保12）年に資料を報告して編纂した記録である。現存する宮古島の史籍では、御嶽由来記録（1705年）に次ぐ古い記録である。内容は各村番所の位置、数、蔵元と番所間の距離、方位、村々の各所遺跡、城跡、井川、港、功歴、貞女、あやぐ等が記述されている。城の記録は口碑伝承によるもので、往時段階ですでに遺跡であることが理解される。検索の結果、８件の城が確認される。

No.	城　名	収録頁	備　　考
1	伊佐良城	43頁上段	平良市史　第三巻　資料編Ⅰの収録文献頁
2	浦島大立城	44頁下段	
3	久場川城	45頁下段	
4	金志川城	46頁下段	
5	高　腰　城	47頁上段	
6	大　嵩　城	47頁下段	
7	西銘飛鳥城	47頁下段	
8	大浦多志城	49頁上段	

宮古記事仕次

雍正旧記が王府の命により報告されたものであるのに対し、この書は忠導氏うやき屋の大主が書いたものを在番筆者・明有文長良が1748年に編修した物語本である。主として神話、軍記ものからなる。検索の結果、８件の城が認められた。

No.	城　名	収録頁	備　　考
1.	すみなれし城（保里城）	67頁下段	平良市史　第三巻　資料編Ｉの収録文献
2.	西　銘　城	68頁下段	
3.	石　原　城	70頁上段	
4.	糸　数　城	71、72頁下段	
5.	外間根間に城を構へ	76頁上段	
	城郭を堅固に	76頁下段	
	城戸を	76頁下段	
	根間外間の城	76頁下段	
6.	久場嘉城	83頁上段	
7.	高腰の城	84頁下段	
8.	金志川城	86頁下段	

宮古史伝と宮古島庶民史

上述の旧記以外に、宮古史を体系的にまとめた文献として、慶世村恒任著『宮古史伝』と稲村賢敷著『宮古島庶民史』の二つがあげられる。

前者の『宮古史伝』は戦前（1927年）に初めて通史でまとめられたもので、その編年方式はその後の研究者に大きく影響をあたえている。その構成は天太の世―按司の世―豊見の世―大親の世となり、天太の世が宮古の神話時代であり、按司の世は今調査の対象時期にあたる豪族の群雄割拠の時代、豊見親の世は各部族集団の争乱から統一へ向かう時代、大親の世は琉球王朝体制に組み込まれ、さらに薩摩支配を通して大きく幕藩体制に組込まれた時代となっている。書中にみられる城名をあげると次の10件になる。

1. 石原城　2. 糸数城　3. 西銘城　4. 喜佐真城　5. 久場嘉城

6. 久知名城　7. 大嵩城　8. 高腰城　9. 内 立 城　10. 新 腰 城

後者の文献の『宮古島庶民史』は戦後の早い時期（1957年）に発表されたものである。実地踏査を踏まえ、時に考古学資料を援用しつつ実証的に検討がこころみられている。編集には前代の宮古史伝を特に意識したようすがなく、前書に記載されている按司、城以外のものが登場している。検索の結果、下記の18件になった。

1．石原城　2．大浦多志城　3．糸数城　4．保里城　5．西銘城

6．パギ嶺城　7．喜佐真城　8．大嶽城　9．高腰城　10．内立城

11．上比屋山城　12．野　城　13．汀真嘉城　14．久場嘉城　15．新腰城

16．久知名城　17．飛鳥城　18．外間根間城

先記の文献等には城の記載がないが、七兄弟、与那覇原軍目黒盛豊見親という豪族もみられる。さらに、その他の文献の『遺老説伝』には多良間島に嶺間按司、大立嶺按司、土原豊見親春源、水納島にはミンナペー世主などが登場している。

以上、旧記およびそれに関する文献の城をあげてきたが、宮古諸島を文献でみるかぎり、いわゆるグスクと称するものは一般的ではない。沖縄諸島と異なり直接的に城の字が使用されている。このことは、それが当時、グスクと呼ばれていたものを、あえて城に当て代えたのか、あるいは、記録時期にはそもそもその語彙がなく、城の字が選ばれたのか定かではない。いずれにしても、当代（14世紀相当）の記録は存在せず、本文であつかった旧記、その他の文献に登場する城や諸按司の抗争などの事柄は、すべて口碑伝承をまとめあげたものである。このことは現在も変わりはない。

主な文献にみえる城（按司）

先に紹介した『雍正旧記』『宮古記事仕次』『宮古史伝』『宮古島庶民史』の各文献と記載された城の重複関係を表にした。表記文字が異なるものや重複を整理すると文献上では少なくとも21件の城を確認することができる。

旧記・史伝等 城（按司）	『雍正旧記』 1727年	『宮古記事仕次』 1748年	『宮古史伝』 1927年	『宮古庶民史』 1957年	備　考 （按司、関係文献等）
1．石　原　城	（伊佐良城）	○	○	○	思千代按司
2．大浦多志城	○			○	大浦たつ豊見親
3．糸　数　城		○	○	○	糸数大按司
4．保　里　城				○	保里天太
5．外間根間城		○		○	目黒盛豊見親
6．西　銘　城			○	○	西銘按司
7．西銘飛鳥城	○	○		○	飛鳥爺
8．パギ嶺城				○	酋長世勝い
9．テラフグ城				○	佐多大人（宮古島旧記並史歌集解）
10．浦島大立城	○				浦島大立大殿
11．喜佐真城			○	○	加那浜按司、喜佐真盛真良
12．久場嘉城	（久場川城）	○	○	○	久場嘉按司
13．久知名城			○	○	久知名按司
14．汀真嘉城				○	
15．大　嶽　城	（大嵩城）	○	○	○	大嵩按司
16．高　腰　城	○	○	○	○	高腰按司
17．内　立　城			○	○	内立按司
18．新　腰　城			○	○	新腰城の女按司
19．野　　城				○	野城の按司（あやぐ）
20．金志川城	○				金志川豊見親
21．上比屋山城				○	

第38図　主な文献上の城（按司）とその配置

注）

・印を付していない城はその位置が不明なものである。

（新腰城、内立城、久知名城、浦島大立城、根間外間城、パギ嶺城、与那覇原軍）

第Ⅴ章　宮古の主要グスクの内容

1．オイオキ原遺跡

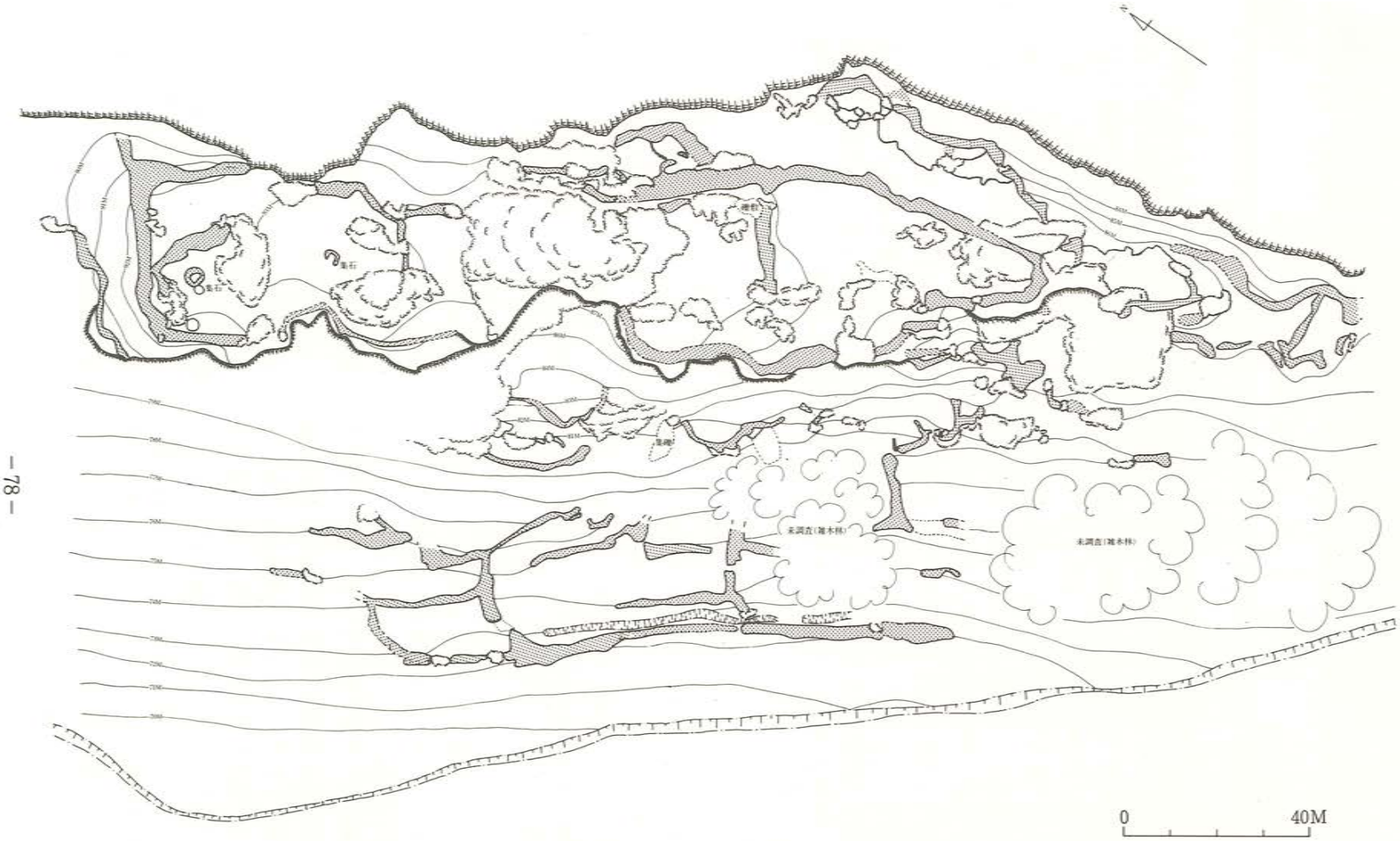
オイオキ原遺跡は標高94mを最高所とする琉球石灰岩丘陵上に形成されている。北側は急峻な崖状をなし、海岸へ延びていく。南側には段状になりゆるやかな傾斜面となっている。南側から望むとほぼ台形状の地形をなす。最上担部からは視界が広く北は島尻方面、西は伊良部島、東は城辺の高腰のあたりまで遠望することができる。北側海岸からの吹上の風が強い為大きな樹木等の生育は少なく底灌木（シャリンバイ、アダン、カヤ）に覆われている。東西に三角形状に長くなっており、上担部だけで東西100m×南北30mとなっている。中央部で岩が突出し東西にフラットな面を作る。

城内はあちこちに小さなくぼ地があり、その周縁部を石で囲んだものもみられる。また、上担部や崖下においては、暗褐色の土壌が堆積しており土器や陶磁器が採集される。上担部での試掘では鉄製の刀子が出土した。形状は沖縄本島のグスクから出土する資料に概ね類似する。陶磁器の資料では16世紀の青磁碗が含まれており、土器では鍋形（外耳）や壺形の器形をなすものがある。

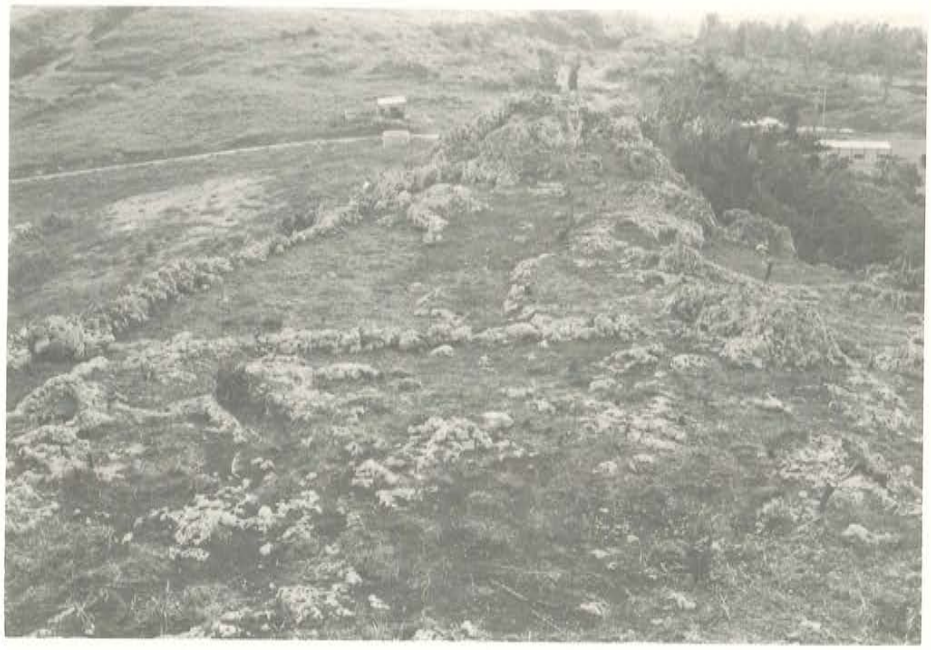
石積みは全て野面となっており、上担部では丘陵の縁辺に沿って取り囲んである。縁辺部でも低くなっている部分は高く岩と岩の隙間を埋めるように積まれている。したがって内側から見れば1m前後の高さでも外側から見ると2～3mとなっている。石垣の基礎の部分では、幅が広くとられており、斜面全体に石が取り巻いているようにも見える。あるいは積み上げた部分が崩落し下の部分まで厚みを増している状態であったかもしれない。今後、さらに検討する必要があろう。また、内部の方では段状になった境から石を積んであり、明らかにフラット面ごとに区分けした状態となっている。このように最頂部の部分を積んだばかりでなく、丘陵の底辺部にも小さなフラット面を作る形で石を積んであるのも見られた。高さはさらに低く内側からは50～60cm前後、外側からは約1m前後となっている。いずれも小さな不定形な囲みが出来ており、どのような機能、施設が存在していたのか検討がつかない。

特に南側においてよく残っている。フラット面中心に見ると上担部、中担部、下担部として分けることが出来それぞれの縄張りで石が積まれている。上担部の西側よりには円形状に石を積み上げたところがあり拝所として捉えられるものである。

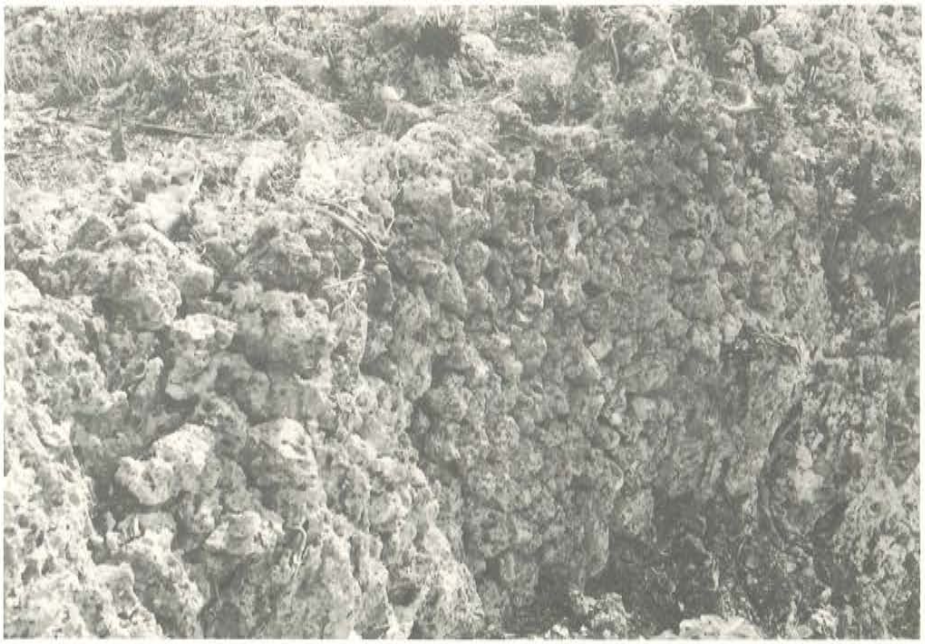
図版23は石積みが高く最もよく残っている部分であるが、岩と岩の隙間をきっちりとうめあわせて壁を作っている。野面積みの中でもやや荒い積み方となっている。その脇を登って上担部に入っていった可能性がある。立地、地形等から見る限りにおいては、沖縄本島及びその周辺離島において見られるグスク遺跡に類似するものがあり今後、宮古地区の中におけるグスク遺跡の形態分類の一つの指標になるものと考える。



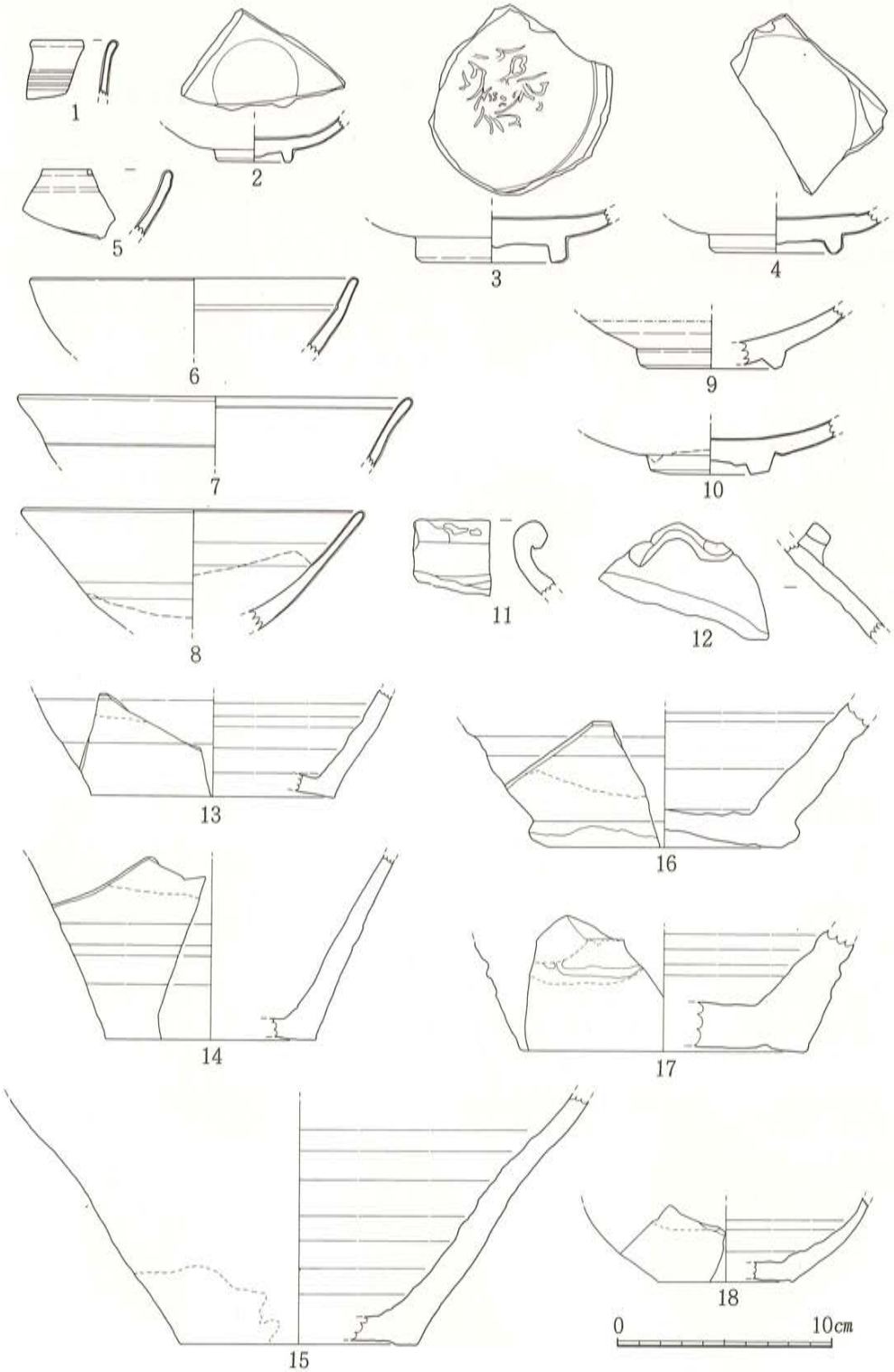
第39図　オイオキ原遺跡縄張り測量図



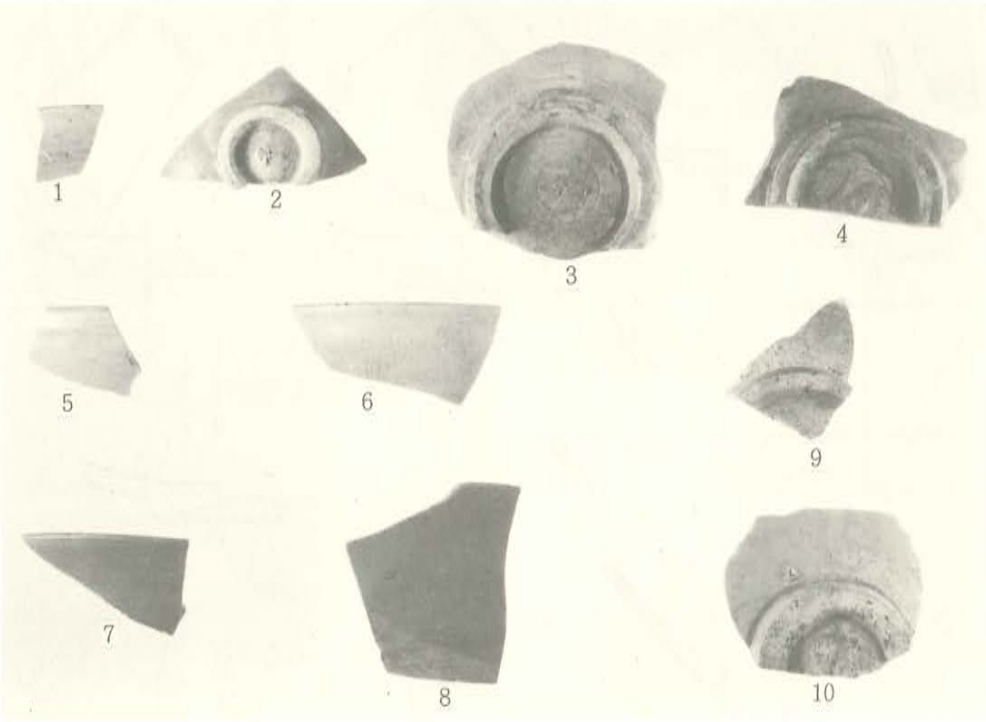
図版22　上、最上担の郭
　　下、同　　上

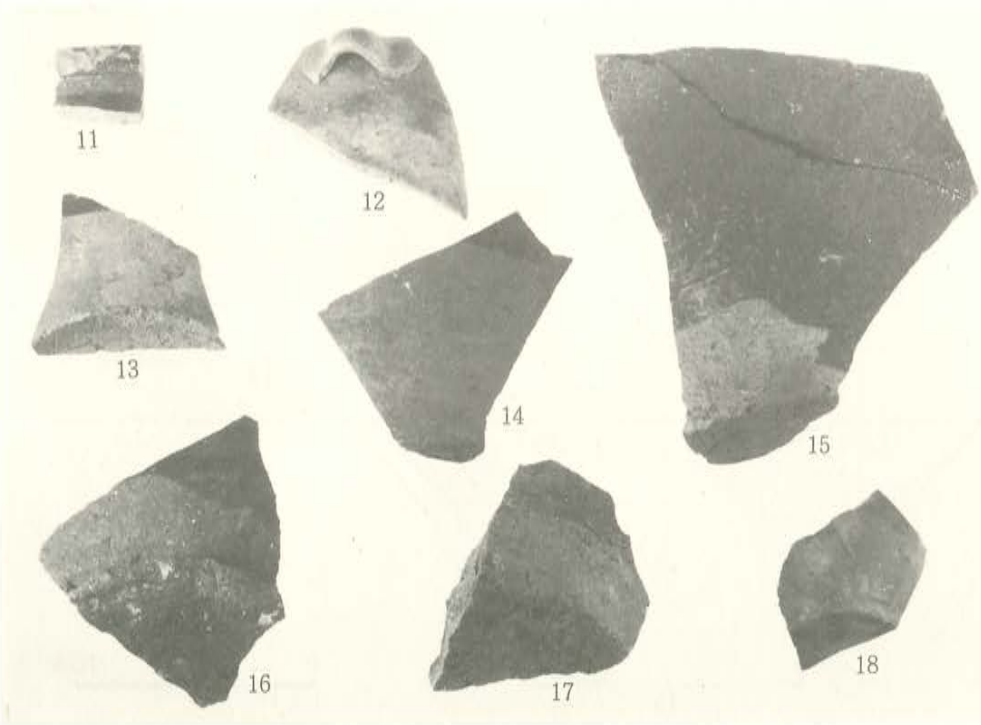


図版23　上、南側に取り巻く石積み
下、同　　上

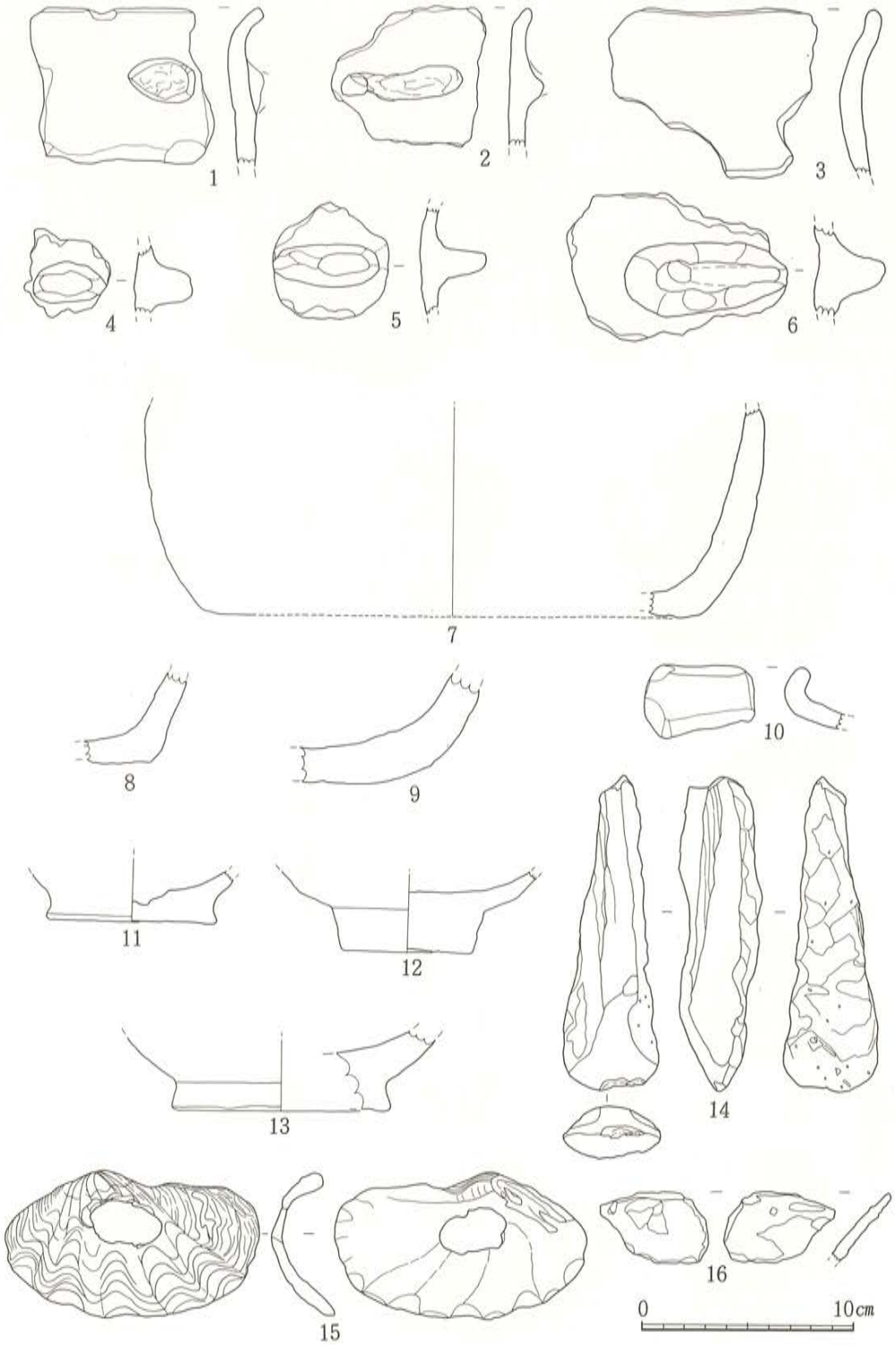


第40図　オイオキ原遺跡採集遺物（1～4．青磁、5～10．白磁、11～17．褐釉陶器壺、18：褐釉陶器茶入れ壺）





図版24　オイオキ原遺跡採集遺物



第41図　オイオキ原遺跡採集遺物（1～13. 土器、14：シャコ貝製貝斧、
15：シャコ貝有孔製品、16：鉄鍋）

図版25　オイオキ原遺跡採集遺物

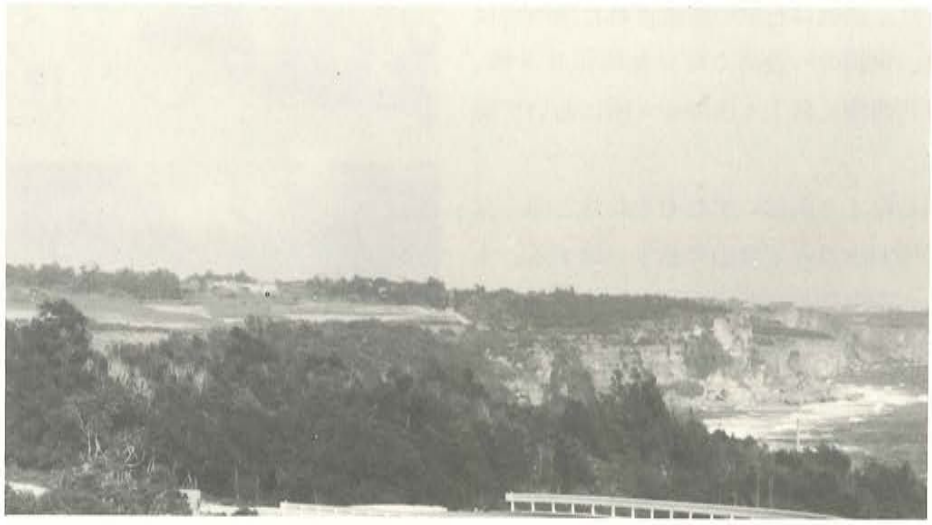
2．箕島（ムイズマ）遺跡

城辺町字仲原に所在する。 仲原部落の南東側を南北に延びる標高65m前後の丘陵上に形成されている。 本丘陵の端は海に迫り、 その部分を通り海岸道路が東西に走る。海岸は切り立った断崖が続いている。

本遺跡は丘陵に沿ってみられる農道から崖側（東側）へ石垣の部分が確認され、農道の西側にある畑地では包含層が露出しており、遺物の散布も顕著である。今回の分布調査の一環で部分的に石垣が確認されている崖側全体の伐採を行い、全体図（平板測量）を作成するとともに試掘も合わせて実施した。以下、調査の概要について簡単に述べる。

本遺跡が立地する丘陵は南西側に緩やかな斜面が広がり、北東側は急斜な崖になっている。南西側に展開する緩斜面の上部の畑地では包含層と考えられる黒色土がみられ、遺物も多く散布している。この緩斜面のほとんどが畑地（サトウキビ畑が多い）として利用されている。この緩斜面は約1㎞付近のところから次第に高くなっていき、箕の済村跡遺跡の所在する丘陵（標高90m前後）に至る。その丘陵の延長線上の海岸（箕島の南西約1㎞）にはムイ川がある。北東側の崖下も畑地が多く、約500m東には同じような方向へ走る丘陵が位置する。そのため南西側の方の視野が広くなっている。

丘陵部は一部に石垣が確認されたが、モクマオウ・アダン・ススキ・サルカキミカンなどが密生しており、伐採を行い石垣の広がりを追いかけていった。そうすると遺跡の範囲は予想外の広さあり、遺跡全体の状況をつかむのは2年度にまたがってしまった。



図版26　遺跡遠景

まず、石垣の確認されている所（海岸道路から約100m陸側へ入った所）を目安にして伐採作業を開始した。伐採していくと一回りする石垣と東西方向へ延びる石垣が確認できた。西側の方へ石垣を追いかけ、その後東側へ作業を進めた。その結果、伐採作業を着手した所から西側へ約110m、東側へ約120m石垣が延びていることが判明した。しかし、東側はさらに延びており、その部分については次年度に持ち越すことになった。南北方向の範囲は丘陵の南西側の面標高60m前後のところにみられる農道（遺跡への進入路として利用）から北東側の崖面までで、最も幅のあるところで約70mを測る。

2年目は東側への石垣の延びを追いかけるとともに4ヶ所の試掘を行った。石垣は大きく露頭している琉球石灰岩の岩盤に接続するように廻らされて終結していた。今回の調査により東西の範囲も確認された。本遺跡の範囲は南北約70m、東西約300mに及ぶことが判明した。試掘は石垣の確認された場所のほぼ中央、東側の一段高くなった所に2ヶ所、西及び北西側に各1ヶ所の4ヶ所において実施した。

試掘した4ヶ所はいずれもそれほど深くなく、20〜30cmほどで地山の赤土に達する。土器・輸入陶磁器のほか滑石製品が1点得られている。貝類・獣魚骨類は少なく、後者はウシの骨が多いようである。また、調査の最中に地表面にも注意をはらったが、石垣部で若干遺物が採集できただけで、それ以外ではほとんど遺物の散布はみられなかった。

図版27　作業風景

遺跡の状況

２年度にまたがって行った伐採作業により、本遺跡の範囲が明確にされた。その結果、遺跡地全体がフラットな面を形成するわけではなく、緩やかな斜面部やいたる所に露頭している琉球石灰岩の岩盤などをうまく取り込んで石垣を廻らしていることが判明した。

石垣は野面積みで一部に高く残っているが、全体的にみると保存上態はよくない。遺跡の中央部から北側では比較的フラットな面がみられ、そこでは割りと広く囲んでいるが、南側の斜面地においては細かく区切っている。ひとつの区画はできるだけ平坦になるように石垣を廻らしているように思われる。

石垣囲いの形状をみると、遺跡のほぼ中央に略長方形状の区画が二重にあり、南側・北側へ略方形状の区画が広がる。北端側のものは三角形状の囲いになっている。それぞれの石垣囲いの大きさをみると、中央の略長方形状を呈すもののうち東側のものは東西約20m、南北約50mで、西側のものは東西約25m、南北約80mである。この長方形状の区画に南接する略方形状のものが、一辺約40mの広さを有し、南側の細かく区切られた所で一辺が約15mである。

北側のものをみると中央寄りのものが一辺約25mあり、それに隣接するものは東西が約25m、南北が約35m、東側の小さなものが一辺15mとなっている。北端部のもは南側が底辺となる二等辺三角形状に石垣が廻らされ、底辺部の長さ約25m、底辺から頂部までの長さ約50mである。その北側にも岩盤を利用して方形状に石垣を廻らした所（10m前後の幅）や岩盤と岩盤をつなぐように石垣が配される所などがみられる。

遺跡のほぼ中央に位置する一段高くなった所（南北約20m、東西約50m）は比較的フラットな面を形成するが、岩盤の露出している所も少なくない。岩盤を利用して石垣が廻っており、西側は高く積まれている。残り具合も比較的良好である。南西側と北側に石垣の途切れた部分が１ヶ所づつ見受けられる。本区

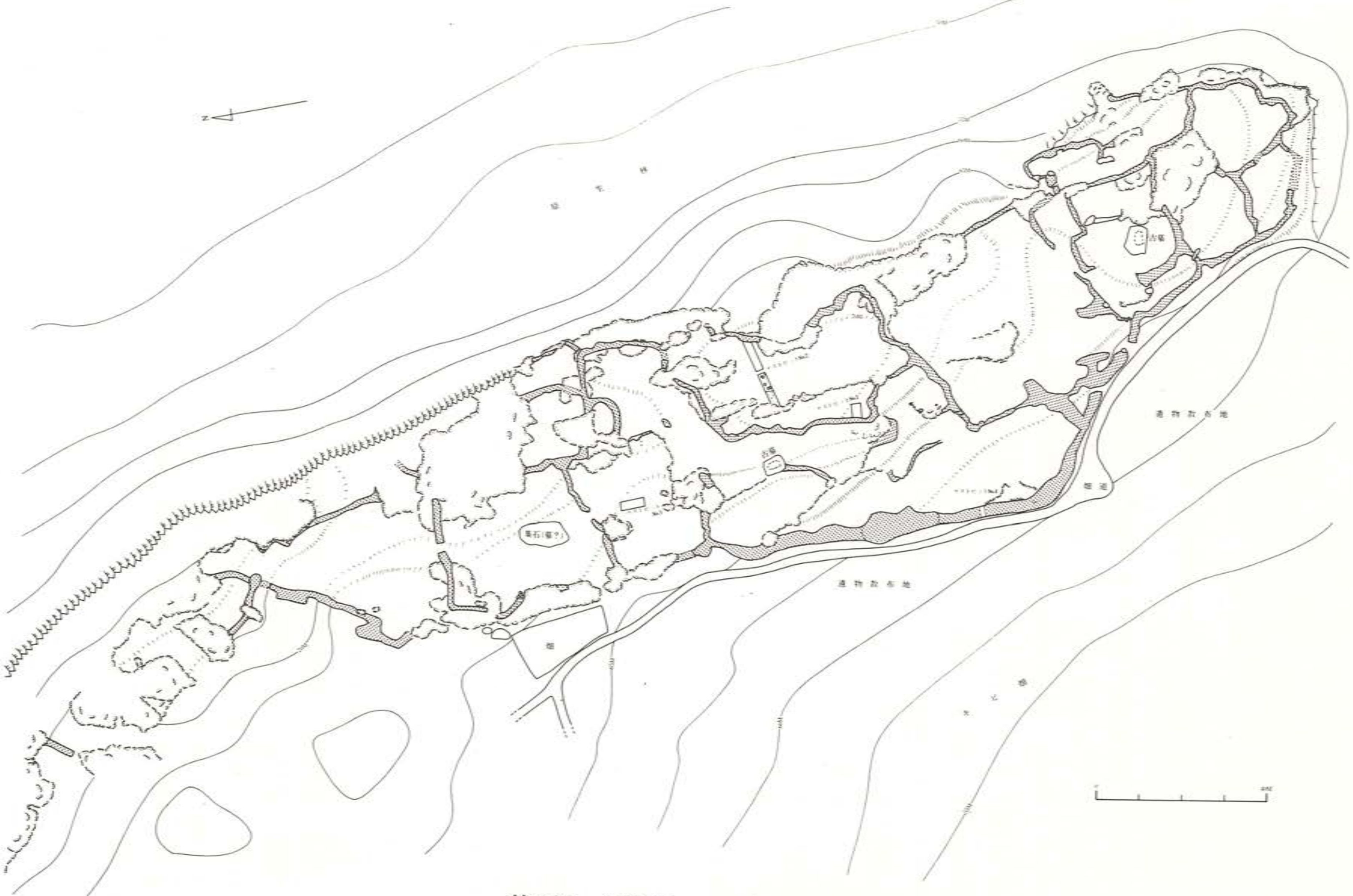
図版28　遺跡内の状況

画内の２ヶ所に試掘穴を設けて発掘を行ったが、明確な包含層や遺構などは確認されなかった。

それを囲むように配される低い段の区画内は緩やかに西へ傾斜している。数段の石積みがみられる部分や岩盤の露出により、部分的に小さな段をつくる。この段の北東寄りの所には石を方形状に積んだ墓（ミヤーカ）と考えられるものも１基見受けられた。この段の石垣（外側の石垣）はほとんど崩れ落ちているものの、その状況からすれば本遺跡の中でもしっかりしたものであったかと想定される。

北側の石垣をみると遺跡内を行き来できる門のようなもの（石垣の途切れた部分）のほか、外側を廻る石垣にも積み石の途切れる部分がみられるが、南側では見受けられず全体としては判然としなかった。また、南側の石垣で細かく区切られた所でも墓（ミヤーカ）と考えらる長方形状の石積み部がみられた。

図版29　遺跡内の状況



第42図　箕島（ムイズマ）遺跡実測図

遺　物

今回得られたものは農道西側畑地からの表面採集資料、石垣がみられる地域からの表面採集及び試掘による資料があり、それぞれの資料について簡単に述べる。なお、特徴的なものを第43図〜第45図に示した。

西側畑地からの採集資料には青磁・染付け・褐釉陶器・須恵器・鉄製品などがある。青磁はほとんど15世紀前後のもので、１点づつ得られている須恵器・染付けは時期幅を示しているようである。鉄製品は鍋の破片かと思われるものが数点得られている。

石垣が廻る所からの表採資料には青磁・白磁・褐釉陶器・土器・須恵器などがある。青磁は碗だけで、概ね14〜15世紀頃のものかと考えられる。白磁は点数はすくないがビロースクタイプの碗と考えられる。褐釉陶器は口縁部の資料をみると頸部がやや長い縦耳のもの、頸部の短い横耳のものがみられる。土器は横耳の付される鍋形のものが多く、壺形は少ない。須恵器は１点だけ得られている。

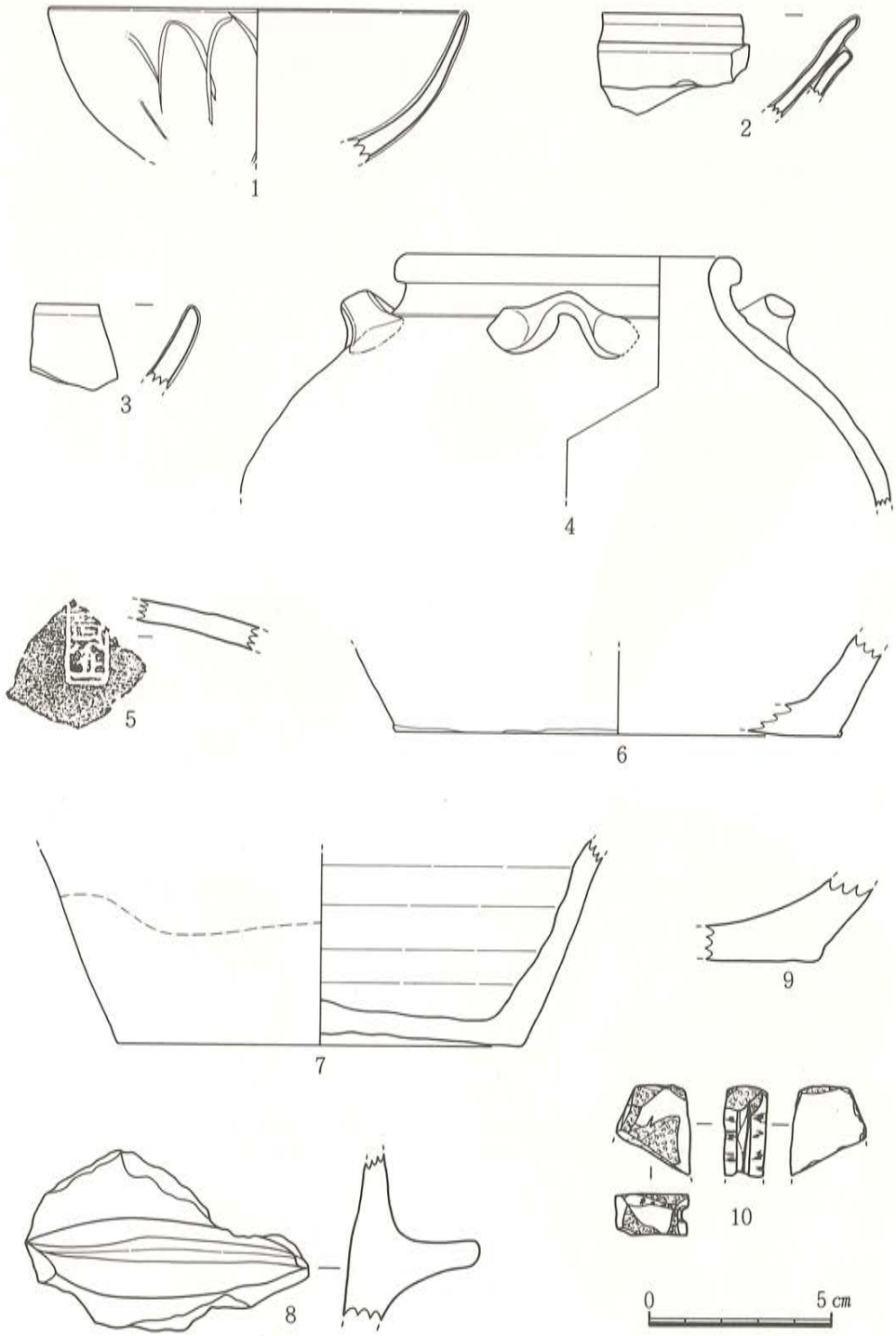
試掘によって得られたものには、青磁・白磁・褐釉陶器・土器・滑石製品・鉄製品などがある。青磁のなかに１点だけ14世紀に属すかと思われる蓮弁文碗の口縁部が含まれる。白磁は小破片ながらビロースクタイプの口縁部が見受けられる。褐釉陶器は口縁部が玉縁状に肥厚するものがみられる。土器は横耳を付した鍋形の資料が１点あり、壺形の資料も１点みられる。

注目されるものは滑石製品である。滑石製鍋の破片を利用しており、両面はその時の面を残している。割れ面をかるく研き、一方の割れ面のほぼ真ん中に５㎜ほどの溝を設ける。破損しているため全体形や詳細については不明。

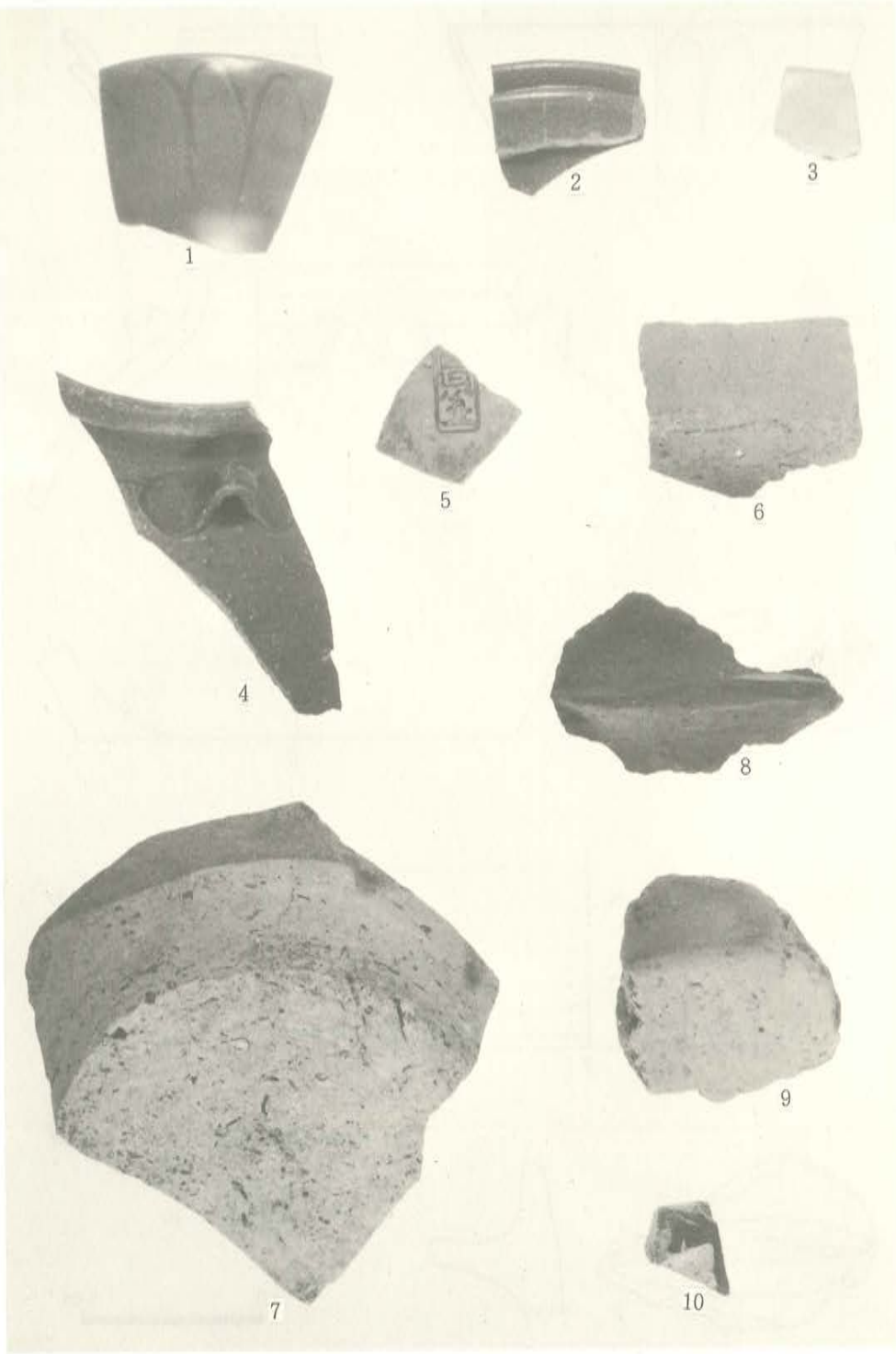
鉄製品は板状の小破片が若干得られている。

以上、今回の調査の概要を述べてきたが、ここで若干のまとめをしておく。石垣の廻らされる範囲は東西約350m、南北約70mを有すことが判った。その中で露頭している岩盤をうまく利用し、地形をみながら石垣を廻らしている。伝承では首長のいる村跡の話が残っているようであるが、遺跡そのものの性格についてははっきりしなかった。

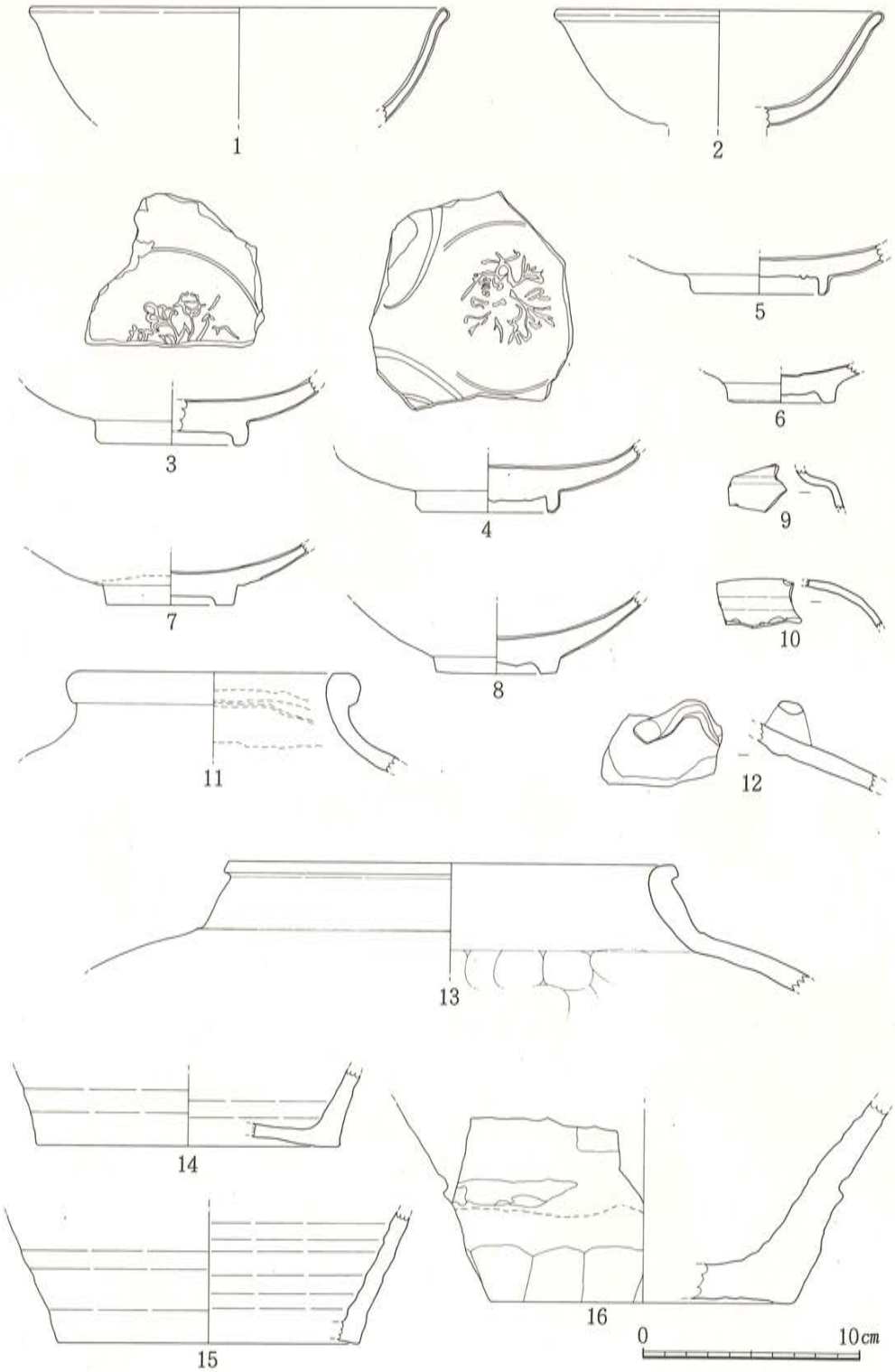
時期的な面からみると、採集された遺物から14世紀前後かと考えられるが、須恵器・滑石製品なども得られており、もう少し古くなる可能性もある。遺物の面からは土器では野城式と呼称されるものに含まれるかと考えられるものが目につき、褐釉陶器では茶入れ壺の資料が比較的目に付いた。また、これら遺物の招来されたルートなど今後に残された課題も多い。



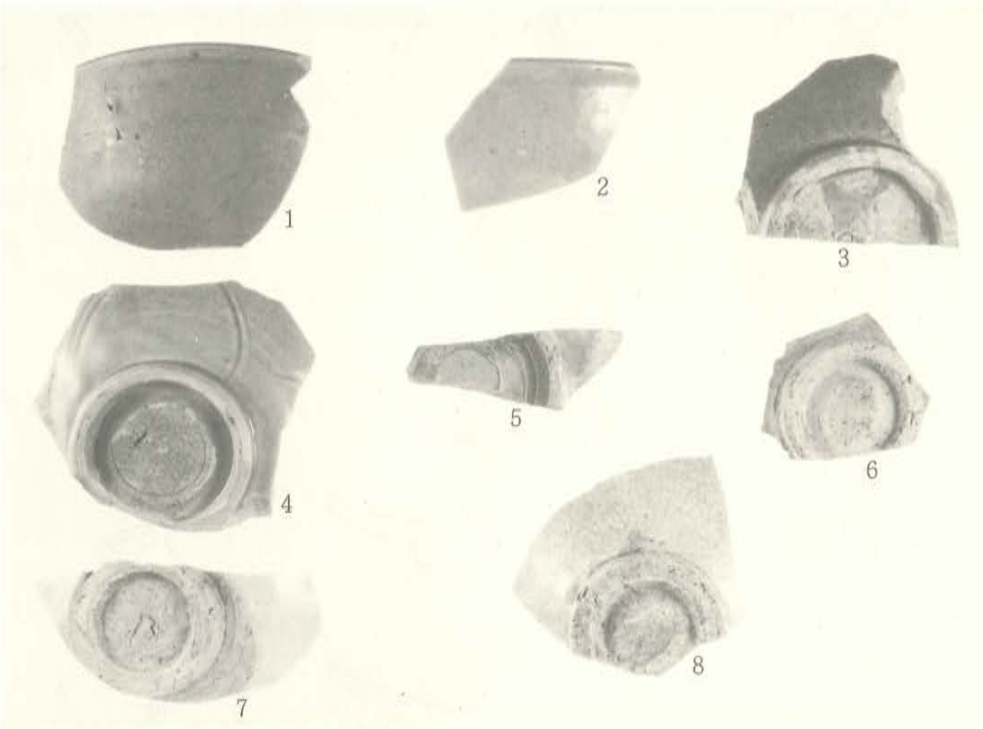
第43図　箕島（ムイズマ）遺跡出土遺物（1・2：青磁、3：白磁、4～7：褐釉陶器、8・9：土器、10：滑石製品）

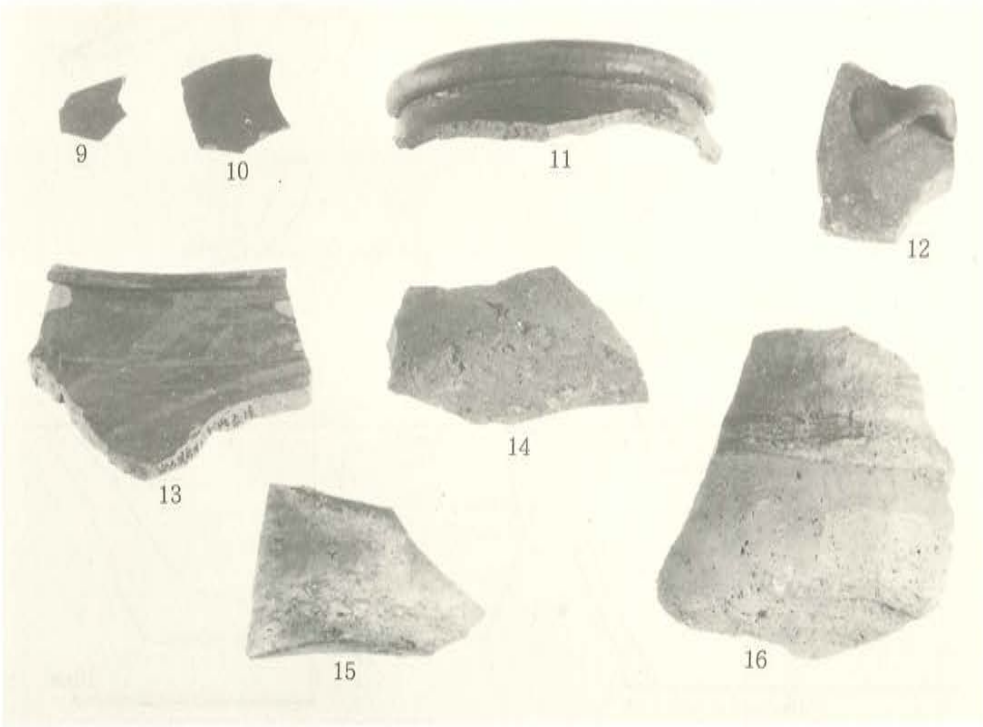


図版30　箕島（ムイズマ）遺跡

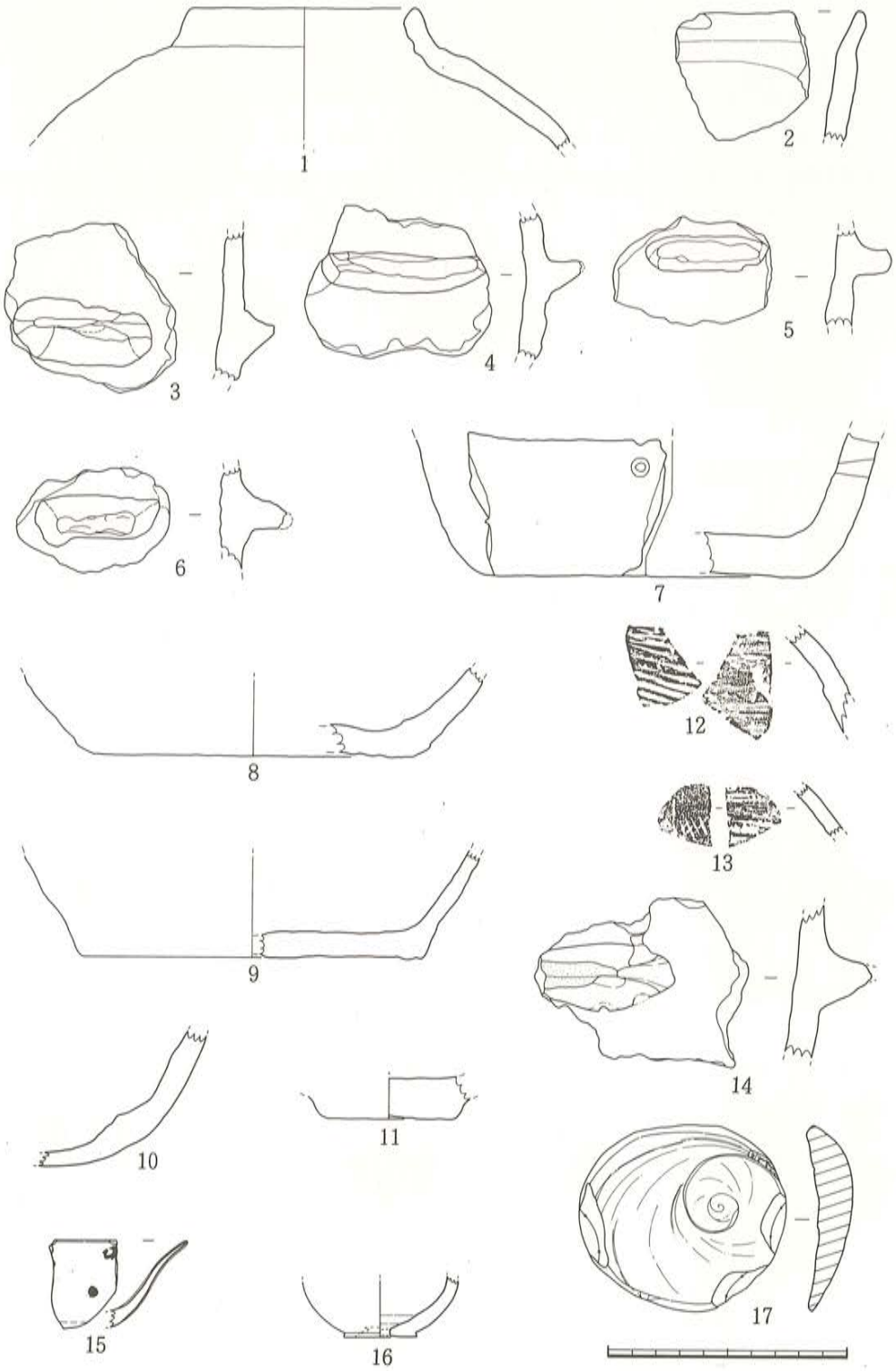


第44図　石垣内採集遺物（1～6：青磁、7・8：白磁、9～16：褐釉陶器）

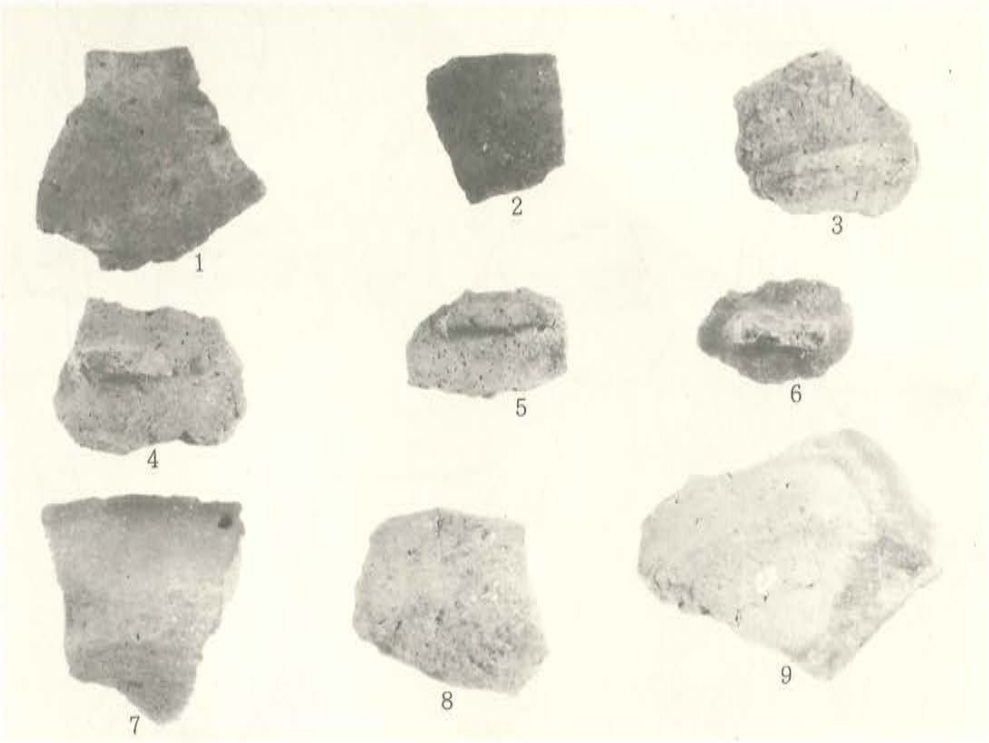


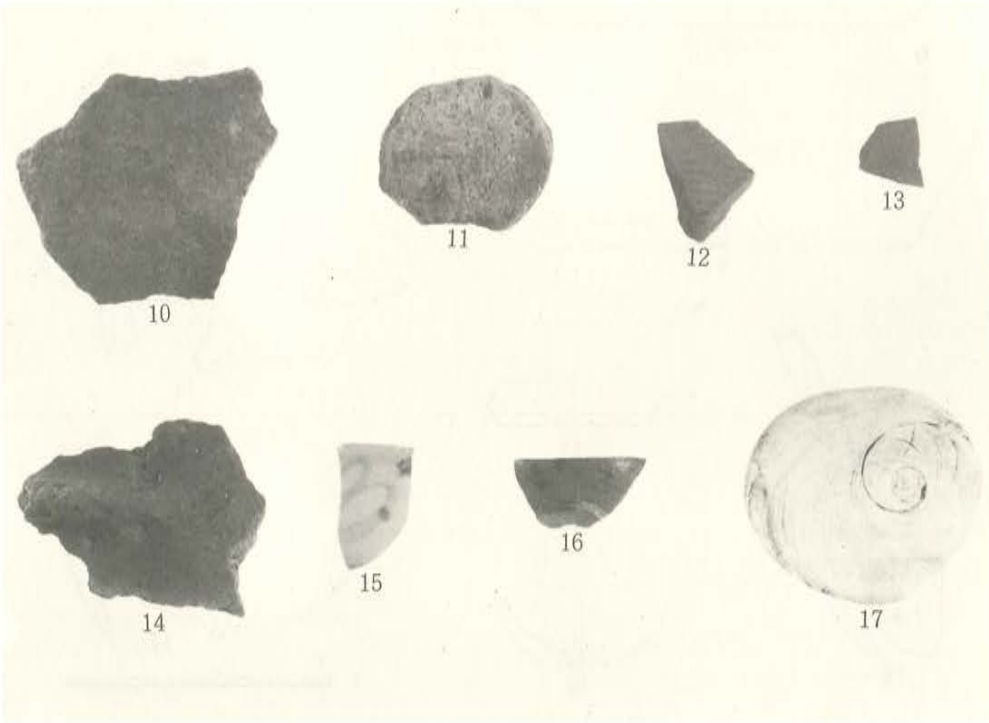


図版31　石垣内採集遺物



第45図　箕島（ムイズマ）遺跡採集遺物（1～12:石垣内表採、13～17:西側畑地表採）





図版32　箕島（ムイズマ）遺跡採集遺物

3．高腰城跡

高腰城跡は、城辺町比嘉部落の北方の丘陵上（標高108～113m）に形成されている。

本城跡は、高い山の少ない宮古島の中でも最高所に在り、城跡の上に立つと北に大神島、西に伊良部島、南に野原岳丘陵が眺望できる要所の位置にある。また、城跡の北東部には城主・高腰按司が使用したと伝承される按司ノ泉（アズヌカー）（湧泉）が在り、南方約2.2 kmには城主・高腰按司を祀ったと伝えられる高腰神社（御嶽：城跡への遙拝所）がある。

城跡の立地する丘陵は、南東から北北西にかけて舌状に延びており、南東部では馬背状をなして緩やかになっているものの、北側から南西部にかけては急崖をなしている。この丘陵の西側部に城跡としての石積みを有している。石積みは概ね隅丸長方形状をなし、その中に3～4の郭（間仕切り）があり、南側部には城門を持っている（図1参照）。

遺跡の正確な範囲と性格を把握する目的で、1985～1987年度の三次にわたって、城辺町教育委員会によって発掘調査が実施された（盛本編1988, 1989）。

調査によって得られた遺物は、大別して人工品と動物遺体に分けられる。前者は土器が最も多く、次いで輸入陶磁器、類須恵器などがある。その他に、古銭や鉄製品なども僅かながら含まれる。後者では，家畜獣のウシ骨がめだつ。貝類では、シャコガイなどの暖海産大型貝を主としてマガキガイやチョウセンサザエ、イソハマグリ等の中～小型貝なども比較的多く含まれている。魚類では、珊瑚礁内外に棲息するブダイ類やハリセンボン等が含まれるが量的には少ない。

土器は、そのほとんどが口縁部直下に外耳を付した鉢もしくは鍋形器形である。これらは，器形や胎土などの諸特徴からして所謂「野城式土器」（下地1978）と把握されているカテゴリーに含まれるものである。

輸入陶磁器には、青磁、白磁、青白磁、褐釉陶器等が含まれる。これらは，その多くが13～14世紀代に属するもののようである。青磁は無文碗がほとんどであるが、特徴的なものとして劃花文、櫛描文（珠光青磁）、鎬蓮弁文、弦文の碗や皿、内底面に印花文を施す碗などがある。白磁では、玉縁口縁や口禿げの碗が少量含まれる他は、そのほとんどが所謂「ビロースクタイプ」（金武1988）と称されている碗である。この中でも、内底面に櫛掻文を施し、口縁端部をわずかに外反させるⅠタイプは少なく、その多くが内灣する厚手のⅡタイプである。褐釉陶器は、壺と鉢（洗）の二者があるが、鉢（洗）は1点のみで、その多くが壺である。壺の口縁部形態は、端部が玉縁状をなすものがほとんどであり、長方形状に大きく肥厚する大型壺はみられない。類須恵器は、肩部に波状沈線文を施すものや、内外面に格子目・羽状等のタタキ痕を有すものなどがある。これらは，概して近年南島におけるこの種の製品の窯跡群として明らかになった徳ノ島のカムイヤキ古窯跡群産（新東・

青崎1985, 新東・他1985）の範ちゅうで把握されるものであろう。鉄製品はほとんどが砕片のため、原形については判然としないものの、板状のものは鉄鍋等の破片の可能性があろう。形状の判るものに有茎の鉄鏃？がある。古銭は錆ぶくれがひどく、銘が判然としないものが多い。そのうちの2点には対峙する両端に小孔が穿たれ、垂飾品に転用されていた可能性がある。

以上に簡述してきたように、本城跡は宮古諸島の中でも数少ない石積みを有す遺跡であることが把握できたとともに、発掘調査によってその規模や構造, 築造時期等の一端を明らかにし得た。本城跡を含めた城辺町北方海岸一帯には、立地環境、出土遺物等の諸点で本城跡と類似する遺跡が多い。立地環境としては、その多くが海岸に迫り出すか、若しくはその近傍の独立、または舌状の丘陵台地上に形成されるという特徴を具備している。これらのほとんどは、出土および採集遺物等からして13〜14世紀代に押さえられるようである。しかし、ほかの多くの遺跡が丘陵上に立地し、時期的にも本城跡と概ね並行関係にあるものの、これまでに述べてきたように石積みを有する点では異なる。時期的にも並行関係にあり、かつまた同様な立地環境にありながら、このような石積みの有無という差異は何を示唆しているのであろう。今後の研究を要するところである。

また、問題点として、グスクそのものの縄張り構造や周辺遺跡との関係などついても考究していかなければならないことは多言を要しないであろう。さらに、その形態構造上の沖縄諸島や八重山諸島域との比較をも要求される。

＜参考文献＞

金武正紀、1988：ビロースクタイプの白磁碗について。貿易陶磁研究。N0.8。P148〜157。日本貿易陶磁研究会。福岡。

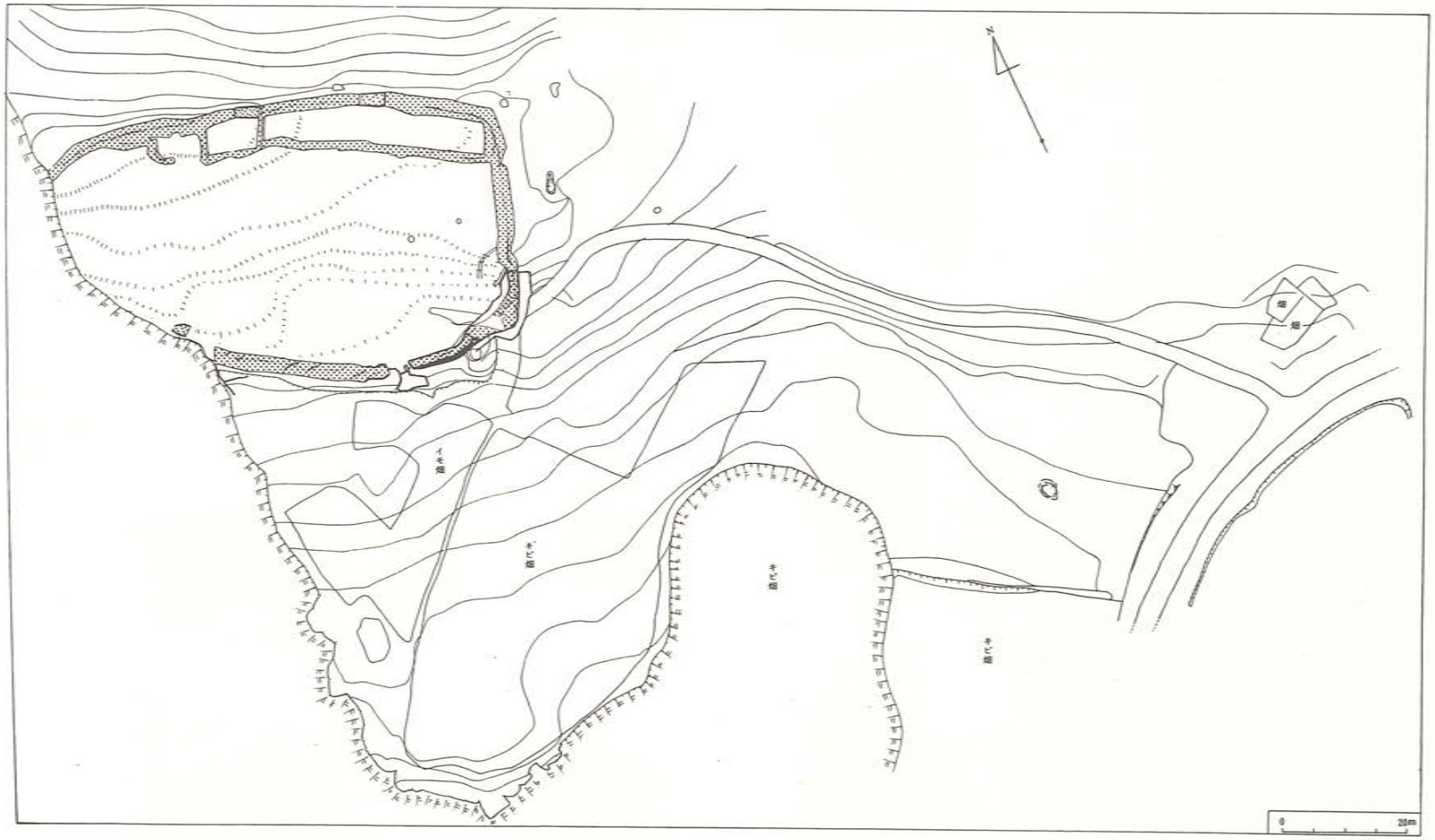
下地和宏、1978：野城（ぬぐすく）式土器について。琉大史学。第10号。P34〜49。琉大史学会。那覇。

新東晃一・青崎和憲, 1985：カムイヤキ古窯跡群Ⅰ－昭和59年度重要遺跡確認調査－。伊仙町埋蔵文化財調査報告書(3)。伊仙町教育委員会。鹿児島県伊仙町。

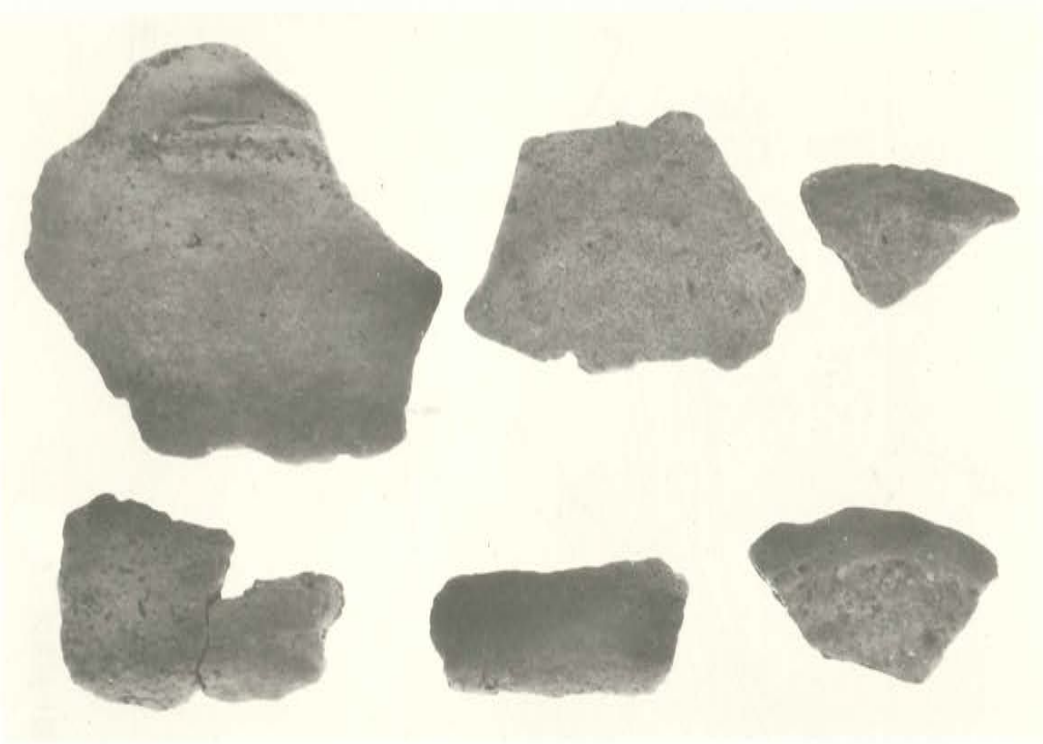
新東晃一・他, 1985：カムイヤキ古窯跡群Ⅱ－ため池等整備事業（木之又地区）に伴う発掘調査－。伊仙町埋蔵文化財調査報告書(5)。伊仙町教育委員会。鹿児島県伊仙町。

盛本勲・編, 1988：高腰城跡範囲確認調査概報。城辺町文化財調査報告書第3集。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。

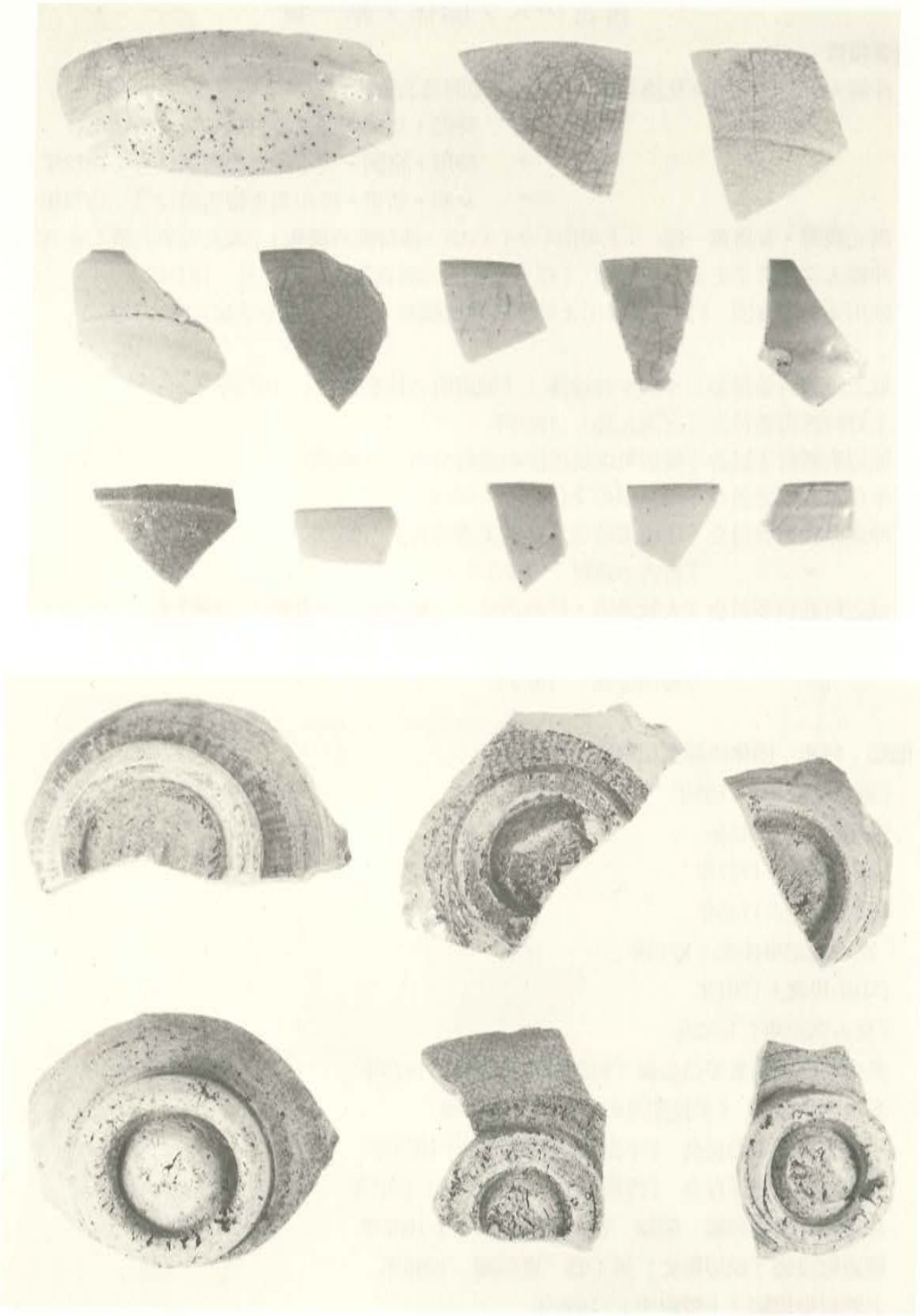
――――、1989：高腰城跡－範囲確認調査報告書－。城辺町文化財調査報告書第5集。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。



第46図　城辺町高腰城縄張り測量図



図版33　上、土器
　　下、類須恵器



図版34　白磁碗（上：ビロースクタイプ、ほか、下：底部）

宮古グスク関係文献一覧

調査報告

沖縄大学沖縄学生文化協会編 『郷土』池間島調査報告　第５号　1967年
〃　〃　狩俣・島尻調査報告　第９号　1970年
〃　〃　砂川・宮国・久松調査報告第11号　1972年
〃　〃　友利・新里・砂川調査報告第12号　1973年
嵩元政秀・友寄英一郎 「上の頂（ウイヌツズ）遺跡調査概報」『琉大史学』第４号 1973年
沖縄大学沖縄学生文化協会編 『郷土』来間島調査報告　第13号　1974年
砂川元島調査団 『宮古島砂川元島遺跡発掘概報』一次　青山学院大学　1975年
〃　〃　二次　〃　1976年
城辺町教育委員会「マムヤ井遺跡」『城辺町の社会教育』 1979年
上野村教育委員会『宮国元島』 1980年
城辺町教育委員会『城辺町保良地区の遺跡分布』 1980年
平良市教育委員会『平良市の文化財』 1981年
沖縄県教育委員会『住屋遺跡緊急発掘調査報告』 1981年
〃　『宮古の遺跡』 1983年
城辺町教育委員会『大牧遺跡・野城遺跡』一範囲確認調査報告一1987年
〃　『高腰城跡範囲確認調査概報』 1988年
〃　『砂川元島』 1989年

旧記、村史、団体の調査記録等

『御嶽由来記』1705年
『球陽』　1745年
『雍正旧記』1727年
『遺老説伝』1745年
「宮古島記事仕次」1748年
『中山世鑑』1701年
『宮古島記事』1852年
多良間村史編纂委員会編『村誌　たらま島』1973年
多良間村役場 『多良間島の文化財』1974年
平良市史編纂委員会 『平良市史』第１巻　1979年
野原民族芸能保存会 『野原のマストリヤー』1981年
沖縄県立博物館編　図録　特別展『グスク』1985年
城辺町役場『城辺町史』第１巻　資料編　1985年
上野村役場編『上野村史』 1986年
宮古郷土史研究会　シンポジュウム「稲村賢敷と宮古研究」『宮古研究』第５号　1989年

論文、総論、その他

藤田豊八　「琉球人南洋通商の最古の記録」　1971年

慶世村恒任『宮古史伝』 1972年

稲村賢敷　『宮古島史跡めぐり』郷土研究会　1950年

〃　「琉球諸島における倭冠遺跡の研究」1975年

〃　『宮古島庶民誌』 1957年

〃　『宮古島旧並史歌集解』 1962年

金子エリカ「久松の巨石墓」『沖縄文化』第5巻　第3・4巻　1967年

宮古民俗文化研究所編　『南島』第三巻　1969年

金子エリカ・ヘルベルト・メリヒヤール『保良元島遺跡』asian and pacific archaeology №4

下地　薫「倭冠遺跡か貿易遺跡か」『琉大史学』 第4号　1973年

大川恵良「伊良部郷土史」　1974年

安里　進「沖縄陶器の影響を受けた宮古式土器について」『やちむん』第5号

砂川明芳「宮古の古代への一つの探求―密牙古の正体をめぐって―」『史学雑誌』1975年

〃　「宮古島郷土史考」　第1部　1976年

〃　「邪馬台国へのアプローチ」　1977年

下地和宏「野城式土器について」『琉大史学』第10号　琉大史学会　1978年

〃　「宮古島の土器文化―その時期区分について―」『宮古研究』創刊号　1978年

宮国定徳「宮古の石工技術の発達について」『宮古研究』創刊号　1978年

仲宗根将二「慶世村恒任の宮古研究について（試論）」　宮古研究　創刊号　1978年

上地盛光『宮古島与那覇邑誌』 1979年

中間井左六『宮古お嶽集』 1980年

下地和宏「かあんつ村の遺跡　同部落の形成課程に触れて」宮古研究第2号　1981年

〃　「宮古の古代社会―倭冠の問題を中心に―」青い海　第11巻4号　1981年

砂川明芳『宮古島郷土史考』 第2部　1981年

宮城栄昌・高宮廣衛編　『沖縄歴史地図』考古編　1983年

下地和宏「新腰の女按司について」『宮古郷土史研究会会報』 1984年

〃　「考古学にみる宮古」『新沖縄文学』61号　沖縄タイムス　1984年

下地利幸「金盛・那喜多津兄弟のこと」『地域と文化』第20号　1984年

金子エリカ「保良遺跡発掘20年後」　沖縄文化協会　64　1985年

下地和宏　沖縄「グスク時代の宮古」『おきなわ文化協会66』1986年

砂川明芳「宮古島郷土史考」　第4部　1986年

下地和宏　沖縄「グスク」の宮古・八重山　63号　1987年

索　　引

〈ア行〉

アラスト遺物散布地 …… 9・10
天川遺跡 …… 67～71
新腰城（アラゴシ）…… 73～76
石原城遺跡（イサラバリ）
…… 5・9・10・11・20～22・73～76
伊良部長浜遺跡 …… 60・61
伊良部元島 ……60・61
伊佐良城 ……72・75
糸数城 …… 73～76
上原遺跡 …… 9・10
上の頂遺跡（ウイヌツズ）
…… 5・9・10・11・14・15
大浦多志城（ウプラタティ）
…… 5・9・11・16・17・72・74～76
上比屋山遺跡 …… 5・11・31・33・42～45
内立の按司 …… 37・75・76
運城御嶽遺跡（ウングスク）
…… 5・11・65～71
土原遺跡 …… 67～71
内立城 …… 73～76
大嶽城跡…… 5・11・49～51・73～76
上地カナイダ遺跡 …… 55・59
大神遺跡 …… 9・10
オイオキ原遺跡
… 5・9～11・18～19・77～84
大牧遺跡 …… 31・33
大嶺御嶽遺跡 …… 55・59
大川嶺遺跡 …… 55・59

〈カ行〉

狩俣遺跡 …… 9・10
金志川城 …… 72・73・75・76
喜佐真御嶽遺跡（喜佐真城跡）
…… 5・56～58・73～76
クマザ上方台地遺跡 …… 31・33
来間遺跡 …… 55・59
国仲元島遺跡 …… 60・61
久場川城 …… 72
久場嘉城 …… 73～76
久知名城 …… 73～76

〈サ行〉

サガーニ遺跡 …… 5・9・10・11・26～28
佐多大人 …… 37・75
サマーズ御嶽遺跡 …… 55・59
佐良浜元島 …… 60・62
佐和田元島遺跡 …… 60・62
新里東元島上方台地遺跡 …… 48・52
新里東元島遺跡 …… 48・52
塩川井遺跡（シュガーガー）…… 67～71
島尻元島遺跡 …… 9・10
住屋遺跡 …… 9・10
白明井遺跡（スサカガー）…… 9・10
スサビミヤーカー …… 60～64
すみなれし（保里城）…… 73～76
洲鎌遺跡 …… 55・59

〈タ行〉

高腰城跡（タカゴシ、タカウス）
… 5・11・31・33・36・37・72～76・97～101
テマカ城跡（汀真嘉城）
…… 5・11・48・52～54・74～76
テラフグ城 …… 75・76
友利遺跡 …… 31・33
友利元島遺跡 …… 31・33
遠見台跡 …… 11・43・46・47
飛鳥御嶽遺跡 …… 5・9・10・11・23・29・30

〈ナ行〉

仲宗根豊見親 …… 32
長浜元島遺跡 …… 60・62
西銘城跡
…… 5・9・10・11・23～25・29・73～76
西銘飛鳥城 …… 23・72・75・76
根間城 …… 73～76
野城遺跡（ヌグスク）
…… 5・11・31・33・38～41・66・74～76

〈ハ行〉

波利真遺跡（塩川村跡）…… 67～71
パギ嶺城 …… 74～76
東仲宗根遺物散布地 …… 9・10
船立堂遺跡 …… 9・10
フカイ原遺跡 …… 55・59
フシャトウガー遺跡 …… 67～71
保良元島遺跡 …… 31・33
保里遺跡 …… 10・74～76
外間根間城 …… 75・76

〈マ行〉

マムヤ …… 31・40
牧中御嶽遺跡 …… 31・33
牧の頂遺跡 …… 5・11・31・33～35・65
ミヌガフツ遺跡 …… 9・10
嶺間遺跡 …… 67～71
水納遺跡 …… 67～71
ミズマ御嶽遺跡 …… 55・59
宮国元島遺跡 …… 48・52
盛加井遺跡（ムズガー） …… 9・10
ムトウ御嶽遺物散布地 …… 31・33
箕島遺跡（ムイズマ）
…… 5・11・31・33・42・44・85～96
箕の済村跡 …… 31・33
元屋敷原遺跡 …… 9・10

〈ヤ行〉

山川遺物散布地 …… 31・33
与那覇原軍 …… 16・37・49・76
与那覇遺跡 …… 55・59

沖縄県文化財調査報告書第94集

ぐすく

グスク分布調査報告書(Ⅱ)
―宮古諸島―

印刷　平成2年3月28日
発行　平成2年3月31日

発行　沖縄県教育委員会
編集　沖縄県教育庁文化課

〒900　那覇市泉崎1丁目2番2号（13F）
TEL（0988）66－2731～3

印刷　中丸印刷所
TEL（0988）67－0136